

浜松城跡 12

2018年12月

浜松市教育委員会



浜松城跡 12

HAMAMATSU CASTLE

The 23rd excavation report

Hamamatsu Municipal Board of Education

2018

浜松市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、浜松市中区元城町に所在する浜松城跡の23次発掘調査報告書である。なお、平成27年（2015）に実施した17次調査の成果も併せて掲載した。
- 2 発掘調査は、浜松城公園歴史ゾーン整備事業に先立ち、実施した。現地発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業は、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、浜松市から委託を受けた株式会社フジヤマが実務を担当した。調査にかかる費用は、浜松市が負担した。
- 3 発掘調査にかかる面積と期間は、次の通りである。
調査面積 約33m²
調査期間（現地調査） 平成30年（2018）1月9日～平成30年（2018）3月7日
（整理作業） 平成30年（2018）6月22日～平成30年（2018）12月28日
- 4 発掘調査は、鈴木一有・井口智博（浜松市市民部文化財課）の指示のもと、渥美賢吾、坂下俊介（株式会社フジヤマ）が実務を担当し、山口七奈枝（株式会社フジヤマ）が補佐した。
- 5 本書の執筆は、第1章1を井口、第1章3・4、第2章1の（1）～（4）・（6）、2（1）～（7）・（9）、第3章1を坂下、第3章2・3を鈴木が行い、その他を山口が行った。現地における写真撮影は鈴木と坂下が行った。遺物写真撮影は坂下と山口が行った。
編集は鈴木の総括のもと、実務を山口が行った。陶磁器類の記載については、山内伸浩（株式会社フジヤマ）が補佐した。
- 6 調査にかかる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。

凡　　例

- 1 本書で用いる座標値は世界測地系（8系）に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 2 本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。
教育委員会 → 教委　　(財) 浜松市文化振興財団 → 浜文振
- 3 土層・土器の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
- 4 本書の作成にあたり、以下の方々からご協力・ご指導を賜った。（敬称略、順不同）
加藤理文、北野博司、千田嘉博、間渕亨夫、三浦正幸、向坂鋼二

浜松城跡 12

目 次

例言

凡例

第1章 序 論 1

- 1 調査にいたる経緯 1
- 2 浜松城をめぐる環境 2
- 3 浜松城跡の調査履歴 4
- 4 調査の方法と経過 9

第2章 調査成果 10

- 1 富士見櫓跡とその周辺の調査 10
- 2 天守曲輪の調査 22

第3章 総 括 36

- 1 発掘調査の成果 36
- 2 特筆すべきことがら 38
- 3 今後の展望 40

出土遺物観察表

図 版

図版目次

浜松市を中心とする名所史蹟交通鳥瞰図		2 4 トレンチ全景（北東から）
1	富士見櫓及び本丸土壘を望む全景（北西から）	3 4 トレンチ天守曲輪石壘内部石垣 (北東から)
2	富士見櫓調査状況全景（東から）	8 1 5 トレンチ天守曲輪石壘内部石垣（北から）
3	1 本丸土壘北側石垣全景（北西から） 2 1 トレンチ本丸土壘北側石垣全景（北から） 3 1 トレンチ本丸土壘北側石垣土層堆積状況 (北東から)	2 5 トレンチ土層堆積状況（北西から） 3 7 トレンチ天守曲輪石壘内部石垣（北から） 4 7 トレンチ土層堆積状況（北西から） 5 7 トレンチ德利出土状況（北西から）
4	1 2 トレンチ富士見櫓東側石垣（東から） 2 2 トレンチ富士見櫓東側石垣（東から） 3 2 トレンチ富士見櫓石垣基部（東から） 4 2 トレンチ富士見櫓北側石垣（北から）	9 1 6 トレンチ天守曲輪石壘内部石垣（北から） 2 9 トレンチ全景（西から） 3 8 トレンチ天守曲輪石壘内部石垣（北から） 4 8 トレンチ瓦検出状況（北から）
5	3 トレンチ富士見櫓土壘北側石垣全景 (北東から)	10 富士見櫓出土遺物（1）
6	1 3 トレンチ富士見櫓土壘北側石垣全景 (北東から) 2 3 トレンチ富士見櫓土壘北側石垣（北から） 3 3 トレンチ富士見櫓土壘北側石垣 (北東から)	11 富士見櫓出土遺物（2） 12 天守曲輪出土遺物（1） 13 1 天守曲輪出土遺物（2） 2 天守曲輪出土遺物（3） 14 丸瓦四面拡大
7	1 天守曲輪調査状況（南西から）	

挿図目次

Fig.1	浜松城跡の位置	1	Fig.22	富士見櫓出土鉄製品	20
Fig.2	浜松城跡復元図	2	Fig.23	富士見櫓出土土器	21
Fig.3	浜松城下町の構成	3	Fig.24	鰐瓦復元図	21
Fig.4	調査対象地の位置	4	Fig.25	天守曲輪トレンチ配置図	22
Fig.5	ボーリング調査柱状図	5	Fig.26	4 トレンチ実測図	23
Fig.6	基本土層図	5	Fig.27	5 トレンチ実測図	24
Fig.7	浜松城跡南北断面図	6	Fig.28	6 トレンチ実測図	26
Fig.8	トレンチ配置図	7	Fig.29	7 トレンチ実測図	27
Fig.9	天守曲輪周辺地形図	8	Fig.30	8 トレンチ実測図	28
Fig.10	調査風景	9	Fig.31	9 トレンチ実測図	29
Fig.11	現地説明会	9	Fig.32	天守曲輪出土軒瓦	30
Fig.12	23次トレンチ配置図	10	Fig.33	天守曲輪出土丸瓦（1）	31
Fig.13	富士見櫓トレンチ配置図	11	Fig.34	天守曲輪出土丸瓦（2）	32
Fig.14	1 トレンチ実測図	12	Fig.35	天守曲輪出土瓦 (平瓦・棧瓦・角棧伏間瓦・その他)	33
Fig.15	2 トレンチ実測図	13	Fig.36	天守曲輪出土土器・鉄製品	34
Fig.16	3 トレンチ実測図	14	Fig.37	天守曲輪出土近代陶磁器等	35
Fig.17	富士見櫓出土軒丸瓦	15	Fig.38	出土品の年代	37
Fig.18	富士見櫓出土軒平瓦	16	Fig.39	石壘断面模式図	38
Fig.19	富士見櫓出土丸瓦	17	Fig.40	株式会社問屋商店への取材風景	39
Fig.20	富士見櫓出土平瓦	18	Fig.41	出土遺物（左）と伝世品（右）	39
Fig.21	富士見櫓出土瓦（模斗瓦・墀瓦・鰐瓦・その他）	19			

挿表目次

Tab.1	浜松城の時期区分	5	Tab.2	出土遺物観察表	41
-------	----------	---	-------	---------	----

第1章 序論

I 調査にいたる経緯

静岡県浜松市中区に所在する浜松城跡は、市の中心市街地に位置する。城跡内は市街地化が進行しているが、天守曲輪を中心とする中枢部には天守台等の石垣が残存しており、浜松市指定史跡として保護がはかられている。また、城跡の一部は、浜松城公園として整備され、中心市街地における憩いの場として市民に親しまれている。

近年の浜松城公園は、利用者ニーズの多様化や各施設の老朽化などの課題に対し、長期的な視野に立った整備が検討されることになり、2009年に浜松城公園歴史ゾーンの整備基本構想が、2011年にはその基本計画が策定された。

基本計画の策定後、2014年には天守門が復元されるなど、浜松城跡において計画に基づき再整備が進められている。この過程で天守曲輪及び富士見櫓跡において整備に向けた検討材料を得る必要が生じ、遺構と遺物の残存状況を把握するための確認調査を実施することになった。

調査は、浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が行い、実務は、浜松市から業務を受託した株式会社フジヤマが実施した。現地調査は、17次調査が2015年11月16日から27日にかけて、23次調査が2018年1月9日から3月7日にかけて実施した。調査面積は17次調査が10 m²、23次調査が33 m²である。

（井口）

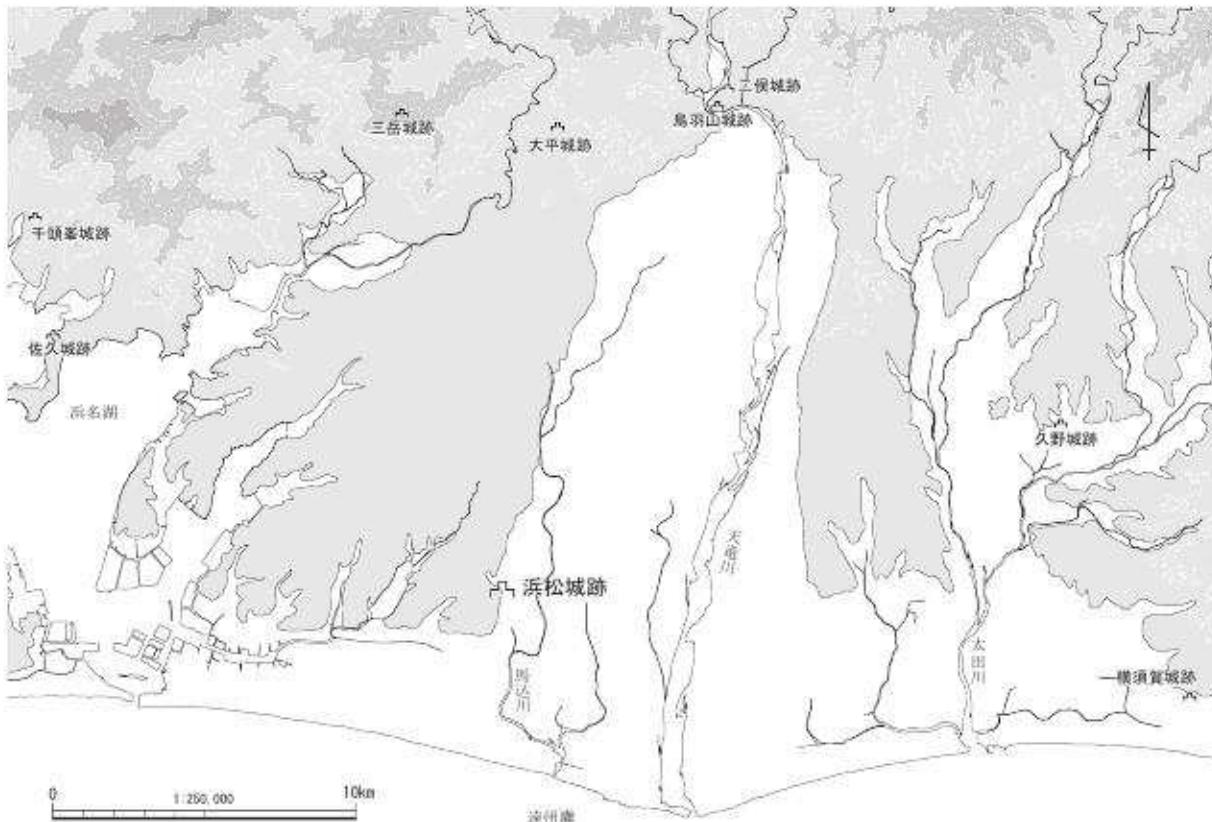


Fig.1 浜松城跡の位置

2 浜松城をめぐる環境

(1) 立地環境

浜松城跡は、静岡県浜松市中区に位置し、三方ヶ原台地の東縁にあたる河岸段丘上に立地している。県西部には、戦国時代から安土桃山時代にかけての城郭が高密度に分布しているが、その中でも浜松城は平野部に近い場所に築かれている。

最高所に築かれた天守曲輪から東側の平野部に向かって本丸、二の丸、三の丸と曲輪が続く連郭式の平山城であり、城域は最大で東西 600m、南北 700m を測る。周囲を取り囲む谷や低湿地を利用して曲輪や堀が配置されている。

(2) 歴史的環境

原始・古代 天守曲輪の北西部にある作左山横穴から出土した須恵器をはじめとして、浜松城とその周辺では古墳時代から古代の遺物が確認されている。

中世 浜松城の前身は、15世紀頃に築かれた引馬城である。築城時の城主は不明であるが、16世紀後葉に徳川家康が入城すると浜松城として改称され、城域が拡張、整備された。当時の浜松城の構造は不明確であるが、石垣や瓦葺建物のない中世的な城館であったとみられる。

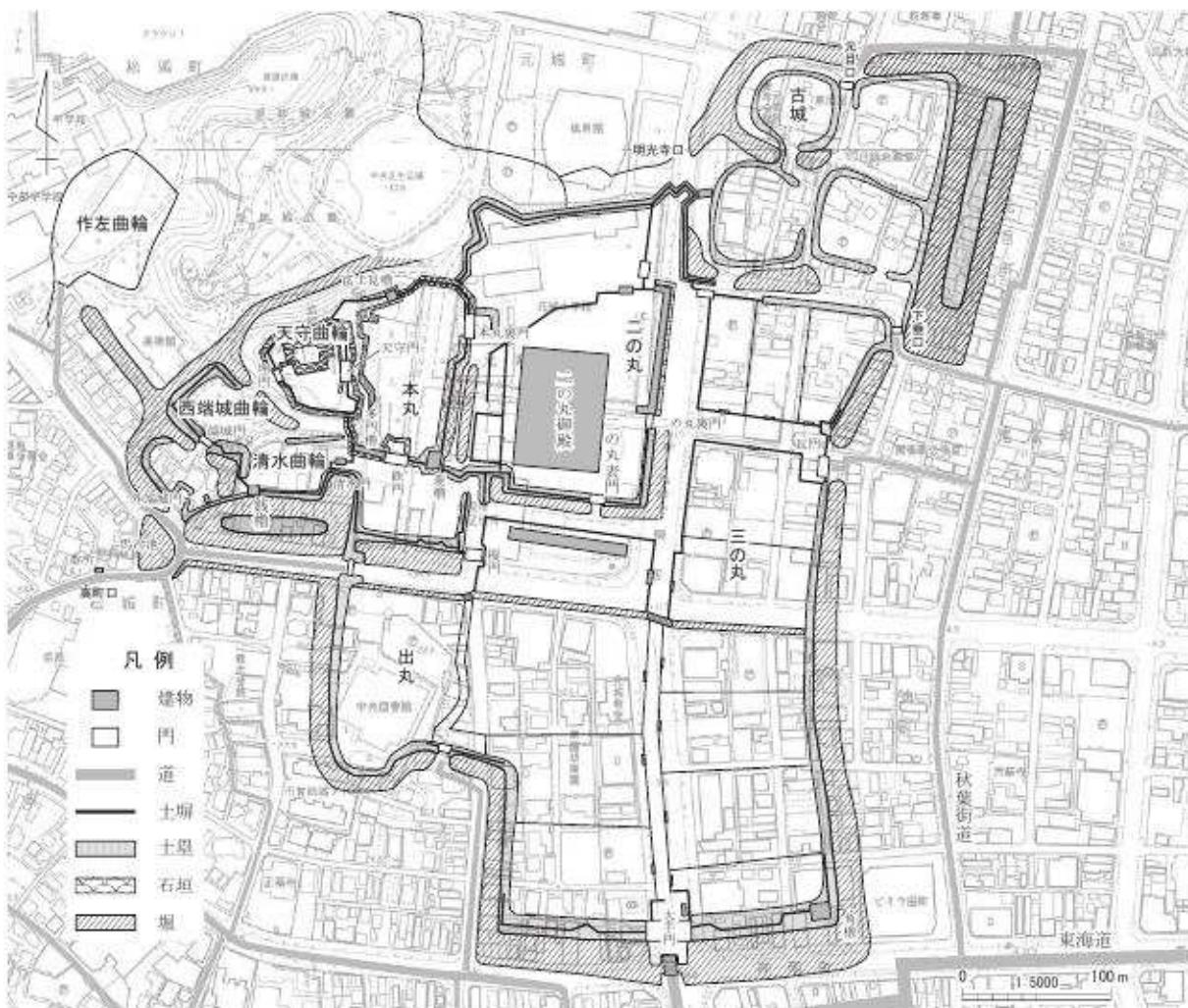


Fig.2 浜松城跡復元図

16世紀末、小田攻めで天下統一を成し遂げた豊臣秀吉によって徳川家康が関東に移封されると、豊臣秀吉の家臣である堀尾吉晴が入城し、石垣や瓦葺きの天守を備えた織豊系城郭として一新された。現在、天守曲輪や本丸に残る石垣の多くは、この時に築かれたとみられている。

近世 関ヶ原の戦いで家康が勝利すると、浜松城は徳川譜代の城として利用され豊臣色は払拭されていく。江戸時代の浜松城は、大名にとって幕閣への登竜門として通過する城の一つであり、九家二十二代を数える譜代大名が歴代城主を務める。江戸時代のはじめには三の丸が整備され、二の丸には藩主が居住する御殿が建てられるなど城域の整備が進んだとみられる。一方で、17世紀に描かれた絵図を見ると、堀尾氏在城期に創建された天守は既に姿を消し、大手門が浜松城を代表する建物として維持されたことが窺える。城下を通る東海道は、大手の前で直角に折れ曲がるよう変更された。沿道には宿場町が形成され、東海道の往来時には大手門または三の丸の隅櫓が眺望できるように設計されていた。

近現代 明治5年（1872）、廢城令にさきだち、浜松城の建物や土地は民間に払い下げられた。三の丸、二の丸の宅地化が進行し、昭和24年（1949）には元城小学校が二の丸北半部にあたる場所に移転するなど浜松城域の地形は大きく改変されたものの、天守曲輪と本丸の一部は開発から免れた。昭和25年（1950）には浜松城公園が開設され、昭和33年（1958）に復興天守が建築された。また天守曲輪と本丸の一部は昭和34年（1959）に浜松市の史跡に指定された。（山口）

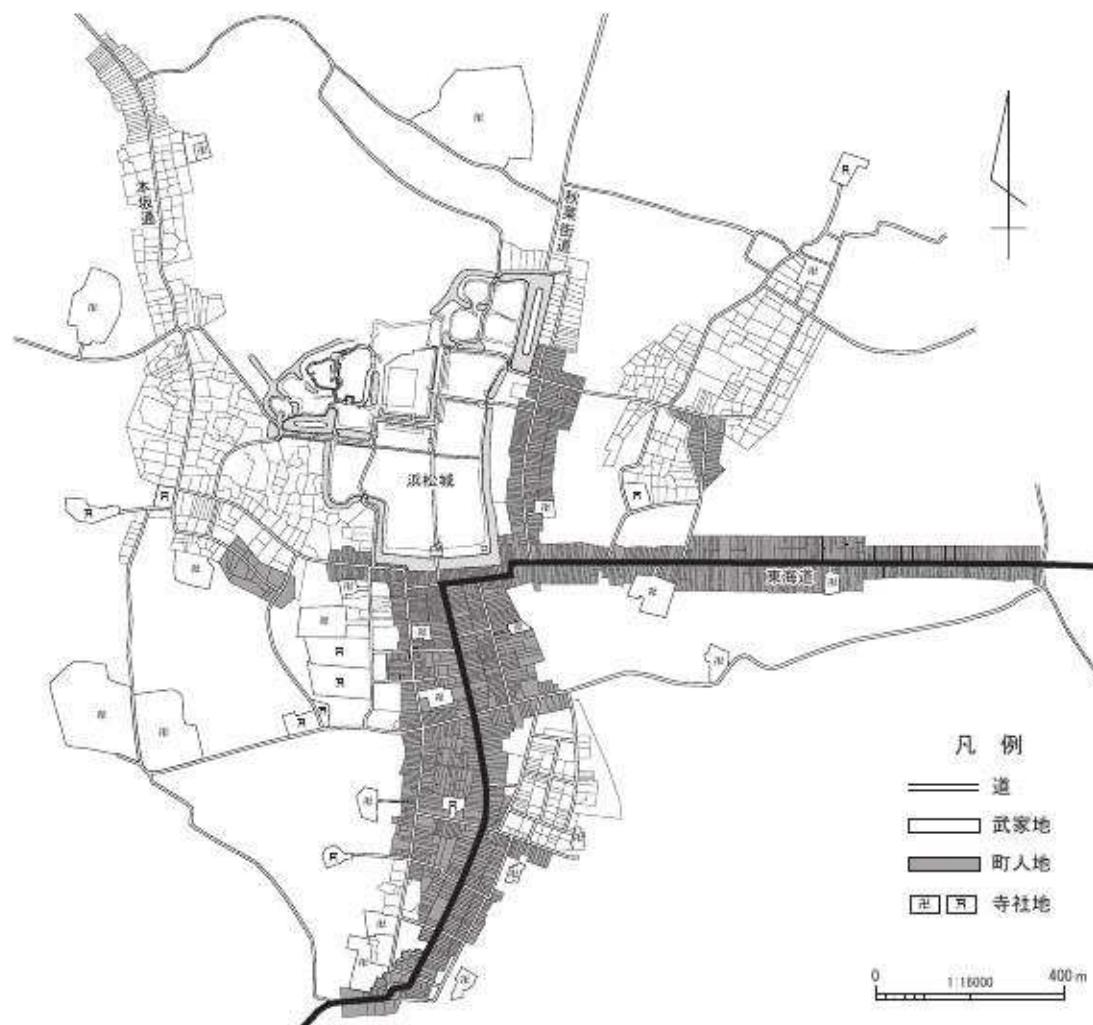


Fig.3 浜松城下町の構成

3 浜松城跡の調査履歴

今回の調査は、浜松城跡発掘調査の23次にあたる。その他、工事立会や不時発見等を含めると30回以上の調査が行われている(Fig. 4)。これまでには、小規模な本発掘調査や試掘・確認調査がほとんどであったため、局地的な成果に留まっていた。今回、富士見櫓跡と天守曲輪を調査したが、特に天守曲輪においては、浜松城跡の中核部を本格的に発掘する初めての調査となった。

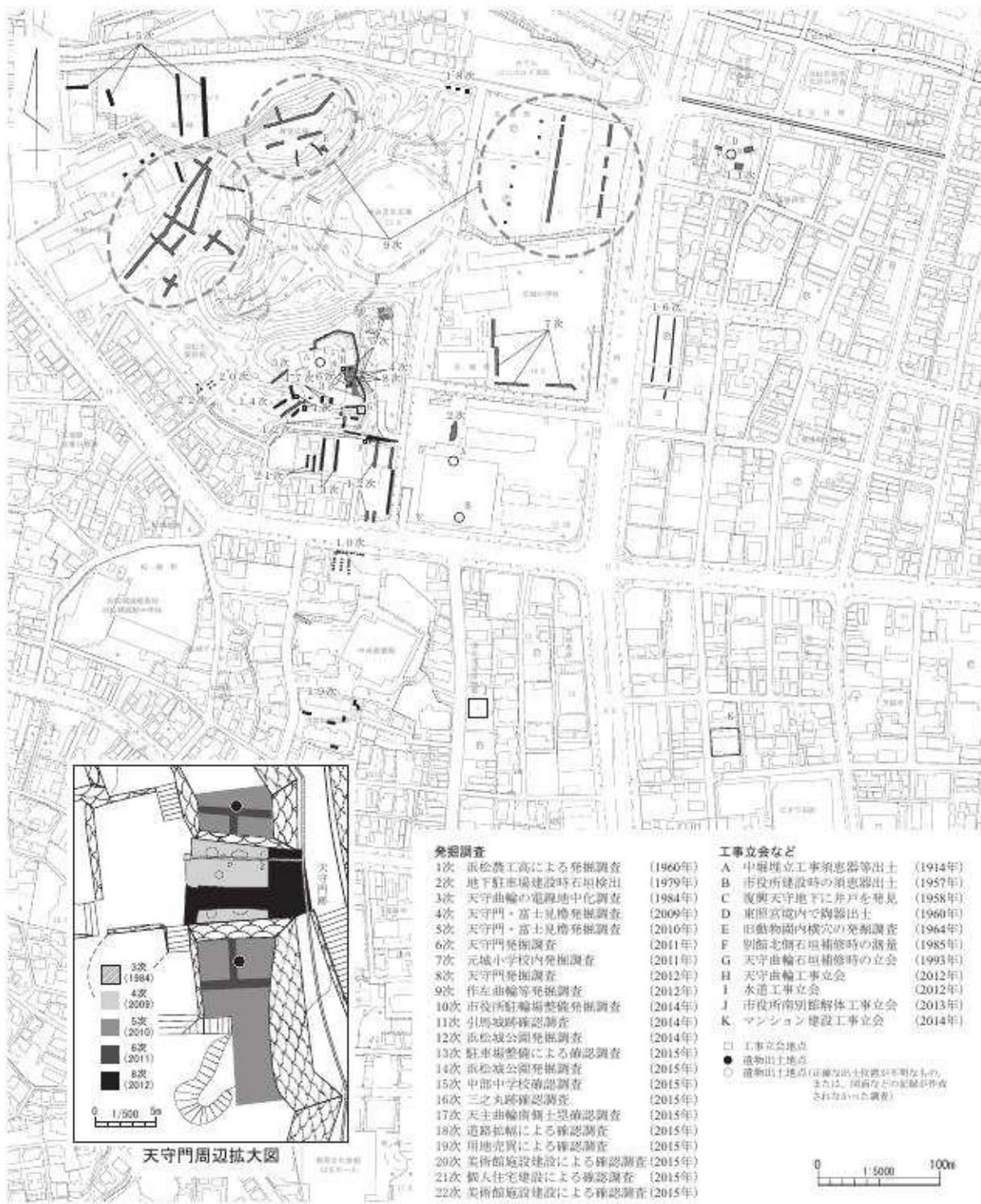


Fig.4 調査対象地の位置

(1) 浜松城における既往の調査

浜松城の変遷を紐解いていくと、15世紀代に築城された引間城を皮切りに、5段階の時期に分けることができる (Tab. 1)。第1段階は、引間城築城から今川氏支配の戦国時代前半期 (15世紀～1570年)、第2段階は、今川氏が滅亡し、徳川家康が岡崎城から浜松城に移り、浜松城と改称した時代を中心とした戦国時代後半期 (1570年～1590年)、第3段階は、豊臣秀吉配下の大名、堀尾吉晴が城主となり、浜松城の織豊系城郭化が進んだ安土桃山時代 (1590年～1600年)、第4段階は徳川政権が確立し、譜代大名が歴代城主を務めた江戸時代を中心とする時期 (1600年～1872年)、第5段階は、浜松城が廃城となり、公園として整備されてきた明治時代以降 (1872年～現在) の5段階である。

今回調査した富士見櫓跡および天守曲輪の基本土層を概観しておこう。富士見櫓の基本土層は、上層から表土 (第5段階)、明治・江戸時代の堆積層 (第5・4段階)、江戸時代の整地層 (第4段階)、江戸・安土桃山時代堆積層 (第4・3段階)、安土桃山時代 (第3段階) である。今回調査した富士見櫓跡周辺は、浜松城北側の急傾斜地で、富士見櫓及び土壘上部からの堆積であるが、石垣構築時と江戸時代の少なくとも2回は整地作業が行われていることがわかる。天守曲輪は、天守門南側でのボーリング調査結果 (Fig. 5) から、地表より標高30mまでは盛土であることが判明した。天守台も含め天守曲輪は、地山である東鴨江累層の上に盛土を積み上げていると考えられる。天守曲

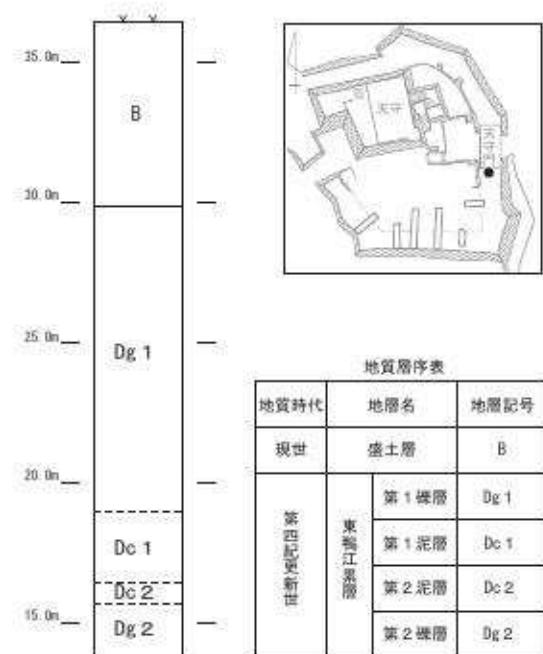


Fig.6 基本土層図

Tab.1 浜松城の時期区分

段階	時代	西暦	支配者	城主	できごと
第1段階	戦国時代前半期	15世紀～1570年	今川氏	飯尾氏 (引間城)	15世紀代 引間城築城
第2段階	戦国時代後半期	1570年～1590年	徳川家康	徳川家康	浜松城に改称
第3段階	安土桃山時代	1590年～1600年	豊臣秀吉	堀尾吉晴・忠氏	織豊系城郭化
第4段階	江戸時代	1600年～1872年	徳川氏 (将軍家)	譜代大名	城内と城下町の再整備
第5段階	明治時代以降	1872年～	—	—	公園として整備

輪の基本土層は、上層から表土（第5段階）、明治時代以降造成土（第5段階）、江戸時代堆積層（第4段階）、江戸時代の整地層（第4段階）、江戸時代盛土層（第4段階）、安土桃山時代整地層（第3段階）、安土桃山時代地業層（第3段階）である。天守曲輪は2m程の高さを短期間で埋め立てており、富士見櫓同様、整地層は2面分が確認できる。

（2）17次調査の成果

調査の概要と経緯 浜松城跡17次調査は、浜松城公園歴史ゾーンの整備を進めており、土壙復元等を含む天守曲輪の整備を進める上で、埋蔵文化財としての詳細なデータを取得することが必要となったことをふまえて実施した。調査は、浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）、が行った。また調査の履行にあたっては、浜松城公園整備を進める浜松市都市整備部公園課からの委託を受け、株式会社フジヤマ（環境文化部文化財研究室）がその業務の一部を実施した。

調査の方法 調査はトレンチ（幅1m×長さ5m）を2本設定し、西をトレンチ1（23次調査6トレンチ）、東をトレンチ2（23次調査7トレンチ）とした。発掘調査は平成27年（2015）11月16日から27日まで実施した。

調査の成果 両トレンチともほぼ同じような成果が得られた。土壙頂部は、40cm程掘削したが、公園造成による削平を受けていたため、土壙及び土壙の積土は確認できなかった。土壙内側法面では、栗石状の礫を多く含むにぶい黄褐色土層が検出された。これは本来土壙を構成する積土と考えられ、天守曲輪の内側に存在した石垣の裏込めに該当するものと判断される。この礫を多量に含む黄褐色土層の北端から人頭大もしくはそれ以上の大きさをもつ石材の列を確認した。これらは、天守曲輪内側に存在したと思われる石垣の築石であると判断される。そこから北側ににぶい赤褐色土層が厚さ15cm程で平らに続いており、時期は不明であるが、ある段階での整地面であると判断した。

17次調査の天守曲輪の試掘・確認調査によって、土壙遺構の遺存状態、内側石垣の築石、曲輪内整地面の状況を確認することができた。

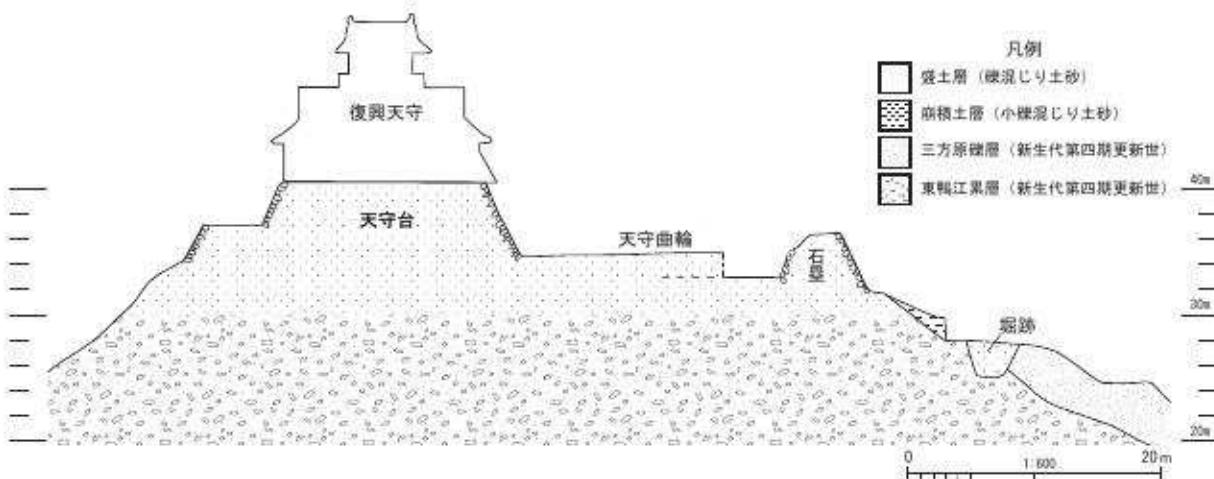


Fig.7 浜松城跡南北断面図

参考文献

- | | |
|---|-----------------------------------|
| 静岡県 1930『静岡縣史』第1巻(日版) | 浜松市教育委員会 2013a『浜松城跡8次』 |
| 向坂綱二 1976「浜松市動物園内作左山横穴墳」『森町考古』10 | 浜松市教育委員会 2013b『浜松城跡9次』 |
| 浜松市教育委員会 1984『浜松城天守曲輪周辺の発掘調査について』 | 浜松市教育委員会 2013c『平成25年度 浜松市文化財調査報告』 |
| 浜松市教育委員会 1996『浜松市指定文化財 浜松城跡－考古学的調査の記録－』 | 浜松市教育委員会 2014『平成24年度 浜松市文化財調査報告』 |
| 浜松市文化振興財团 2010『浜松城跡4次』 | 浜松市教育委員会 2015a『平成25年度 浜松市文化財調査報告』 |
| 浜松市文化振興財团 2011『浜松城跡5次』 | 浜松市教育委員会 2015b『浜松城跡10』 |
| 浜松市文化振興財团 2012a『浜松城跡6次』 | 浜松市教育委員会 2016a『浜松城跡11』 |
| 浜松市文化振興財团 2012b『浜松城跡7次』 | 浜松市教育委員会 2016b『浜松における中世城郭の調査1』 |

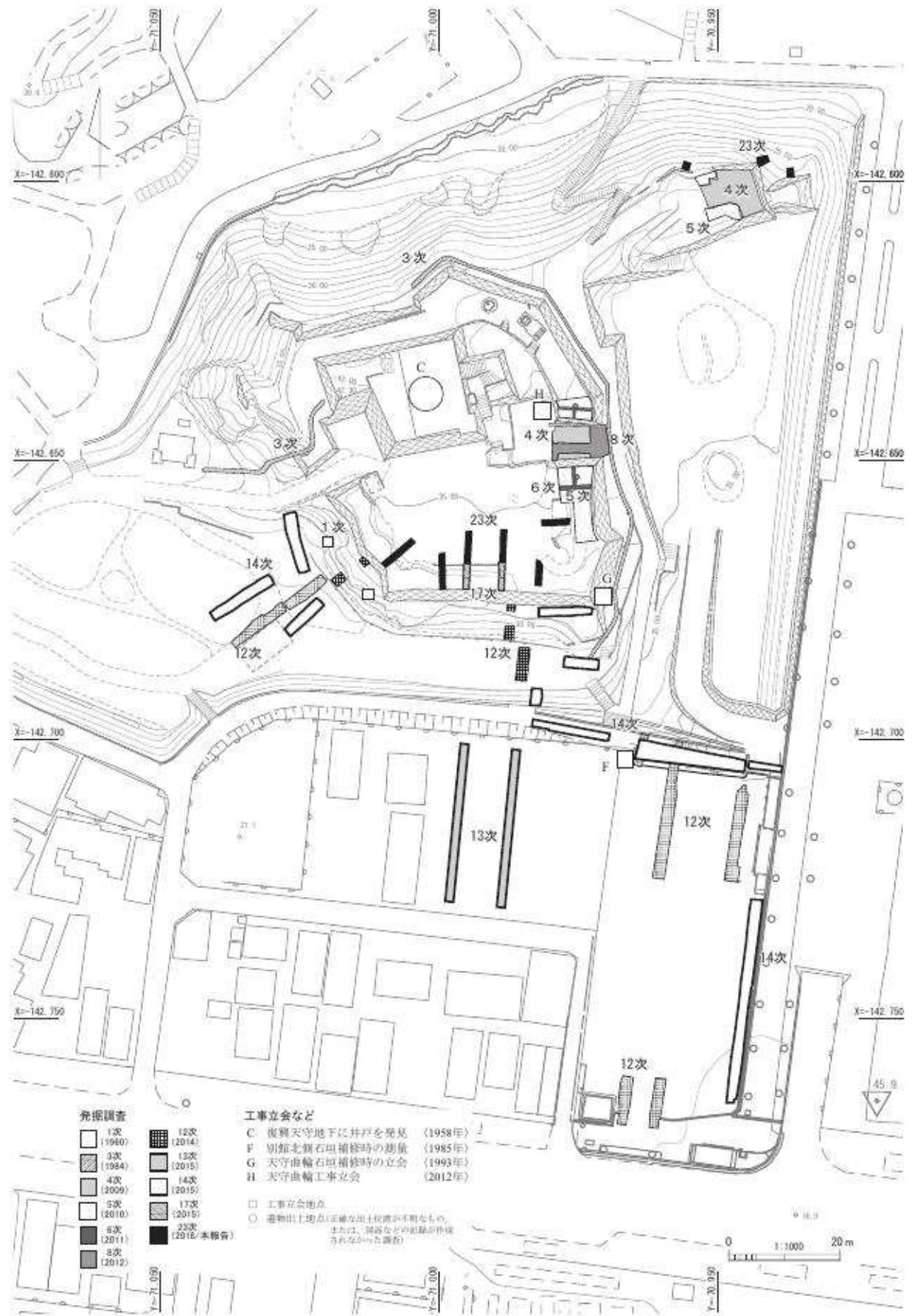


Fig.8 トレンチ配置図

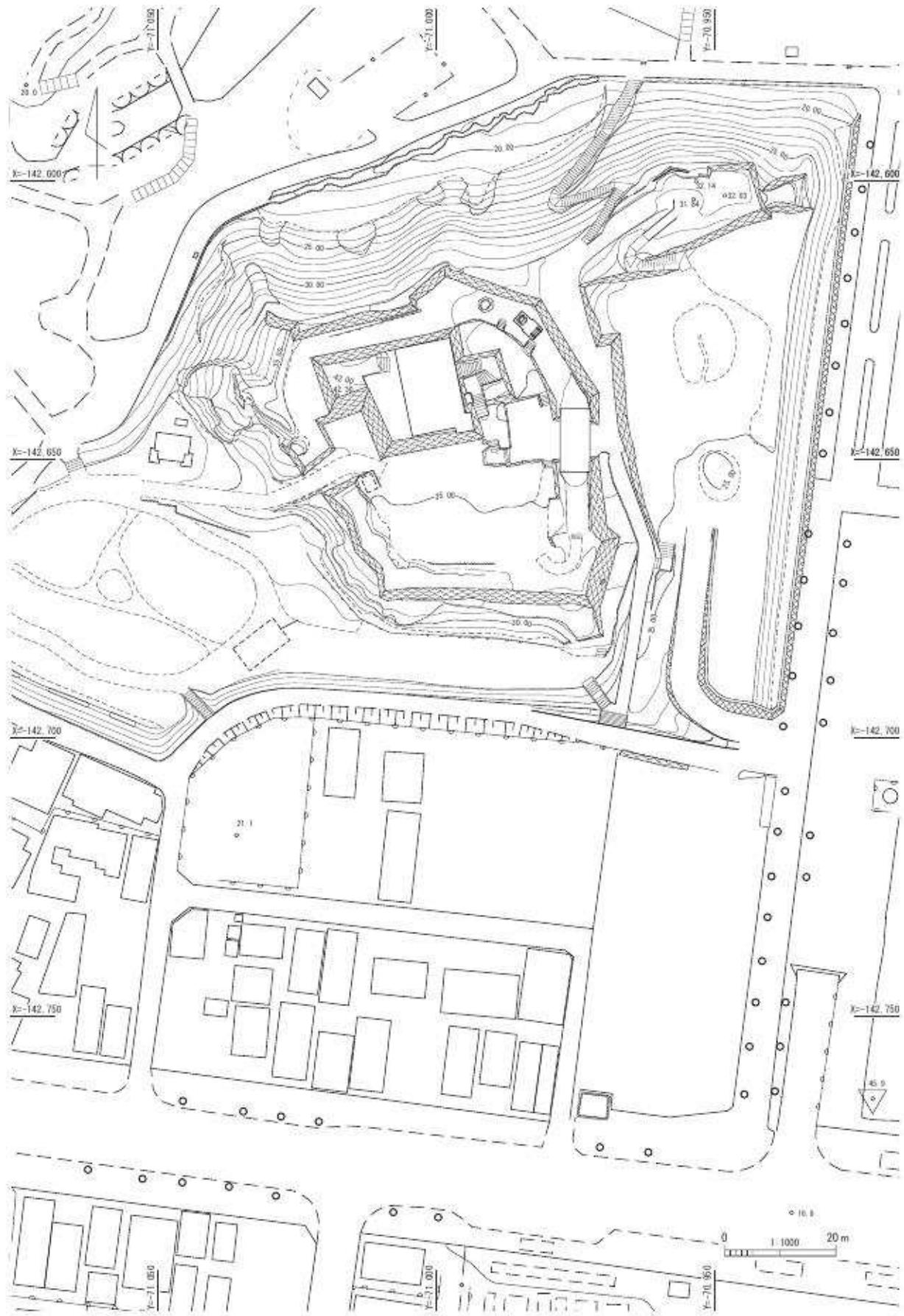


Fig.9 天守曲輪周辺地形図

4 調査の方法と経過

調査区の設定 富士見櫓跡とその周辺（以下、調査区域を示す用語として「富士見櫓」の名称を用いることがある。）に $1\text{m} \times 1\text{m}$ のトレンチを 3 箇所、天守曲輪に $1\text{m} \times 5\text{m}$ のトレンチを 6 箇所設定した。富士見櫓跡は東から 1～3 トレンチ、天守曲輪は西から 4～9 トレンチと呼称した。富士見櫓では、櫓台及び土壘の石垣基底部の構造把握、天守曲輪では土壘下部構造の解明を目的として調査を行った。6・7 トレンチについては、第 17 次調査トレンチの延長部分に設定し、曲輪内部を効果的に把握できるように努めた。

調査方法 トレンチの掘削は、重機が入れない場所であることに加え、遺構面までの深度が浅いと想定されたため、表土掘削から遺構検出まですべて人力で行った。石垣を検出・精査し、土の堆積状況を確認するため、トレンチ壁面で層位を確認しつつ地山面及び曲輪造成面まで掘り進めた。調査区周辺には樹木や構造物があったが、それらは調査に支障のない範囲で現状のまま残した。平面図・土層断面図・石垣立面図の測量は、浜松城公園内の基準点を用い、デジタル写真による三次元計測やトータルステーションを用いて縮尺 20 分の 1 で作成した。写真撮影は主に銀塩フィルムを用いた。フィルムは、 6×7 判をモノクロフィルムとカラーリバーサルフィルム、 35mm 判をカラーリバーサルフィルムを用いた。また主要な遺構については 4×5 判を使用し、デジタルカメラは補助的に使用した。

現地調査 調査は 2018 年 1 月 9 日より、富士見櫓から開始した。調査対象地の草刈りを行い、3 箇所のトレンチを設定した（1～3 トレンチ）。各トレンチについて、埋没遺構と石垣基底面の確認に努め、櫓台の高さが判明したとともに、家紋瓦や釘などの遺物が出土した。1 月 15 日からは、天守曲輪に 6 箇所のトレンチを設定し（4～9 トレンチ）、調査を開始した。天守曲輪南側土壘の構造を確認する目的で行い、土壘と考えていたものは石壠であることが判明した。また、天守曲輪南東隅（8 トレンチ）から安土桃山時代の瓦が大量に出土した。調査終盤の 2 月 26 日には、浜松城公園歴史ゾーン整備専門委員会による現地視察・指導があり、調査成果に対する助言が寄せられた。

現地説明会 2018 年 2 月 10 日に天守曲輪の発掘調査成果を公開する現地説明会を開催した。当日は 870 名を超える見学者を迎えて、市民らは新しく発見された石壠に興味深く見入っていた。

整理作業 現地調査終了後、瓦の洗浄や台帳作成などの基礎整理を行い、現地調査翌年度の 2018 年 7 月～12 月に、株式会社フジヤマ袋井営業所において整理作業を実施した。 （坂下）

調査参加者

現地調査 大野功、澤木延文、鈴木三四昭、鈴木義則、寺田達人、山口義信

整理作業 奥野加織、高林美保、豊田七重、原田和子、藤田優子、前田貴子



Fig.10 調査風景



Fig.11 現地説明会

第2章 調査成果

1 富士見櫓跡とその周辺の調査

(1) 概要

位置と層位 富士見櫓の櫓台とそこから延びる土塁の石垣埋没状況及び石垣基底面を明らかにする目的で、合計3箇所の調査溝を設定した。櫓台の北東隅角を2トレンチ、櫓台から東に延びる本丸土塁の北側に1トレンチ、西に延びる土塁の北側に3トレンチを設定した。

富士見櫓跡とその周辺における基本土層は、上層から表土、江戸時代以降堆積層（第5・4段階）、江戸時代整地層（第4段階）、江戸時代・安土桃山時代堆積層（第4・3段階）、安土桃山時代地業層（第3段階）に大別できる。今回調査した富士見櫓の北側は急傾斜地となっており、石垣築造後の堆積は、石垣上部からの自然堆積層が主となっている。地山層は東鴨江累層で、3トレンチの標高29.3m付近でのみ確認できた。

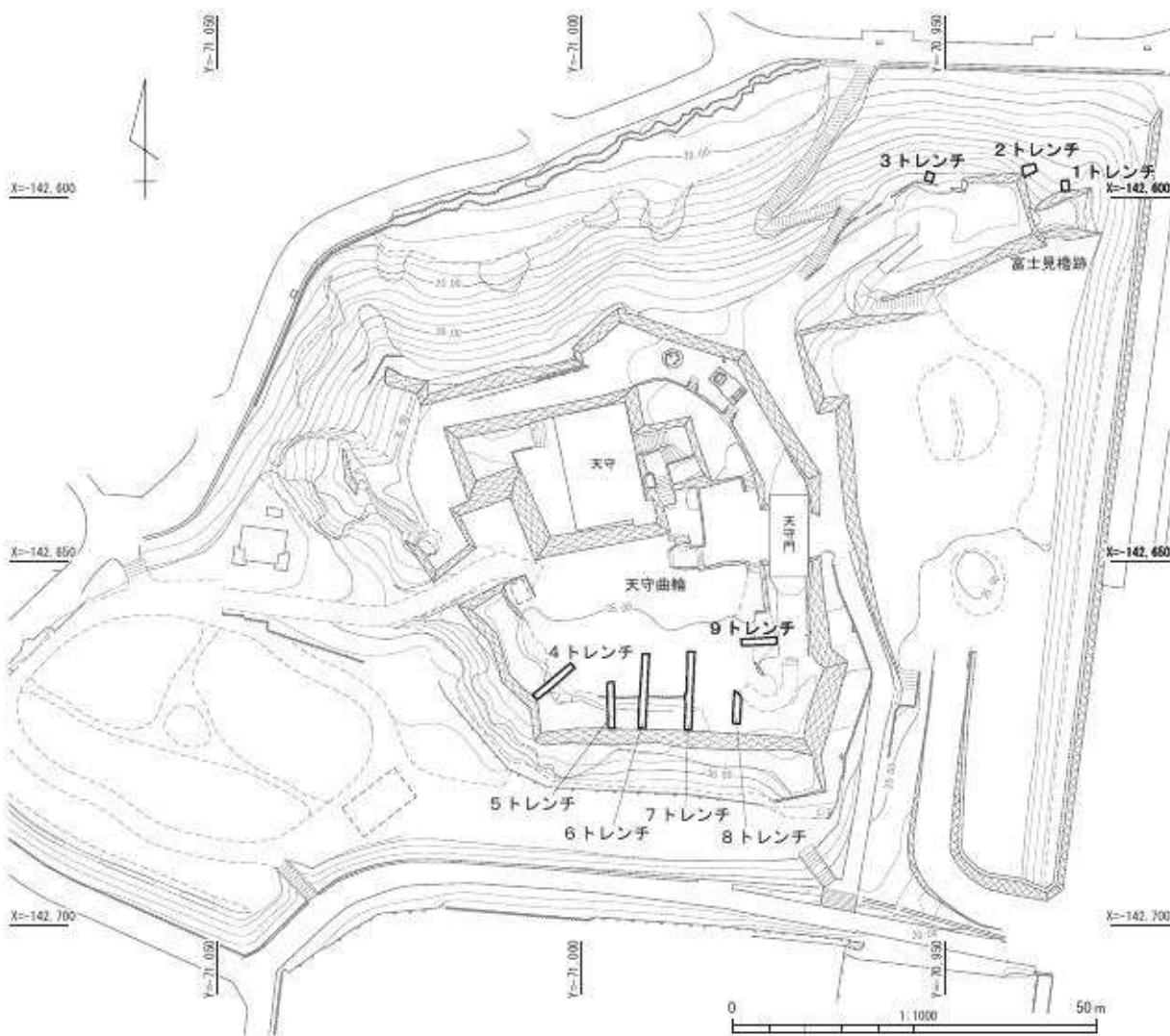


Fig.12 23次トレンチ配置図

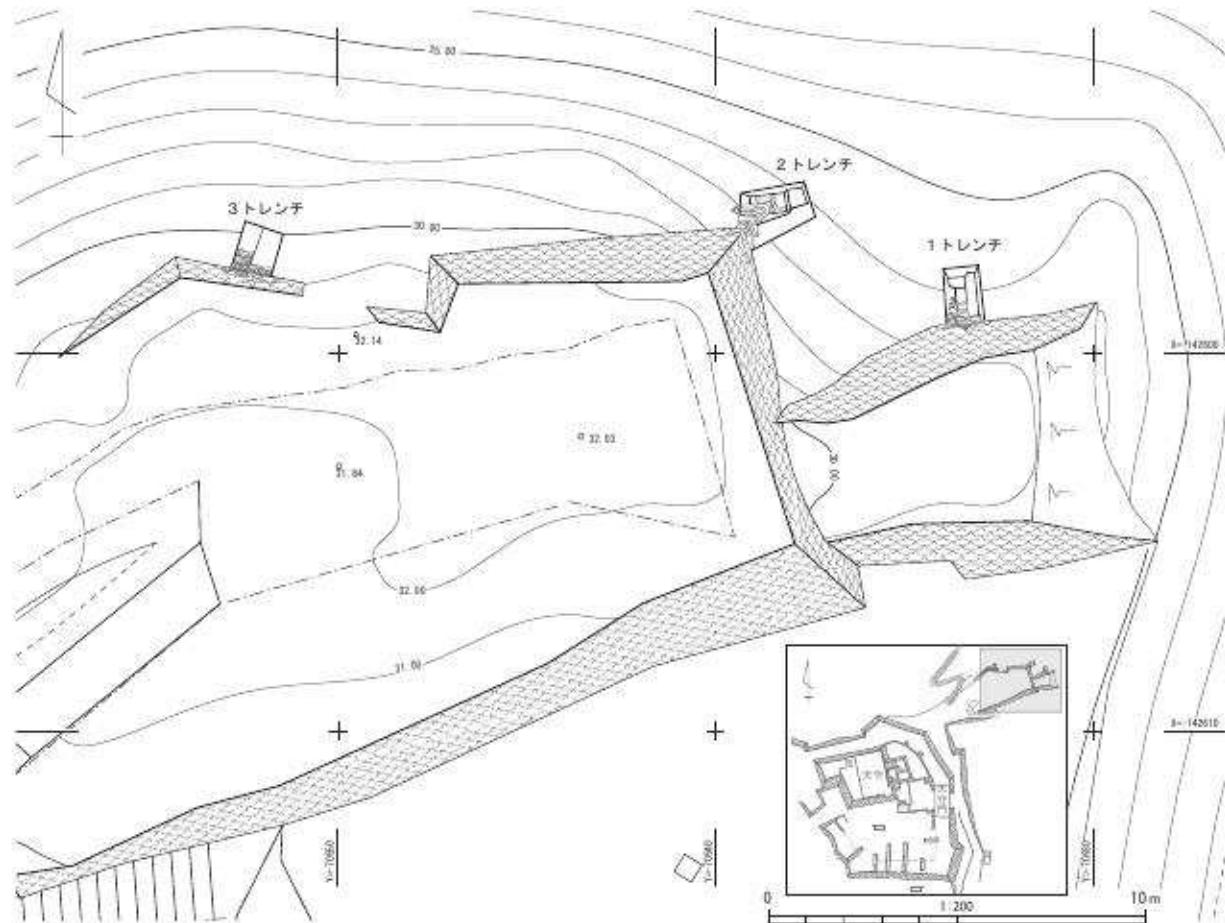


Fig.13 富士見櫓トレント配置図

(2) 1トレント検出遺構

調査の概要 (Fig. 13) 1トレントの調査は、富士見櫓の櫓台から東へ延びる本丸土塁の北側に約1m四方のトレントを設定し、本丸土塁北側石垣の埋没状況及び基底面を明らかにする目的で行った。トレントは、石垣の埋没が一番少ないと思われる、露出石垣の最低部付近に設定した。

本丸土塁北側石垣 (Fig. 14) 検出した遺構は、自然石を積んだ野面積の石垣で、高さ2.0mを測り、新たに7段分の築石を確認した。露出していた土塁の石垣上部まで含めると、残存高は5.7mである。使用石材は珪岩で、石垣勾配は76°と他の石垣と比較して急である。櫓台同様、普段から露出している石垣部分は、荷重がかかり割れている築石や石垣の孕みが確認できる箇所があるが、新たに検出した石垣は、間詰石の残存状態も良好で、石垣の孕みもみられない。トレントの掘削深度が深くなり掘削が困難な状況となったため、地山までは確認することができなかったが、石垣下部の2～3段分の石垣を埋めるようにして固く締まった層が盛土されていた。標高24.6m付近で、根石を保護する盛土と考えられる。また、標高25.6m付近で固く締まった層（5層）が確認され、出土遺物から17世紀中頃以降に一度整地されていると考えられる。

1トレント遺物出土状況 出土遺物は、近世～現代までの堆積土を中心に、埴瓦や丸・平瓦が多く出土した。17世紀中頃以降の整地層と考えられる5層からは、桔梗紋軒丸瓦（8・9）や2トレントの8層出土の瓦と接合した鰐瓦（46）が、江戸時代の堆積土と考えられる8層からは、同じく5層出土の鰐瓦（46）に接合する破片が出土した。根石の保護層と考えられる10層からは、かわらけ（71）の破片が出土したが、細片のため帰属時期は不明である。

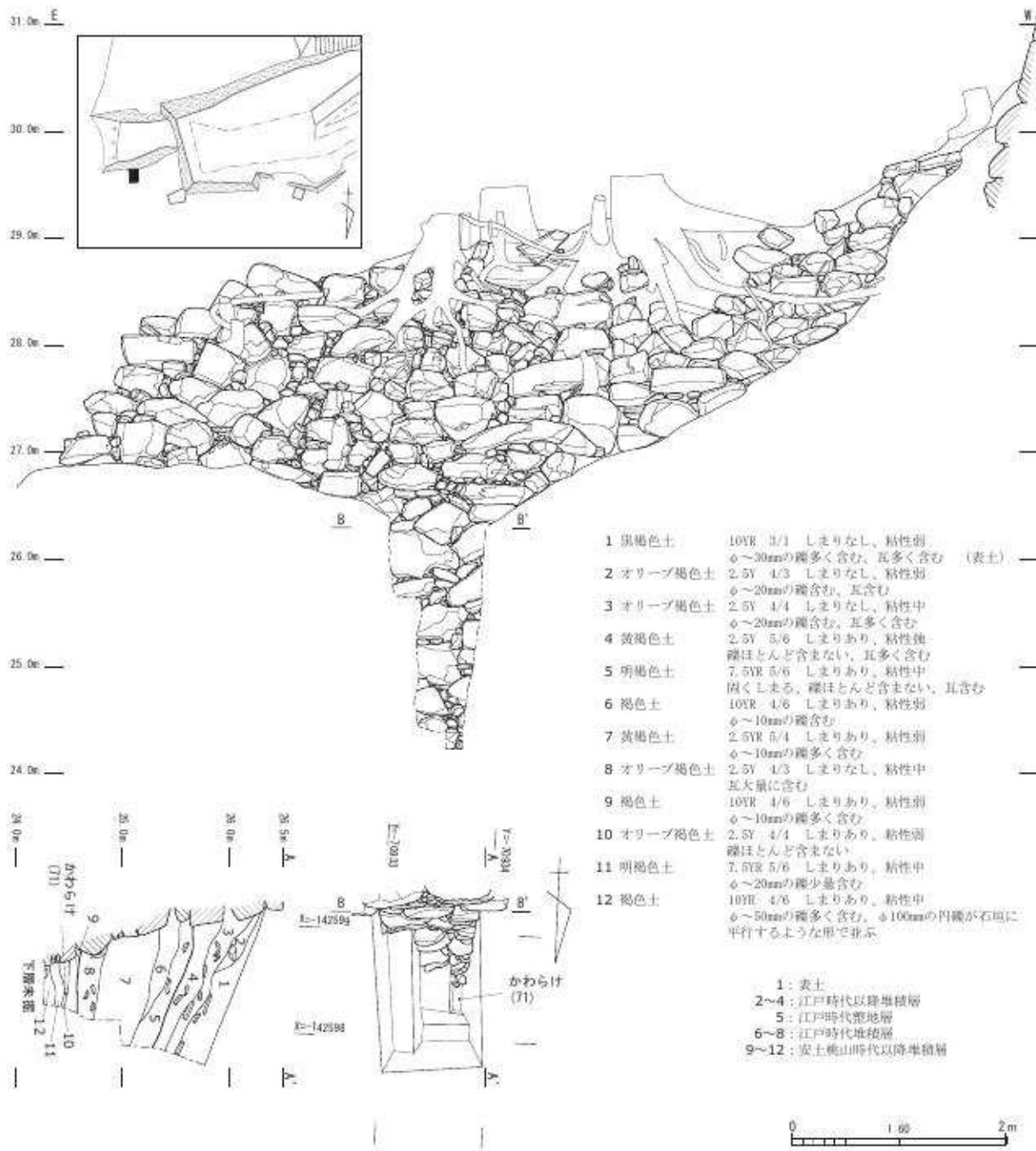


Fig.14 1 トレンチ実測図

(3) 2 トレンチ検出遺構

調査の概要 (Fig. 13) 2 トレンチの調査は、富士見櫓台の北東隅角に約 1 m四方のトレンチを設定し、富士見櫓台の埋没状況及び基底面を明らかにする目的で行った。

富士見櫓台北東隅角 (Fig. 15) 検出した遺構は、自然石を積んだ野面積の石垣で、高さ 2.6 mを測り、築石は新たに 9 段分を確認した。露出していた上部の櫓台天端石までの石垣を含めると、残存高は 7.4 m、23 段を数える。石垣勾配は 70° で、使用石材は珪岩である。上部の露出している石垣は、荷重がかかり割れている石や石垣の孕みが確認できる箇所がある。一方、新たに検出した石垣は、間詰石などの残存状況も含め、露出している上部の石垣に比べ残存状態は比較的良好である。トレンチの掘削深度が深くなり掘削が困難な状況になったため、根石は確認できなかったが、1 ト

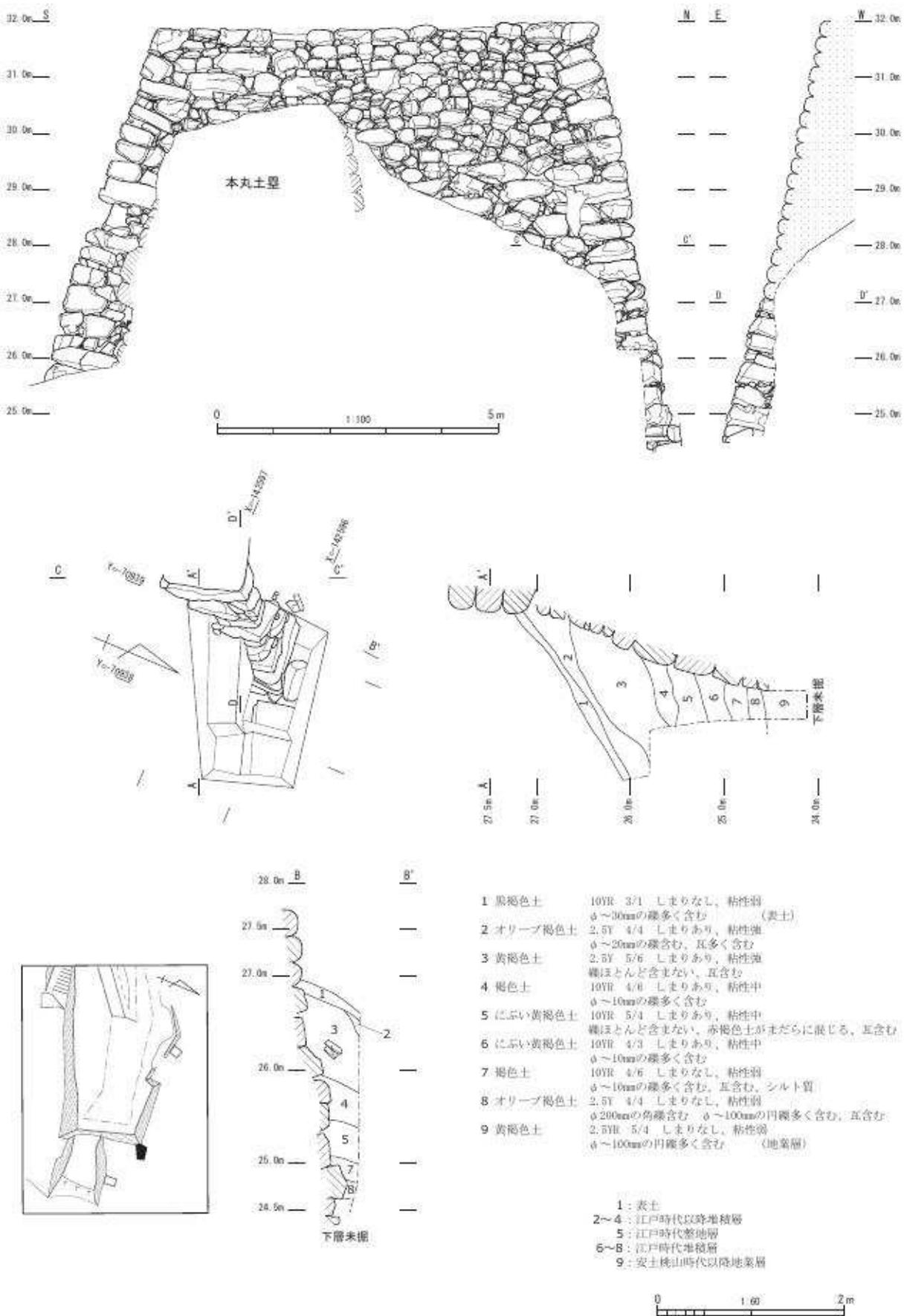


Fig.15 2トレンチ実測図

レンチ同様、標高 24.6 m付近で石垣を 2～3 段分埋めるようにして盛土されていた。また、標高 25.6 m付近で固く締まった層（5 層）が確認され、こちらも 1 レンチ同様、出土遺物から 17 世紀中頃以降に一度整地されていると考えられる。

2 レンチ遺物出土状況 2 レンチからは、軒瓦や銅線が付着した埴瓦等が出土した。特に軒瓦は今回の調査で一番多く出土した。また、和釘や鎧といった鉄製品も多く出土している。今回の調査で出土した鉄製品の大半は、このレンチからの出土品である。8 層から出土した鰐瓦は、1 レンチ 5 層出土のものと接合した。

(4) 3 レンチ検出遺構

調査の概要 (Fig. 13) 3 レンチの調査は、富士見櫓台から西へ延びる土塁の北側に約 1 m 四方で設定し、土塁北側石垣の埋没状況及び基底面を明らかにする目的で行った。

富士見櫓西土塁北側石垣 (Fig. 16) 1 レンチで検出した石垣は、本丸北側の土塁にあたる。本丸土塁は本来、本丸裏門まで続いていたと考えられるが、現在は 1 レンチのすぐ東側で後世の改変により失われている。

検出した遺構は、自然石を積んだ野面積の石垣で、高さ 1.1 m を測り、築石は新たに 6 段分を確認した。露出していた上部の石垣を含めると、石垣残存高は 1.9 m である。使用石材は珪岩である。根石は地表面から 0.9 m 下で確認され、地山の上に直接据えられていた。根石から 2 段分は勾配 46° と緩傾斜であるが、上部は勾配 69° と傾斜が変化している。新たに検出した箇所は、間詰石も比較的残っており、残存状況は良好である。しかし、露出していた上部の石垣については、間詰石が抜け落ちている箇所が多くみられ、築石の積み方も乱雑な印象を受ける。新たに検出した石垣

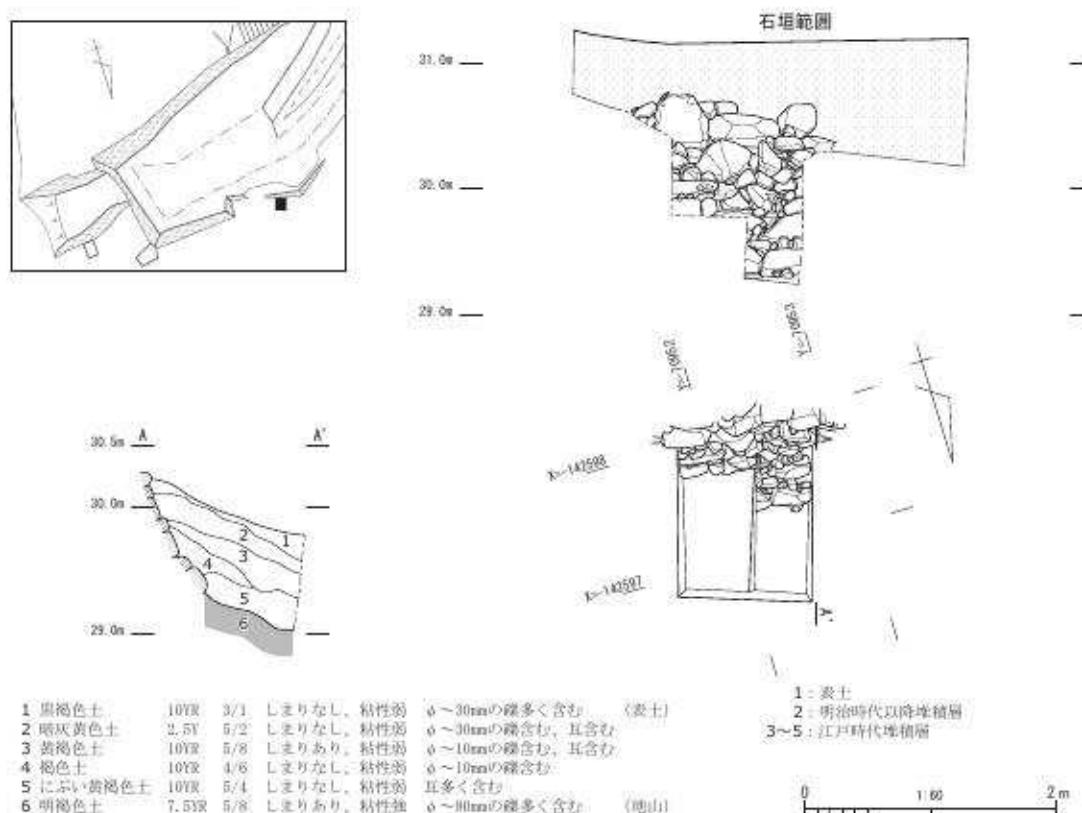


Fig.16 3 レンチ実測図

の築石が直径 10～20cm のものが多いのに対し、露出していた上部の築石は直径 40cm 程と、下部と比較して大型の石材を使用している。

3 トレンチ遺物出土状況 遺物は、おもに表土層から平瓦・丸瓦・壝瓦が出土している。(坂下)

(5) 富士見櫓跡とその周辺の出土遺物

富士見櫓跡とその周辺から出土した遺物のうち、軒丸瓦 (1～11)、軒平瓦 (12～26)、丸瓦 (27～35)、平瓦 (36～41)、熨斗瓦 (42)、壝瓦 (43～45)、鰐瓦 (46)、その他不明瓦 (47～50)、鉄製品 (51～70)、土器 (71・72) を図示する (Fig. 17～23)。

軒丸瓦のうち、1～7 が連珠左巻三巴紋、8・9 が桔梗紋、10・11 が繫九目結紋である。その他に軒丸瓦は、巴紋 3 点、欠損部が大きく紋様が不明なものが 2 点存在するが、時代を特定できる特徴がみられないため、ここでは掲載していない。

1～7 は連珠左巻三巴紋軒丸瓦で、1～3 の 3 点は巴と連珠の間に圈線がめぐるもの、4～7 の

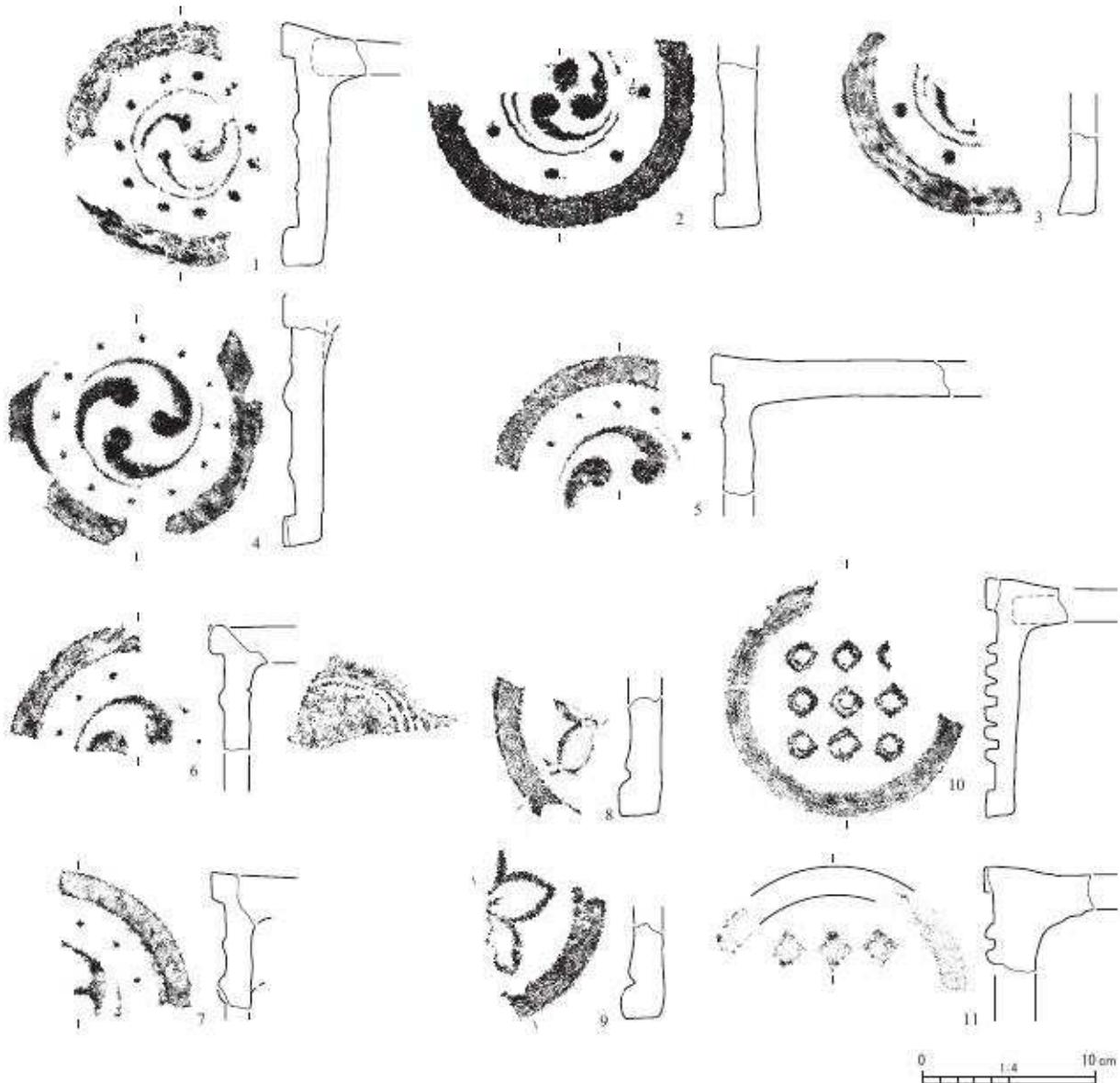


Fig.17 富士見櫓出土軒丸瓦

4点は圓線がめぐらないものである。1は2トレンチ5層からの出土で連珠数が11である。2は2トレンチ1・2層からの出土で、7つの連珠が推定できる。3は2トレンチ4層からの出土である。

8・9は桔梗紋が表現されており、太田氏在城期（1644年～1678年）の所産とみられる。それぞれ1トレンチ5層・2トレンチ5層から出土した。

10・11は繫九目結紋であり、本庄（松平）氏在城期（1702年～1729年、1749年～1758年）のものと考えられる。それぞれ2トレンチ1・2層、4層から出土している。

軒平瓦のうち、12・13は五葉紋2反転均整唐草紋、14・15は三葉紋2反転均整唐草紋、20～23は菊紋唐草紋である。

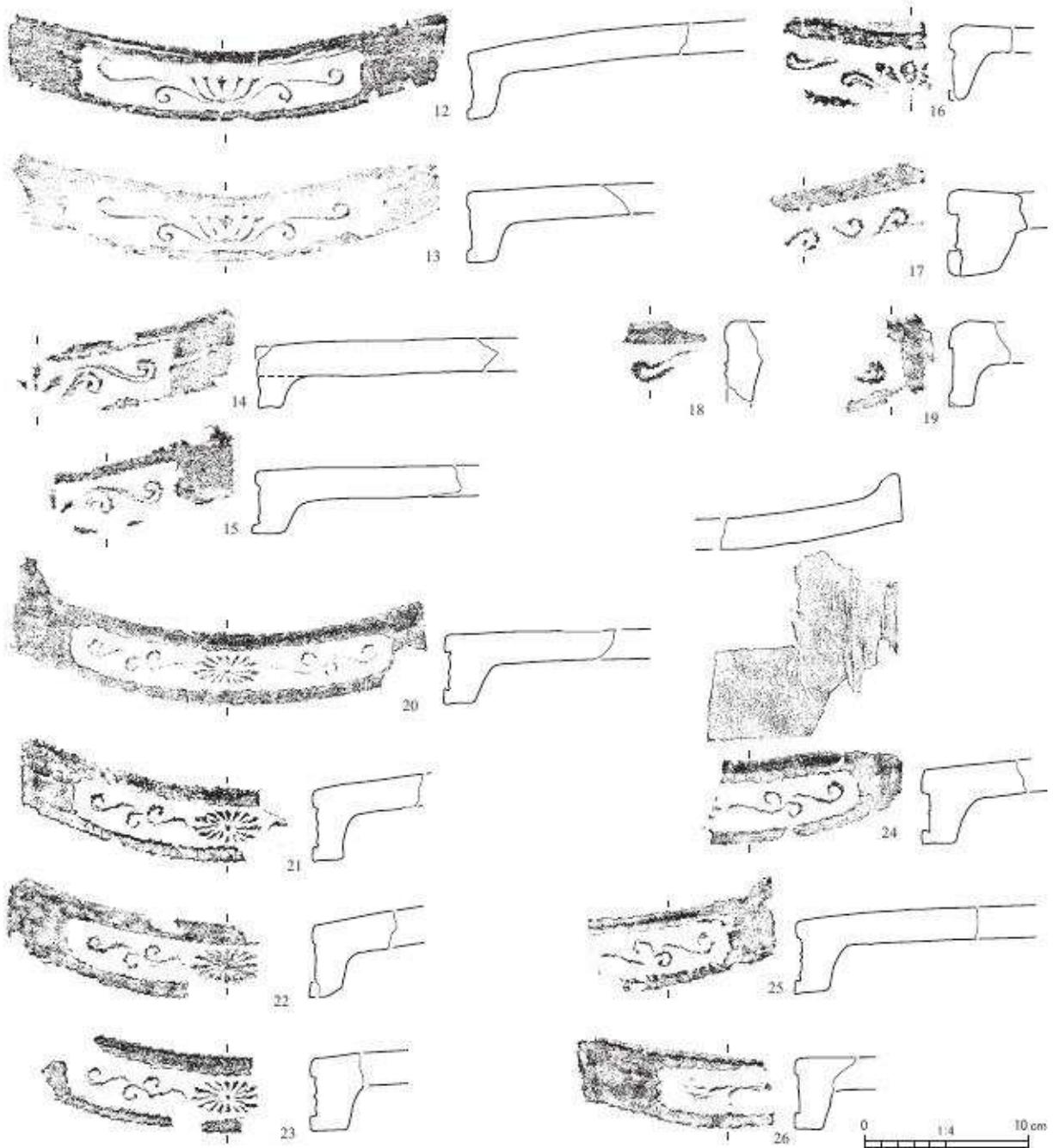


Fig.18 富士見櫓出土軒平瓦

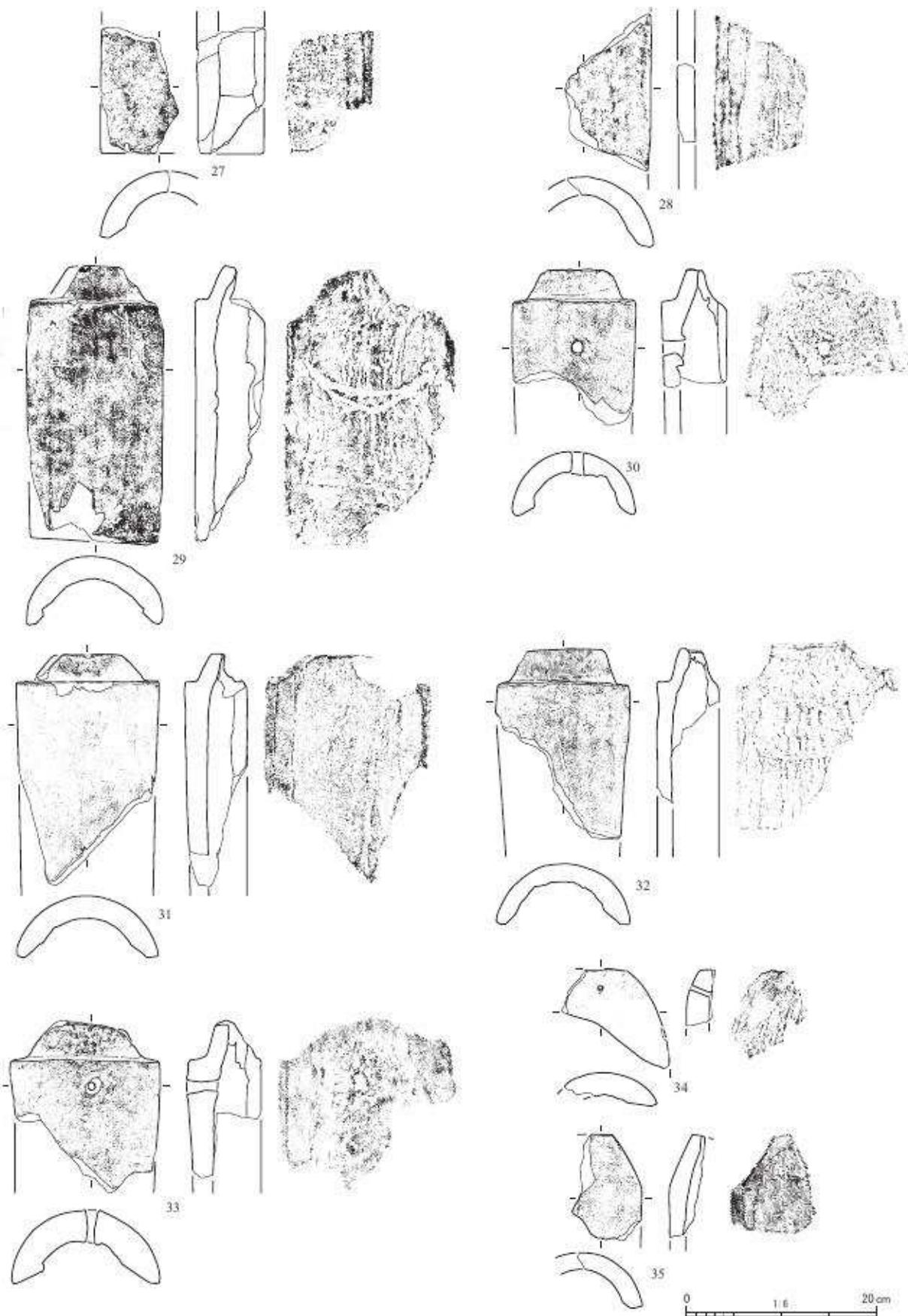


Fig.19 富士見櫓出土丸瓦

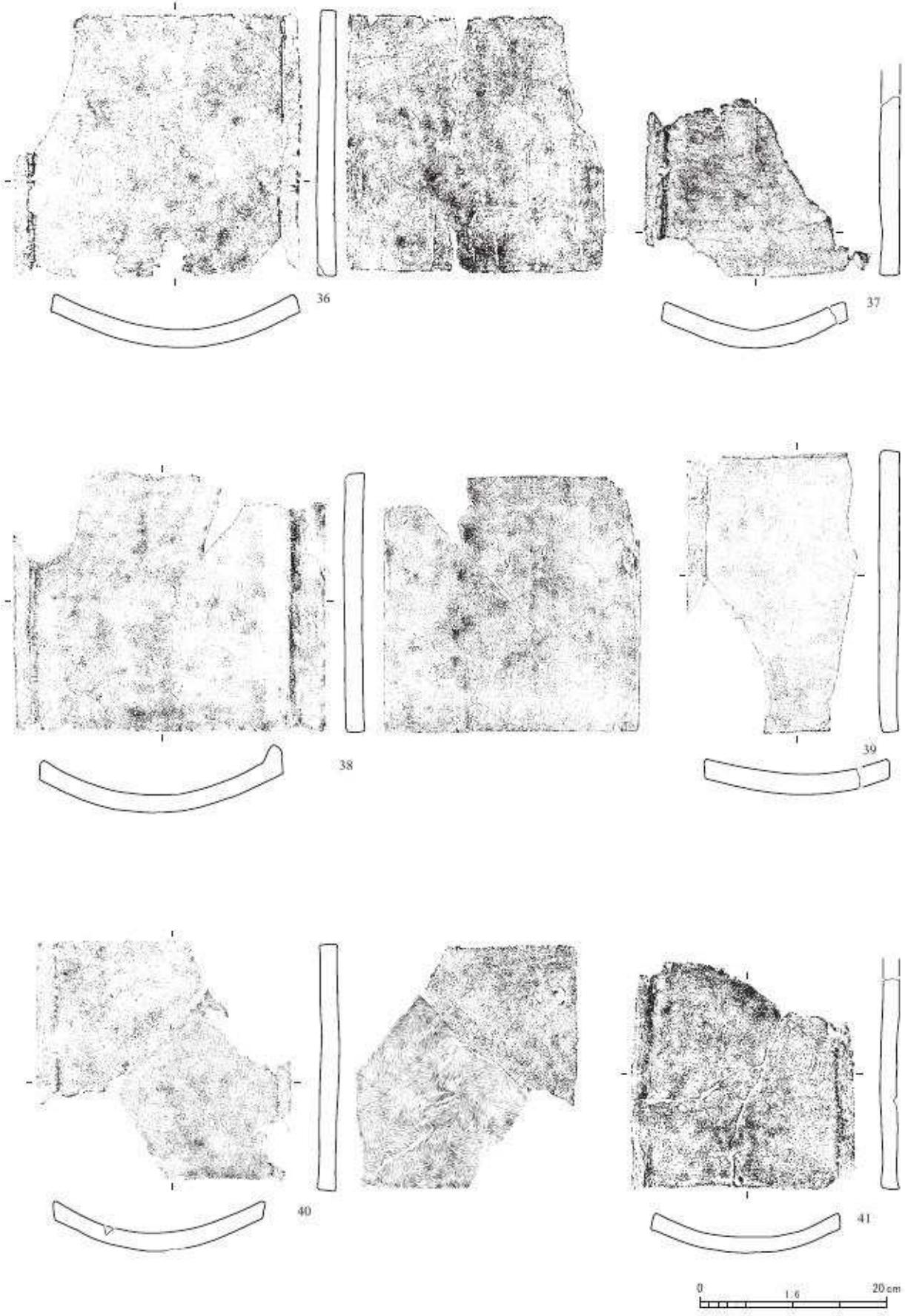


Fig.20 富士見櫓出土平瓦

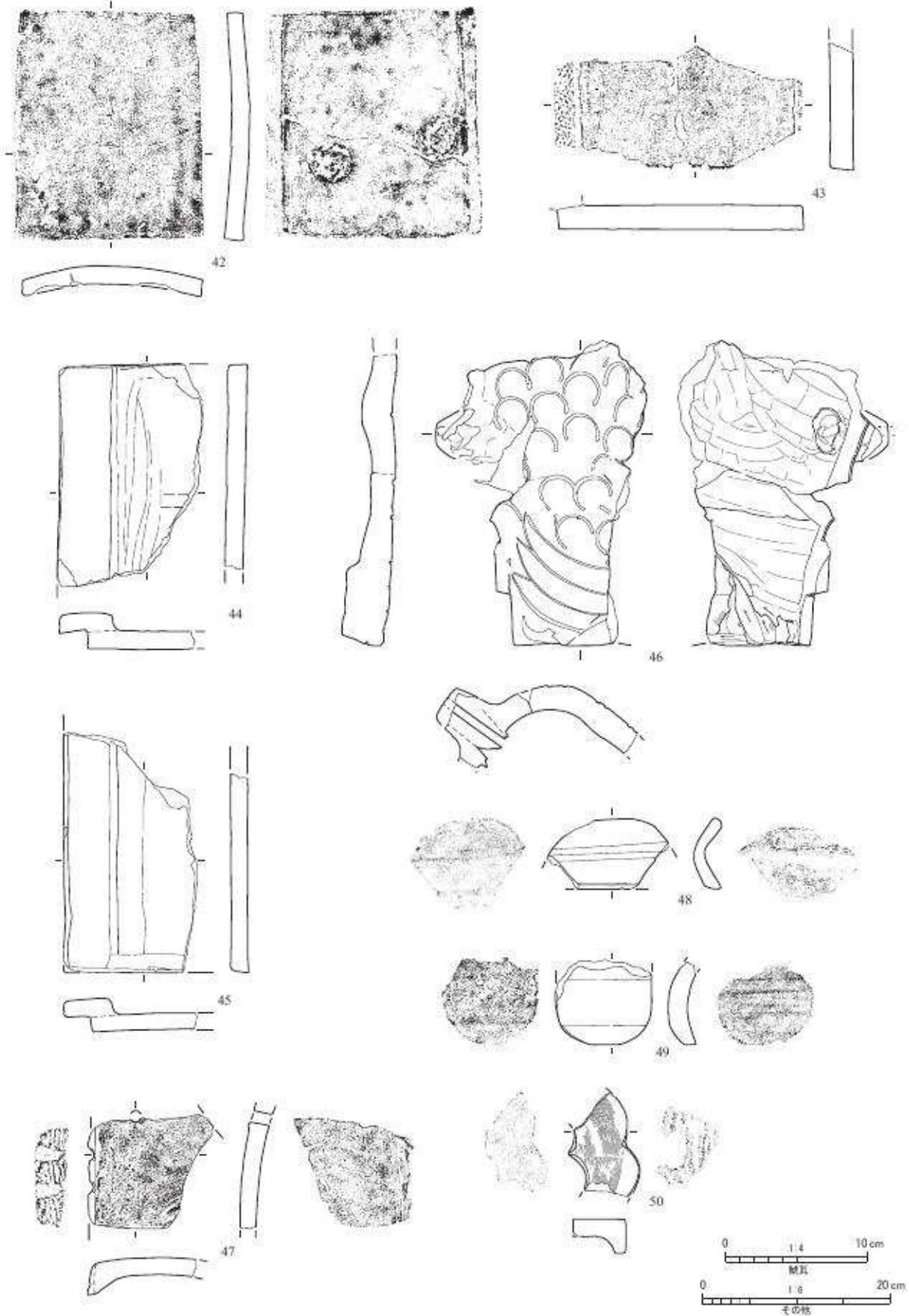


Fig.21 富士見櫓出土瓦（熨斗瓦・塀瓦・鰐瓦・その他）

12・13は2トレンチ1・2層から出土した五葉紋2反転均整唐草紋軒平瓦である。五葉の中心飾りは、剣菱形の中央と先端が外に屈曲する脇から構成され、その両側に長い2単位の唐草紋が連続する。

14・15はそれぞれ2・1トレンチ5層から出土した三葉紋2反転均整唐草紋軒平瓦である。三葉の中心飾りの片側に、二重に表現された2単位の唐草紋が続く。

16は2トレンチ1・2層で出土したもので、肥大化した三葉の中心飾りに二重で表現された唐草紋が続く。18・19は2トレンチ5層から出土したもので、二重の唐草紋がみられる。

17は1トレンチ5層から出土したもので、3単位の唐草紋が表現される。瓦当の右周縁は、区画線の際で切り落とされたものとみられ、14次5トレンチ（本丸西側土塁）出土遺物のうちに同じ特徴を持つ例（教委2016、Fig.28-54・55）が知られる。

20～23の4点は2トレンチ1・2層または7層から出土した菊紋唐草紋軒平瓦である。中心飾りは点珠に16弁を配す菊紋とする。唐草は片側に3単位配される。24は2トレンチ1・2層から出土したもので、残存する紋様の特徴から、菊紋唐草紋と推定する。25は2トレンチ7層から出土したもので、3単位の唐草文が残る。本調査で出土した菊紋唐草紋と類似する。26は2トレンチ1・2層から出土したもので摩耗がはげしいが唐草紋がみられる。

27～35は丸瓦である。27～29は1トレンチ5層、30・32は2トレンチ5層、31は1トレンチ1・2層、33は2トレンチ1・2層、34・35は2トレンチ7層から出土した。

27～30には、凹面に横方向の縫い取りをもつ布の圧痕がみられるもの（27）、凹面に斜め方向のコビキ痕（コビキA）がみられるもの（27・28）、凹面に吊り紐痕がみられるもの（29・30）が含まれる。29は全長29.1cm、幅14.5cm、30は幅13.0cmである。これらの丸瓦は、製作技法の特徴から堀尾氏在城期（1590年～1600年）のものと推定できる。

31・32は、いずれにも横方向のコビキ痕（コビキB）がみられ、それぞれの凹面に粗い布目（編物目）圧痕（31）、縦方向の工具の刺突痕（棒状叩痕）（32）が観察される。これらは製作技法から太田氏在城期（1644年～1678年）以降のものと捉えられる。全長の分かるものはないが、幅は31

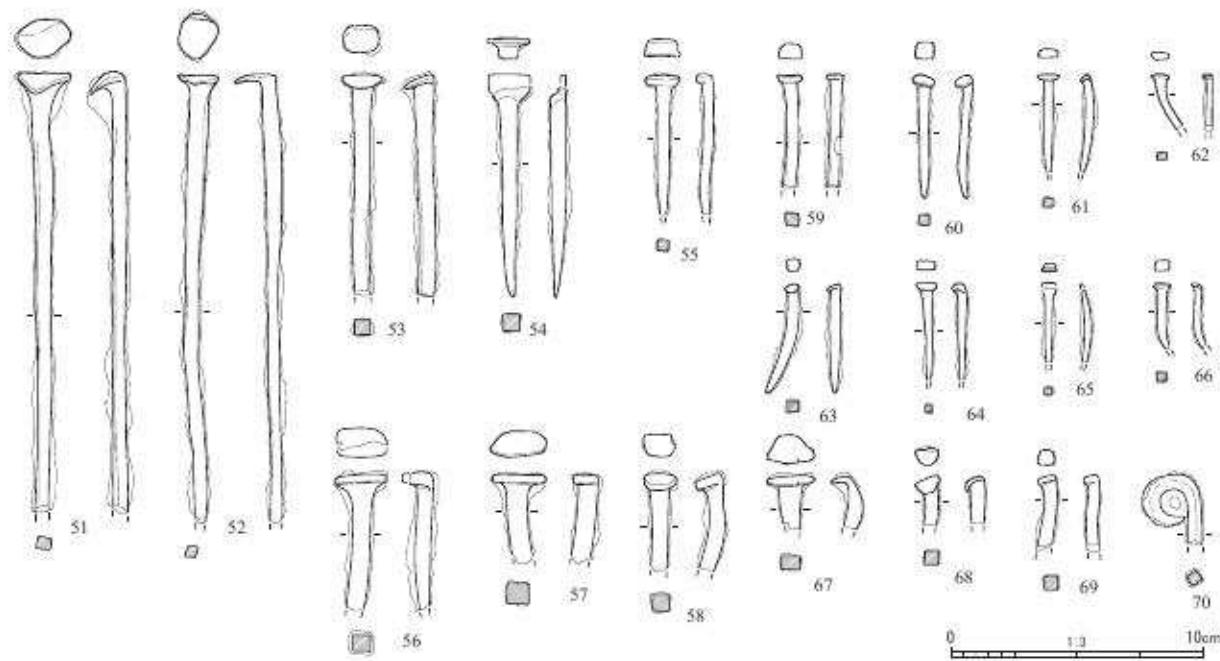


Fig.22 富士見櫓出土鉄製品

が 15.0 cm、32 が 14.2 cm、33 が 15.8 cm である。

34 と 35 は無段式の丸瓦で 34 には穿孔がみられる。いずれも、凹面に粗い布目（編物目）圧痕が見られ、35 には縦方向の工具の刺突痕（棒状叩痕）が残る。本瓦葺の埠瓦として使用された丸瓦と考えられる。

36 ~ 41 は平瓦である。36・38 は 2 トレンチ 1・2 層からの出土で、凸面にハケ（板ナデ）調整がみられる。37 は 1 トレンチ 1・2 層、39 は 2 トレンチ 7 層、40 は 1 トレンチ 3・4 層、41 は 3 トレンチ 3 層から出土している。

42 は 1 トレンチ 5 層出土の駢斗瓦で幅 19.6 cm、長さ 24.7 cm である。凹面には葺いた際の打欠痕がみられる。

43 ~ 45 は埠瓦である。43 は 3 トレンチ 1・2 層からの出土で、一边に沈線を用いた接合痕がみられる。44 は 3 トレンチ 1・2 層、45 は 1 トレンチ 1・2 層から出土している。

46 は 1 トレンチ 5・8 層、2 トレンチ 8 層から出土した破片が接合した鰐瓦である。体部から鰐部にかけての部位と考えられる。鰐や鱗は線刻で表現されている。

47 は 2 トレンチ 5 層から出土した瓦で「口た」の文字が刻まれている。側面には接合痕がみられる。48 ~ 50 は 2 トレンチ 5 層から出土した。48・49 は緩やかに湾曲した端面を持つ瓦で、面戸瓦またはその他の道具瓦と考えられる。50 の全体の形狀は不明である。

51 ~ 70 は 2 トレンチ 3~5 層出土の鉄製品である。51 ~ 69 は和釘、70 は蕨手状に湾曲した鉄製品である。和釘には完形のものが少ないが、頭部や断面の形や大きさに様々なものが見られる。

71 は 1 トレンチ 10 層から出土したかわらけの小破片で、時期は不明である。

72 は 1 トレンチ 1・2 層から出土した瀬戸・美濃産の灰釉丸碗である。近世美濃編年連房 II 期、近世瀬戸編年第 2 ~ 3 小期(17 世紀中葉)に相当すると思われる。
(山口)

(6) 小 結

1・2 トレンチでは、自然堆積等で埋まっていた石垣を、2 m 程検出した。両石垣とも、露出していた石垣と比較して残存状態は良好であった。また、標高 24.6 m 付近と 25.6 m 付近でそれぞれ整地されていた。3 トレンチでは、29.0 m 付近で地山が検出され、上部の石垣と合わせて、残存で 2 m 弱の低い石垣であることが判明した。また、露出していた箇所と新たに検出した箇所では、築石の大きさや石垣の積み方が異なり、石垣の上部と下部で構築時期に差がある可能性がある。

出土遺物の三巴紋軒丸瓦(1 ~ 7)は、形態的特徴から 17 世紀を降る時期の瓦と思われる。また、釘が富士見櫓台直下の 2 トレンチから集中して出土しており、近くに建造物があったことを示唆している。鰐瓦(46)は、鰐や鱗がすべて線刻で表現されており、5 次調査で出土しているものとは表現が異なる。
(坂下)

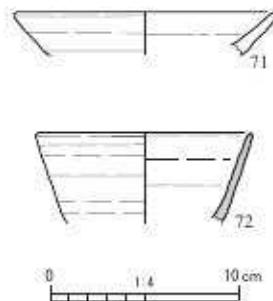


Fig.23 富士見櫓出土土器

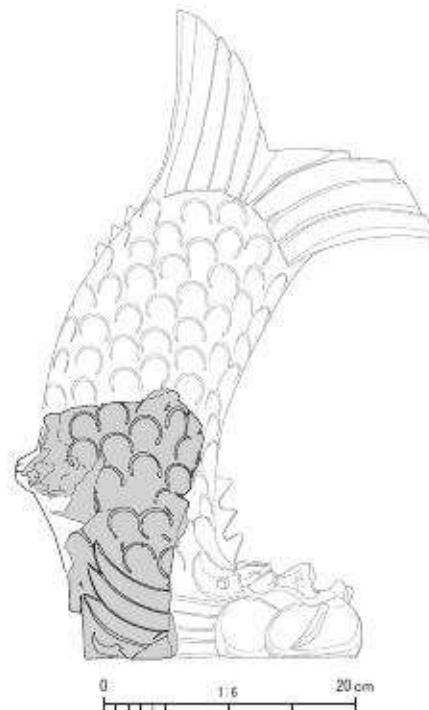


Fig.24 鰐瓦復元図

2 天守曲輪の調査

(1) 概 要

位置と層位 天守曲輪において、曲輪を囲う土塁の基礎構造を明らかにする目的で、合計6箇所の調査溝を設定した。17次調査のトレント2箇所を北へ延長する形で6・7トレントを、天守曲輪外側石垣に直交するよう西から4・5・8・9トレントをそれぞれ設定した。

天守曲輪における基本土層は、上層から表土、明治時代以降造成土（第5段階）、江戸時代堆積層（第4段階）、江戸時代整地層（第4段階）、江戸時代盛土層（第4段階）、安土桃山時代整地層（第3段階）、安土桃山時代地業層（第3段階）に大別できる。天守門南側における過去のボーリング調査で、標高30m付近まで盛土であることが判明している。これにより天守曲輪はほぼ盛土で構成されていることがわかる。今回の調査でも地山層は確認されていない。

(2) 4トレント検出遺構

調査の概要 (Fig. 25) 4トレントは、天守曲輪を囲う土塁の基礎構造を明らかにするため、曲輪西面の石垣に直交させ約1m×7mの規模で設定した。天守曲輪西面の石垣は屏風折になっているため、調査溝は東西方向から約45度南へ振れている。

天守曲輪南石塁内側石垣 (Fig. 26) 天守曲輪の外側石垣の天端石から内側へ約3.5mの箇所で石垣が検出された。検出された石垣は、天守曲輪の内側を向いて構築されており、地表より約60cm下で確認された。自然石を積んだ野面積みの石垣で、築石は9段分が確認され、残存高1.2mを測る。石垣は5・7トレントの成果から、下層まで続くと考えられる。整地面までは未掘である。使用石材は珪岩で、石垣勾配は73°と急勾配である。裏込めも確認された。天守曲輪内側の石垣に

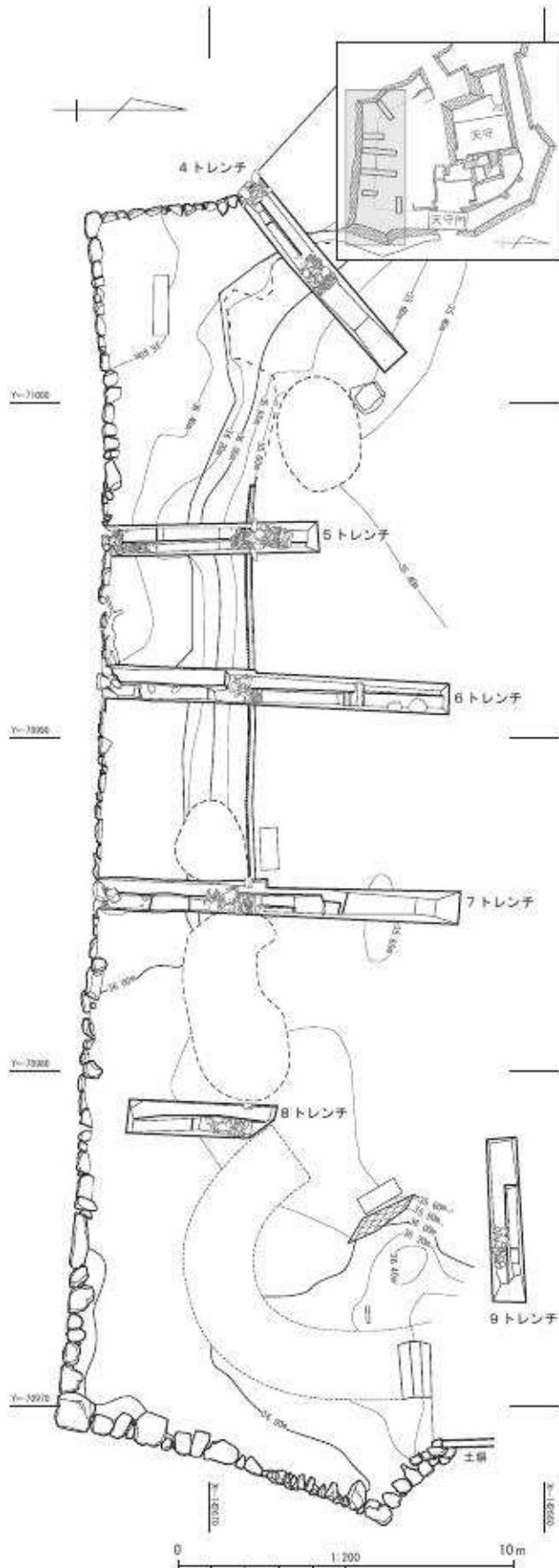


Fig.25 天守曲輪トレント配置図

伴う裏込めの範囲は幅約80cm、外側に伴うものは幅約1.2mである。天守曲輪外側の石垣と今回検出した内側の石垣で、石墨を形成している。

標高35.0m付近で固く縮まった整地層(13層)が検出された。整地層の下層は、縮まりのない埋土で石垣が短期間のうちに埋められている様子が確認された。

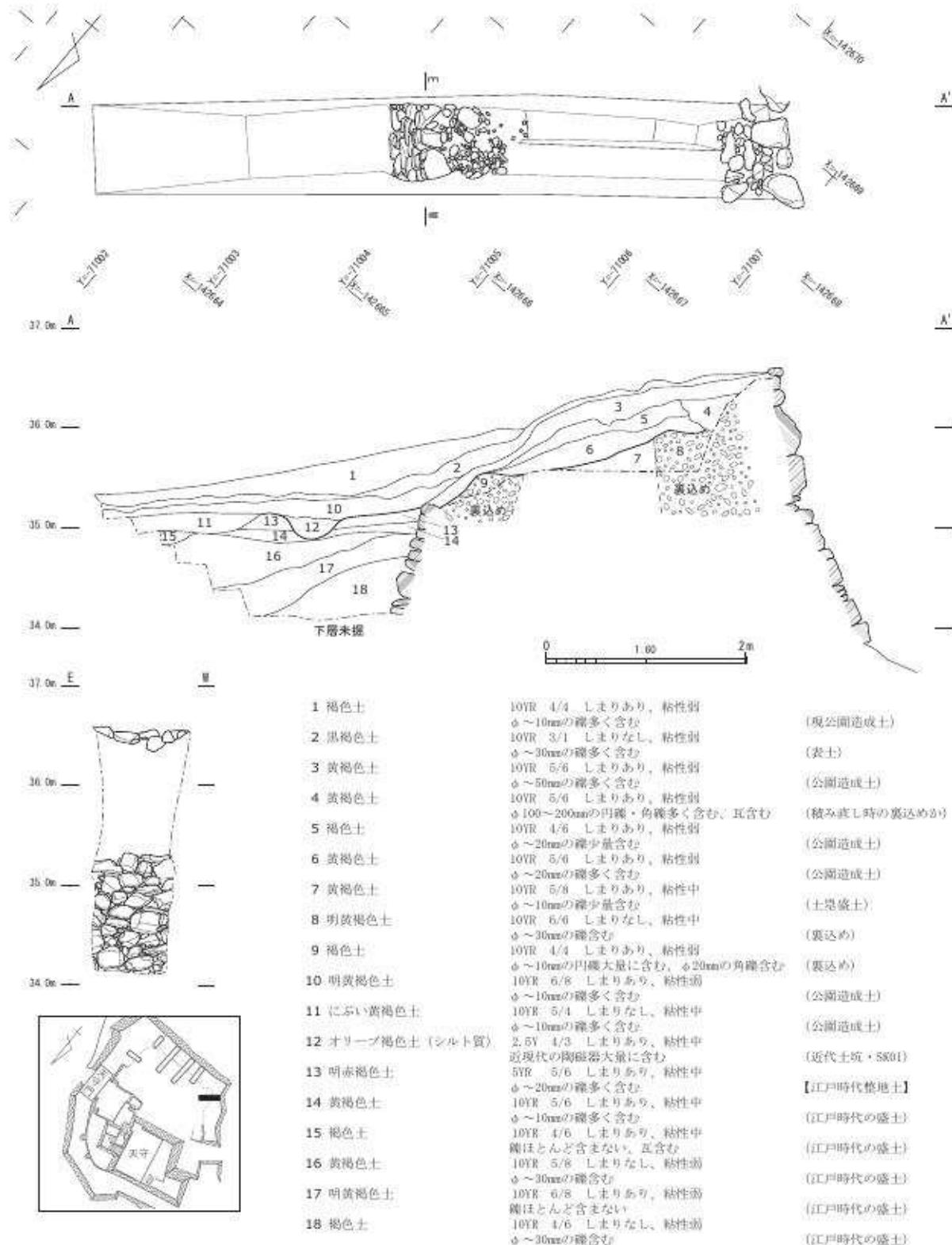


Fig.26 4トレンチ実測図

4 トレンチ遺物出土状況 4 トレンチでは、明治時代以降の公園造成土内から瓦が少量出土したほか、SK01（12層）から大量の陶磁器が出土した。急須や小皿など食器類が多くを占めており、陶磁器の帰属時期は明治時代以降のものと考えられる。明治時代以降、天守曲輪で茶屋が営まれていた時期があることから、SK01はそのときに設けられた廃棄坑と考えられる。

(3) 5 トレンチ検出遺構

調査の概要 (Fig. 25) 5 トレンチは、天守曲輪を囲う土塁の基礎構造を明らかにするため、曲輪南面の石垣に直交する約 1 m × 6 m の規模で設定した。調査溝付近には桜の木が植栽されている

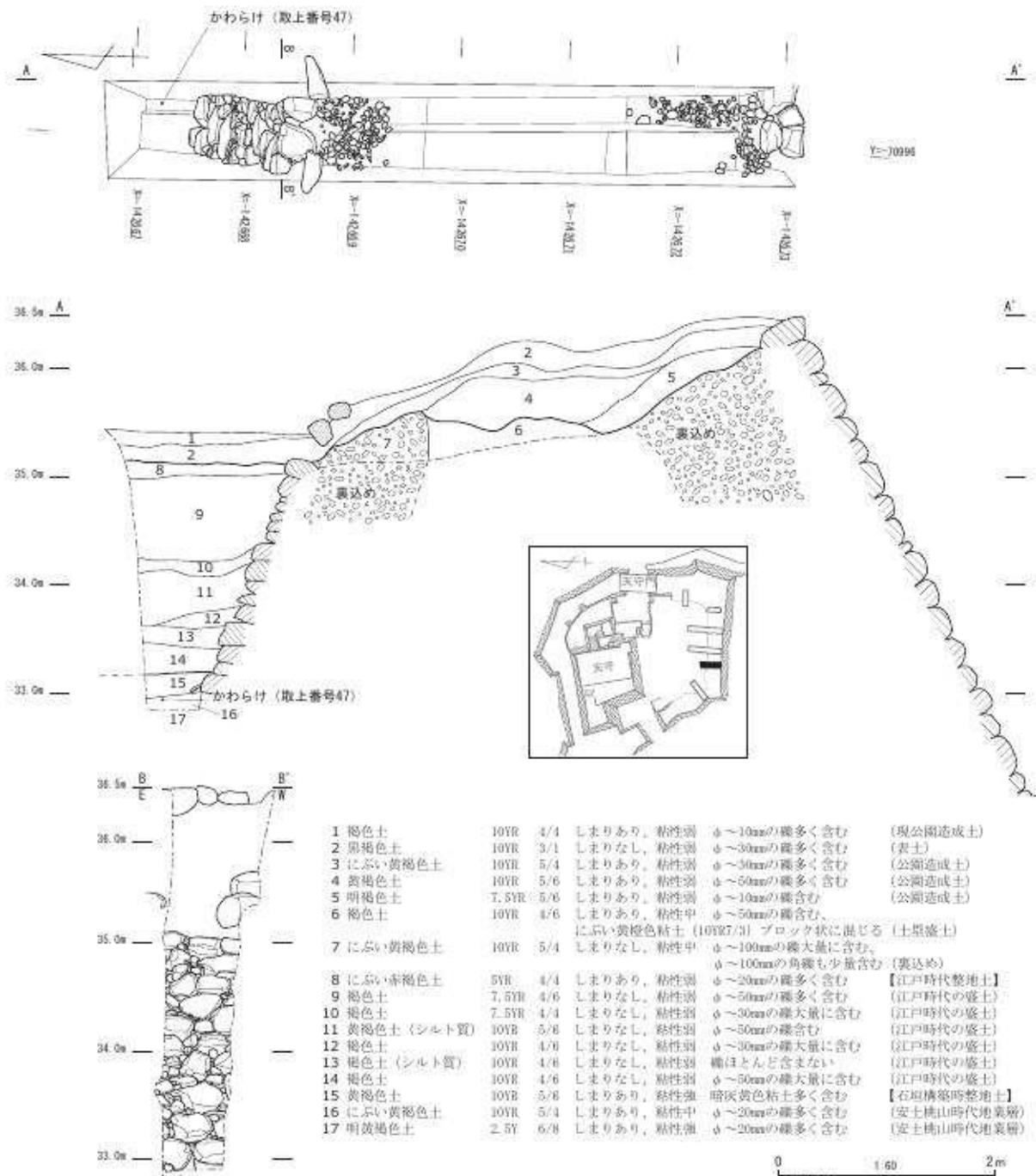


Fig.27 5 トレンチ実測図

ため、樹木を避けるように樹木の東側へ調査溝を設定した。

天守曲輪南石塁内側石垣 (Fig. 27) 天守曲輪南側石垣の天端石から内側へ約 4.5 m の箇所で石垣が検出された。検出された石垣は、4 トレンチ同様、天守曲輪の内側を向いて構築されており、地表より約 20cm 下で確認された。石垣の直上には公園縁石が東西方向に続いており、石塁の延長方向とほぼ一致する。検出された遺構は、自然石を積んだ野面積みの石垣で、築石は 11 段分が確認され、残存高約 2.2 m を測る。使用石材は珪岩で、最大の築石は、石面で幅 40cm × 高さ 20cm である。全体的には幅と高さが 20cm ~ 30cm 程の築石が多く、天守曲輪外側の石垣に使用されている築石と比べると、比較的小ぶりな石が多く使用されている。石垣勾配は 70° と急勾配である。石塁の内外石垣に伴う裏込めも両方確認され、天守曲輪内側の石垣に伴う裏込め層は幅約 1 m、外側石垣に伴う裏込めは幅約 1.2 m である。裏込めに使用された栗石は、直径 3 ~ 10cm の円礫である。天守曲輪内側の土層堆積状況は、石垣の天端石から約 2 m 剥削したところで黄褐色土の整地層 (15 層) が確認された。整地層は石垣の基底石を埋めるように整地されており、それより下層は石垣構築時の地業層であると考えられる。整地層から上層は、4 トレンチ同様、縮まりのない埋土が 1.8 m 程の厚さで堆積している。土層の堆積状況から、おおよそ 2 回の作業単位を確認することができ、2 回に分けて埋められたと考えられる。しかし、いずれも時期差はほとんどないと想定され、短期間のうちに何らかの理由で石垣が埋められたと考えられる。また、5 トレンチでも標高 35.0 m 付近で固く縮まった整地層 (8 層) が検出された。この整地層は、残存する最上段の築石の高さとほぼ一致する。

5 トレンチ遺物出土状況 出土遺物には、近世～現代までの堆積土を中心に、軒平瓦 (85) をはじめ、丸・平瓦がみられる。石垣構築時の地業層と考えられる 16 層からは、かわらけの破片 (取上番号 47) が出土したが、細片のため帰属時期は不明である。

(4) 6 トレンチ検出遺構

調査の概要 (Fig. 25) 6 トレンチは、17 次調査 1 トレンチを北側に延長するように、曲輪南面の石垣に直交する約 1 m × 6 m の規模で設定した。

天守曲輪南石塁内側石垣 (Fig. 28) 天守曲輪の南側石垣の天端石から内側へ約 4 m の箇所で石垣が検出された。検出された石垣は、他のトレンチで検出されたものと同様、天守曲輪の内側を向いて構築されており、地表より約 60cm 下で確認された。石垣の直上には他のトレンチ同様、石塁の延長方向とほぼ一致する公園縁石がある。検出された遺構は、自然石を積んだ野面積みの石垣で、築石は 8 段分が確認され、残存高約 1.2 m を測る。5・7 トレンチの成果から、下層まで石垣は続くと考えられるが、整地面までは未掘である。使用石材は珪岩で、全体的に幅と高さが 20cm ~ 30cm 程の築石を多く使用している。石垣勾配は 68° で間詰石も良好に残存している。石塁の内側石垣に伴う、幅約 80cm の裏込め層も確認された。裏込めに使用された栗石は、直径 2 ~ 10cm の円礫である。天守曲輪内側は、縮まりのない埋土が堆積している状況が確認された。この埋土は、他のトレンチでも確認されている、江戸時代の埋土と考えられる。埋土は天守曲輪北側から石塁に向かって土砂が埋められていることが確認された。また、他のトレンチでも確認されているように標高 35.0 m 付近で固く縮まった整地層 (13 層) が 6 トレンチでも検出された。

6 トレンチ遺物出土状況 出土遺物には、近世～現代までの堆積土から、丸瓦 (91) や鎧 (108) がみられる。丸瓦 (91) は、凹面にコビキ A が確認できる。また、江戸時代の埋土と考えられる 14 層から平瓦 (100) が出土している。

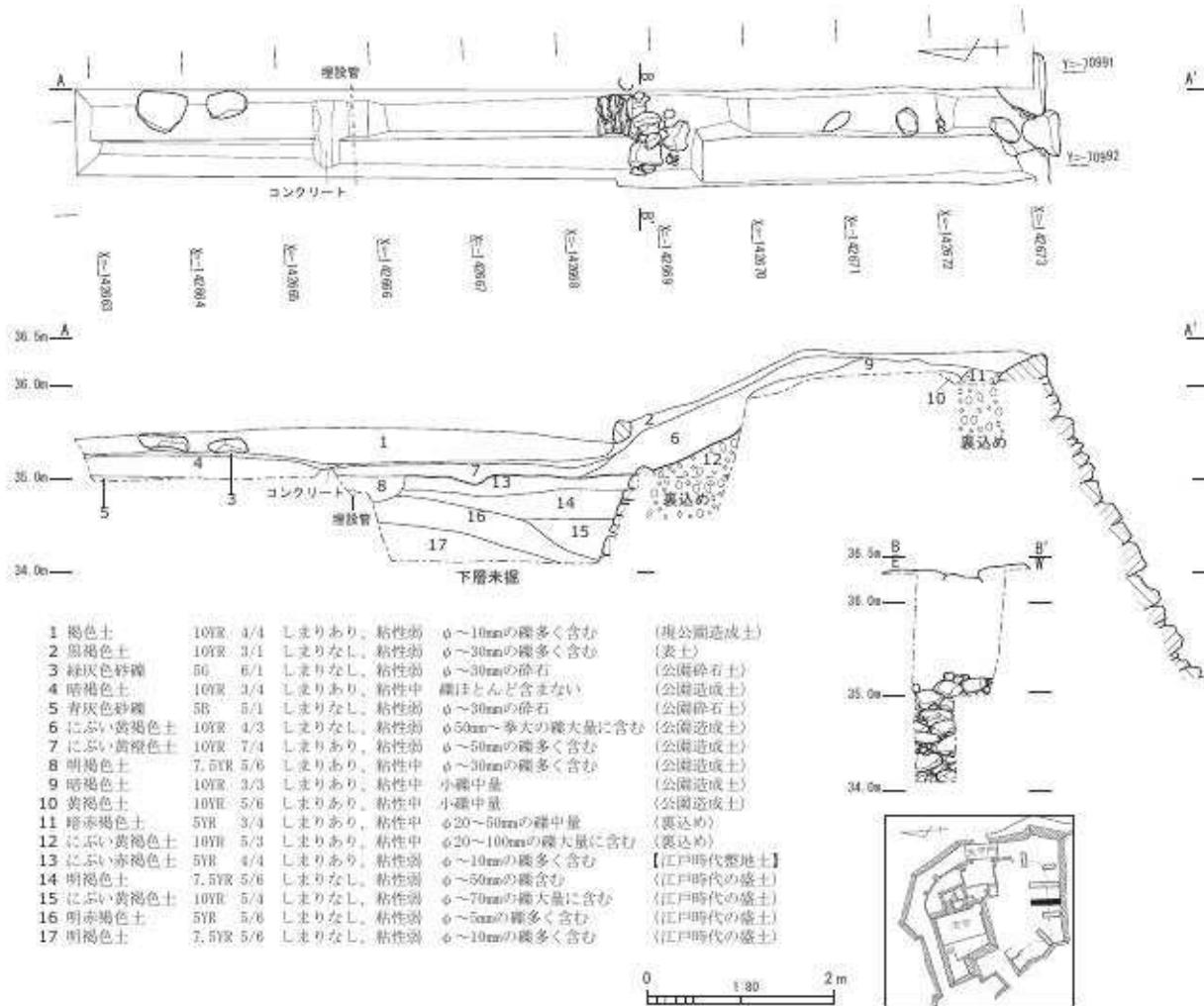


Fig.28 6トレンチ実測図

(5) 7トレンチ検出遺構

調査の概要 (Fig. 25) 7トレンチは、17次調査2トレンチを北側に延長するように、曲輪南面の石垣に直交する約1m×5mの規模で設定した。

天守曲輪南石塁内側石垣 (Fig. 29) 天守曲輪の南側石垣の天端石から内側へ約4mの箇所で石垣が検出された。検出された石垣は、天守曲輪の内側を向いて構築されており、地表より約60cm下で確認された。石垣の直上には他のトレンチ同様、公園縁石が東西方向に続いている。石塁の延長方向とほぼ一致する。検出された遺構は、自然石を積んだ野面積みの石垣で、築石は9段分が確認できた。石垣の残存高は約2.2mを測る。使用石材は珪岩で、最大の築石は、石面で幅40cm×高さ30cmであるが、全体的には幅と高さが20cm~30cm程の築石が多く、他のトレンチで検出された石垣と同様である。石垣勾配は67°と他と比較するとやや緩やかであるが、途中で傾斜が変化しており、孕みが生じている可能性もある。ただし、間詰石は良好に残存しており、全体的には石垣の残存状況は良好である。石塁の内側石垣に伴う、幅約80cmの範囲において裏込めが確認された。裏込めに使用された栗石は、直径2~10cmの円礫である。天守曲輪内側の土の堆積状況は、石垣の天端石から約2m掘削したところで黄褐色土の整地層(28層)が確認できた。整地層は、基底石を埋めるように設けられており、それより下層は石垣構築時の地業層と考えられる。この状況は、5トレンチで確認できたものと同様である。整地層(28層)の上層は、他トレンチ同様、締まり

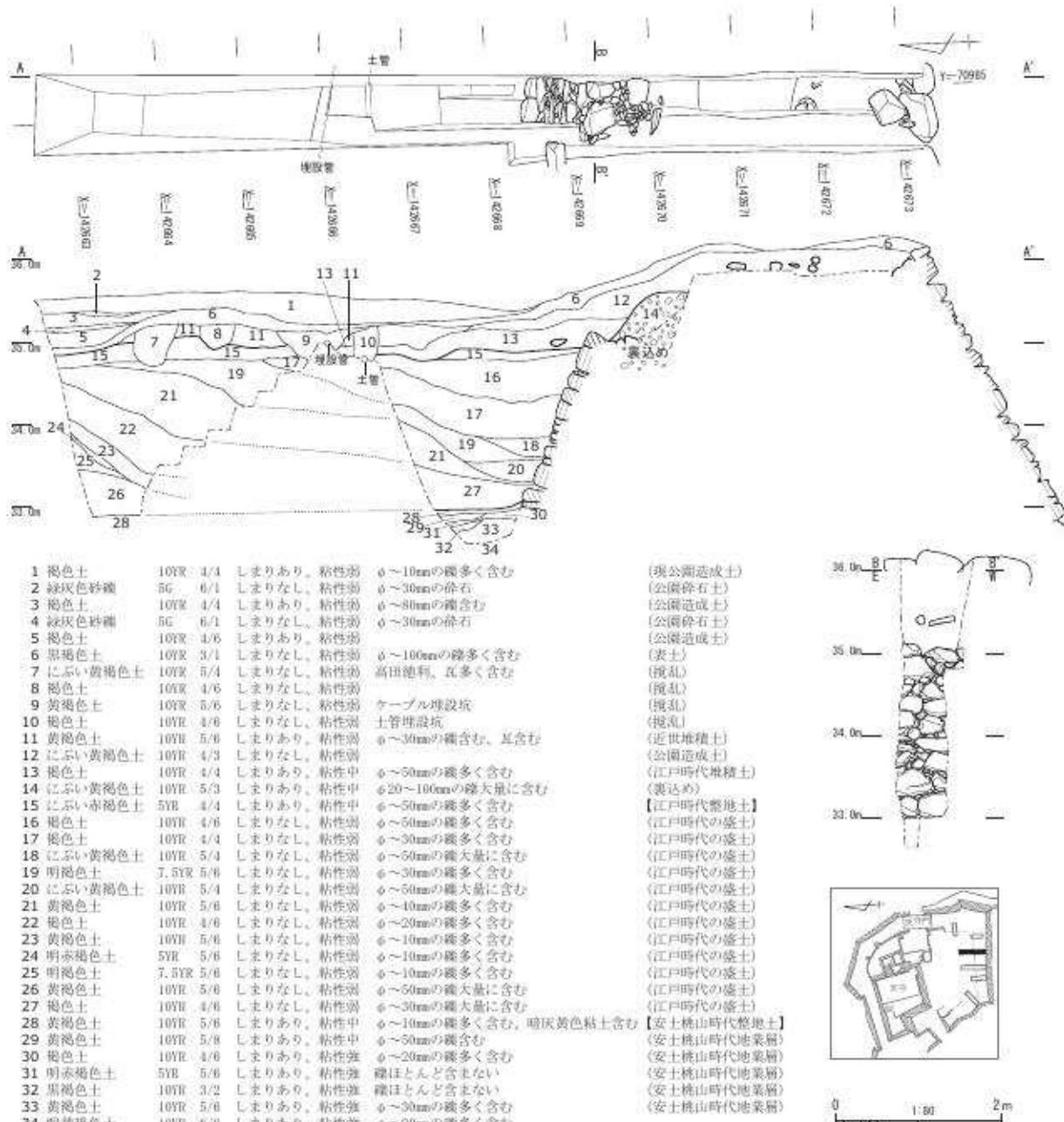


Fig.29 7トレンチ実測図

のない埋土が 1.8 m 程の厚さで堆積している。このトレンチでは北側へ延長したこと、天守曲輪南側から天守台方向に向かって土砂が埋められていることが確認された。また、7トレンチでも標高 35.0 m 付近で固く締まった整地層（15 層）が検出された。こちらも残存する最上段の築石の高さと一致する。

7トレンチ遺物出土状況 出土遺物には、近世～現代までの堆積土を中心に、軒瓦・丸瓦・平瓦・棟瓦(101)がみられる。特に丸瓦は、凹面にコビキ A がみられるものが多く確認された。後述するが、隣接している 8 トレンチで瓦溜りが検出されているため、そこからの混じり込みと思われる。また、近代の土坑から、高田徳利（109）が出土した。「間渕屋」と銘が入っており、現在も浜松市の市街地内に現存する酒屋の徳利であると判明した。廃城後における浜松城の姿を知る上で貴重な発見となつた。

(6) 8トレンチ検出遺構

調査の概要 (Fig. 25) 8トレンチは、天守曲輪を囲う土塁の基礎構造を明らかにするため、曲輪南面の石垣に直交する約1m×4.5mの規模で設定した。調査溝の北側には天守門へ入るための舗装通路が敷設されているため、舗装を傷めないように調査溝を設定した。

天守曲輪南石塁内側石垣 (Fig. 30) 天守曲輪の南側石塁の天端石から内側へ約4mの箇所で石垣が検出された。検出された石垣は、他のトレンチで検出された石垣同様、天守曲輪の内側を向いて構築されており、地表より約90cm下で確認された。検出された遺構は、自然石を積んだ野面積みの石垣で、築石は6段分が確認された。石垣の残存高は約1.3mを測る。5・7トレンチの成果から、下層まで石垣は続くと考えられた。整地面までは未掘である。使用石材は珪岩で、最大の築石は、石面で幅40cm×高さ20cmである。石垣勾配は、上から2段は57°、それより下は68°と傾斜に開きがある。石塁の内側石垣に伴う、幅80cmの裏込め層も確認された。裏込めに使用された栗石は、直径2~10cmの円礫である。

瓦溜り (Fig. 30) 検出された石垣の内側は、瓦が大量に埋まっている状況が確認された。他のトレンチでは、この高さから下層は江戸時代の埋土が確認されているが、8トレンチでは埋土ではなく瓦が石垣に接地する程に大量に堆積していた。瓦溜り上面から約1.3mまで掘削したが、まだ下層まで瓦が続いている。瓦は深くなるほど瓦の密度が濃くなっている。舗装通路により掘削範囲に制約があるため、掘削が困難になったところで掘削を終了した。瓦溜りの範囲は不明であるが、西に隣接する7トレンチでは確認されていないため、その手前までの広がりと推測できる。

8トレンチ遺物出土状況 8トレンチでは、瓦溜りを中心に軒瓦を含む丸瓦・平瓦が大量に出土した。瓦は大きい破片のものが多くあり、完形の丸瓦も出土している。軒丸瓦の三巴紋や軒平瓦の

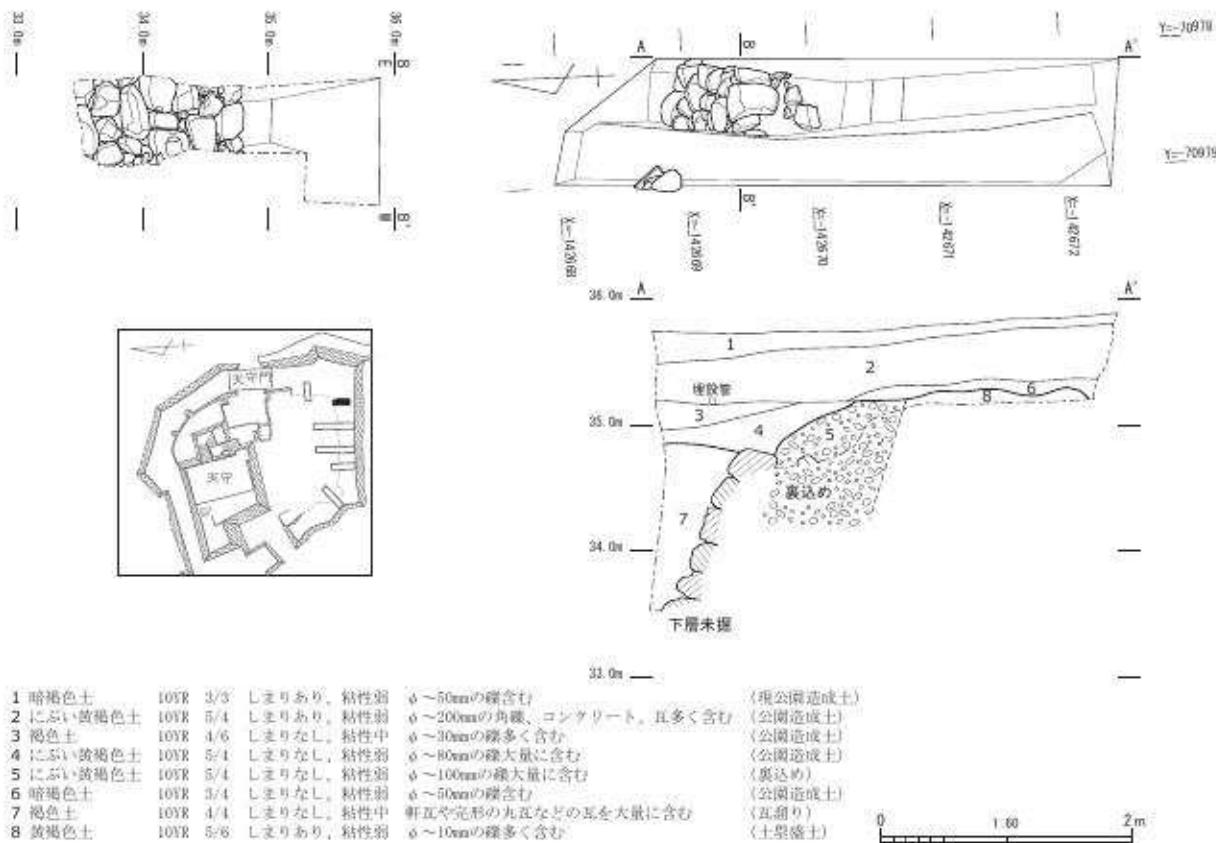


Fig.30 8トレンチ実測図

均整唐草紋など、紋様の特徴から堀尾氏在城期の瓦と考えられる。瓦溜り（7層）から出土した瓦は、丸瓦の製作技法などから、すべて堀尾氏在城期に帰属すると推察される。

(7) 9トレンチ検出遺構

調査の概要 (Fig. 25) 9トレンチは、天守曲輪を囲う土塁の基礎構造を明らかにするため、曲輪東面の石垣に直交する約1m×5mの規模で設定した。調査溝東側には天守門へ入るための舗装通路が敷設されているため、通路際まで調査溝を設定した。

天守曲輪南石塁内側石垣 (Fig. 31) 地表から40cm程掘削したところで、現代の埋設管やコンクリート片が検出され、公園造成に伴う改変が認められた。また、最大で30cm×20cm程の大きさの礫群がトレンチ中央やや東寄りの箇所で検出された。公園造成土内から礫が乱雑に置かれたような検出状況がみられることから、公園造成に伴う現代の礫群と判断した。トレンチ北壁沿いに、トレンチ幅の半分程のサブトレンチを設定し下層を確認したところ、トレンチ東側で急に落ち込むような層位が確認された。13層上面で硬化面が確認されたため、13層は整地層と判断した。9トレンチでは、他のトレンチで確認されている石塁は確認されなかった。

9トレンチ遺物出土状況 (Fig. 31) 公園造成土層から、軒丸瓦（74・76・79）や軒平瓦（83）が出土した。軒丸瓦は、三巴紋と繋九目結紋が、軒平瓦は斜格子紋がそれぞれ出土している。また7層より、近世から近代にかけての火鉢（107）も出土している。
(坂下)

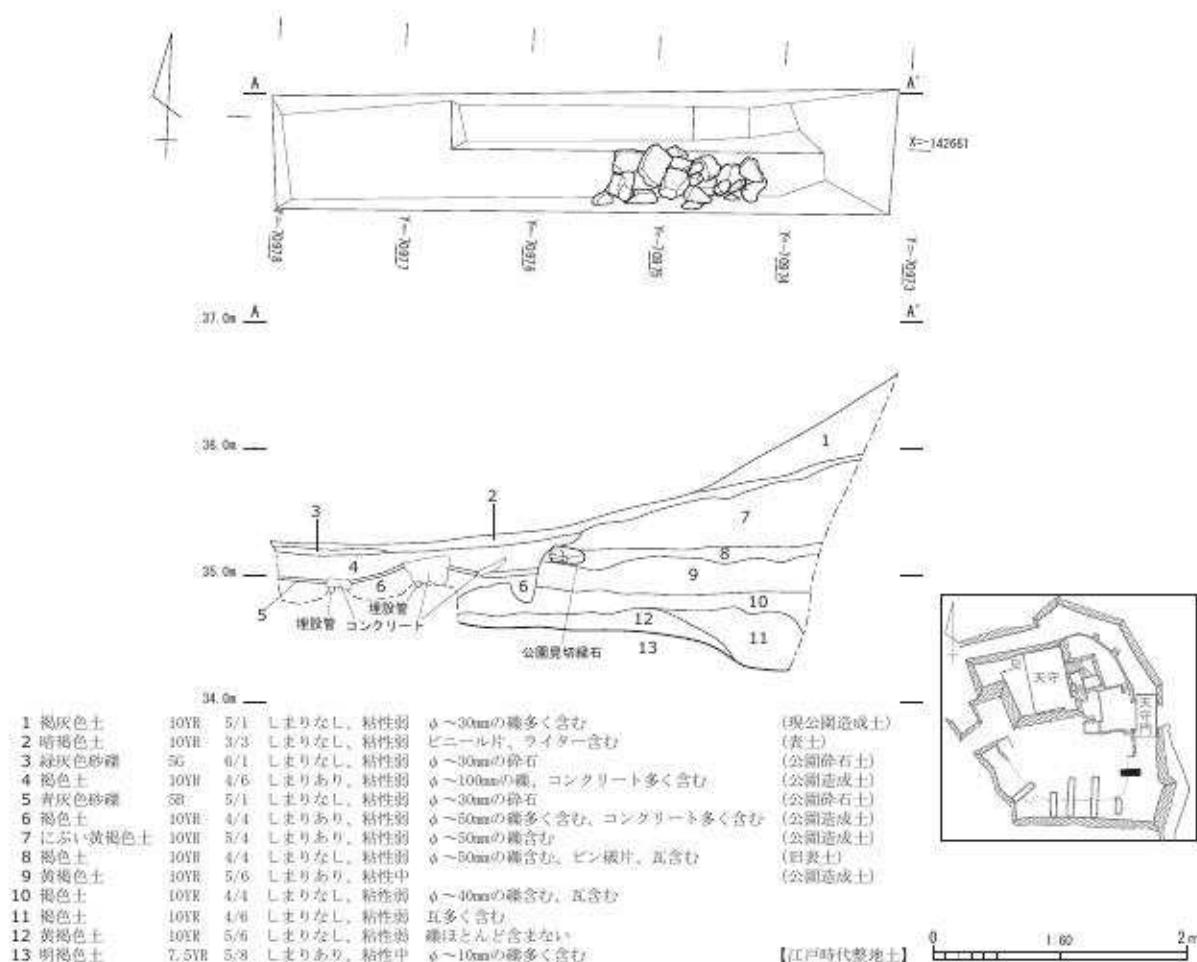


Fig.31 9トレンチ実測図

(8) 天守曲輪出土遺物

天守曲輪から出土した遺物のうち、軒丸瓦（73～79）、鳥伏間瓦（80）、軒平瓦（81～85）、丸瓦（86～97）、平瓦（98～100）、棟瓦（101）、角棟伏間瓦（102）、その他不明瓦（103～106）、土器（107・116）、鉄製品（108）、陶磁器（109～115）を図示する（Fig. 32～37）。

軒丸瓦のうち、73～76が連珠左巻三巴紋、79が繫丸目結紋である。その他に軒丸瓦は、珠紋2点、欠損部が大きく紋様が不明なものが1点存在するが、時代を特定できる特徴がみられないため、ここでは掲載していない。

73～76は連珠左巻三巴紋軒丸瓦である。73は8トレンチ2層から出土したもので、凹面に斜め方向のコビキ痕（コビキA）が確認できる。74は9トレンチ8層から出土したもので、巴紋の尾が接して圓線を成す。75・76はそれぞれ6トレンチ2層（17次1トレンチ）、9トレンチ7層からの出土である。

77は7トレンチ1層からの出土で珠紋が確認できる。78は7トレンチ1層（17次2トレンチ）からの出土で太い巴紋が確認できる。

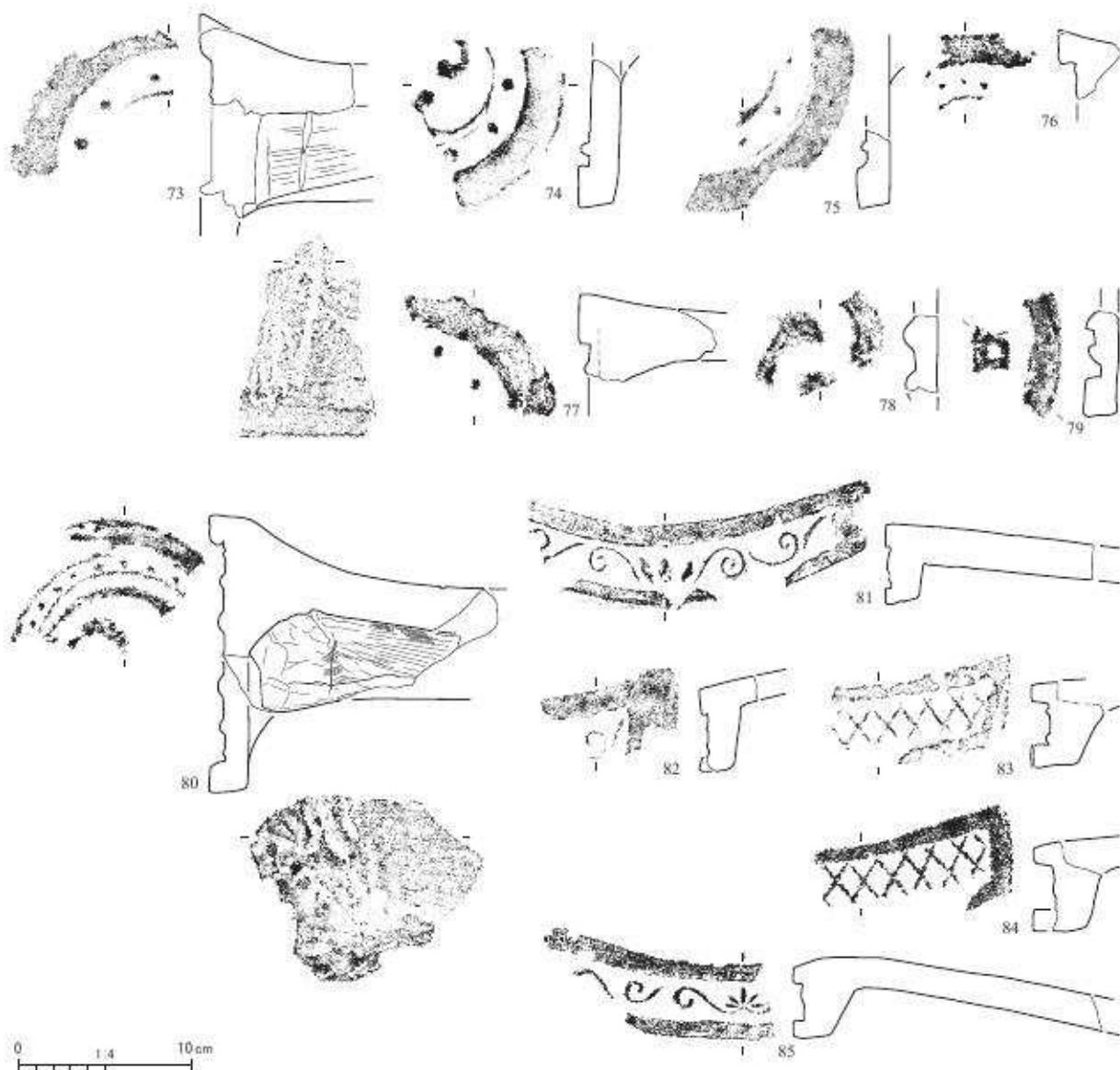


Fig.32 天守曲輪出土軒瓦

79は9トレンチ10層から出土した繫九目結紋軒丸瓦で、本庄(松平)氏在城期(1702年～1729年、1749年～1758年)のものと考えられる。

80は8トレンチ7層から出土した鳥伏間瓦である。凹面に斜め方向のコビキ痕(コビキA)が確認でき、堀尾氏在城期(1590年～1600年)に遡ると推定される。

81～85は軒平瓦である。81・82はそれぞれ8トレンチ7層、6トレンチ2層(17次1トレンチ)から出土した三葉紋3反転均整唐草紋軒平瓦である。紋様の特徴から、堀尾氏在城期(1590年～1600年)のものと推定できる。83・84はそれぞれ9トレンチ7層、8トレンチ7層出土の斜格子紋軒平瓦である。12次5トレンチ出土遺物のうちに、類例(浜松市教委2015b、Fig.24-36・37)が報告されている。

85は5トレンチ3層から出土した五葉紋3反転均整唐草紋軒平瓦である。中心飾りは種子形の5つの子葉が開く構成で、3単位の唐草紋が続く。第一唐草は中心飾りの中央と接する。14次5トレンチ出土遺物のうちに、同じ特徴を持つ例(浜松市教委2016a、Fig.28-54)が報告されている。

86～97は丸瓦である。86～94は凸面に縄目が残るもの(86～91)、凹面に斜め方向のコビキ痕(コビキA)がみられるもの(86～93)、凹面に横方向の縫取りをもつ布の圧痕がみられるもの(87～92)、凹面に吊り紐痕がみられるもの(87～93)が含まれる。これらの瓦は、製作技法の特徴から、堀尾氏在城期(1590年～1600年)のものと推定できる。86～89・93・94は8トレンチ7層からの出土、90・91・92はそれぞれ7トレンチ13層(17次2トレンチ)、6トレンチ2層(17次1トレンチ)、7トレンチ6層からの出土である。

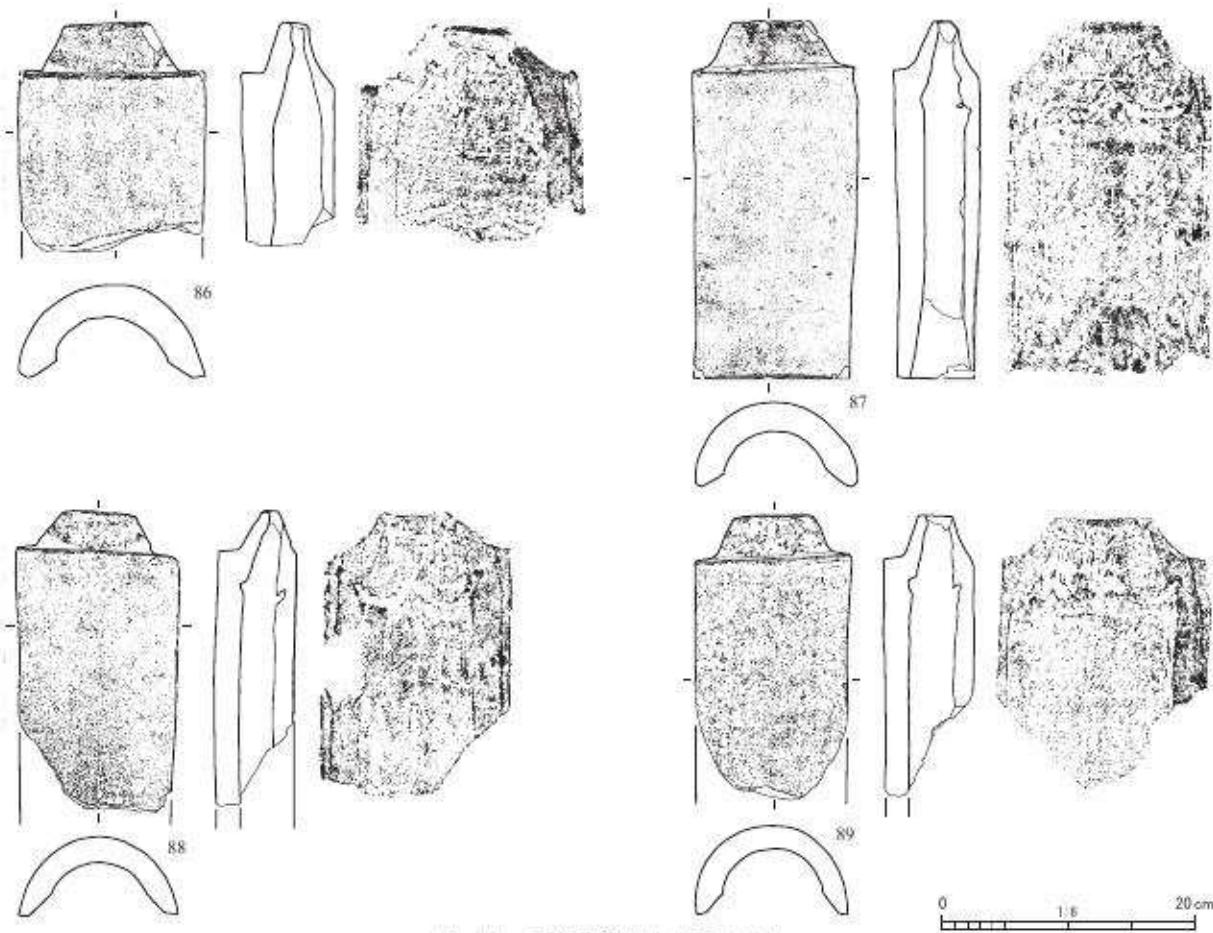


Fig.33 天守曲輪出土丸瓦(1)

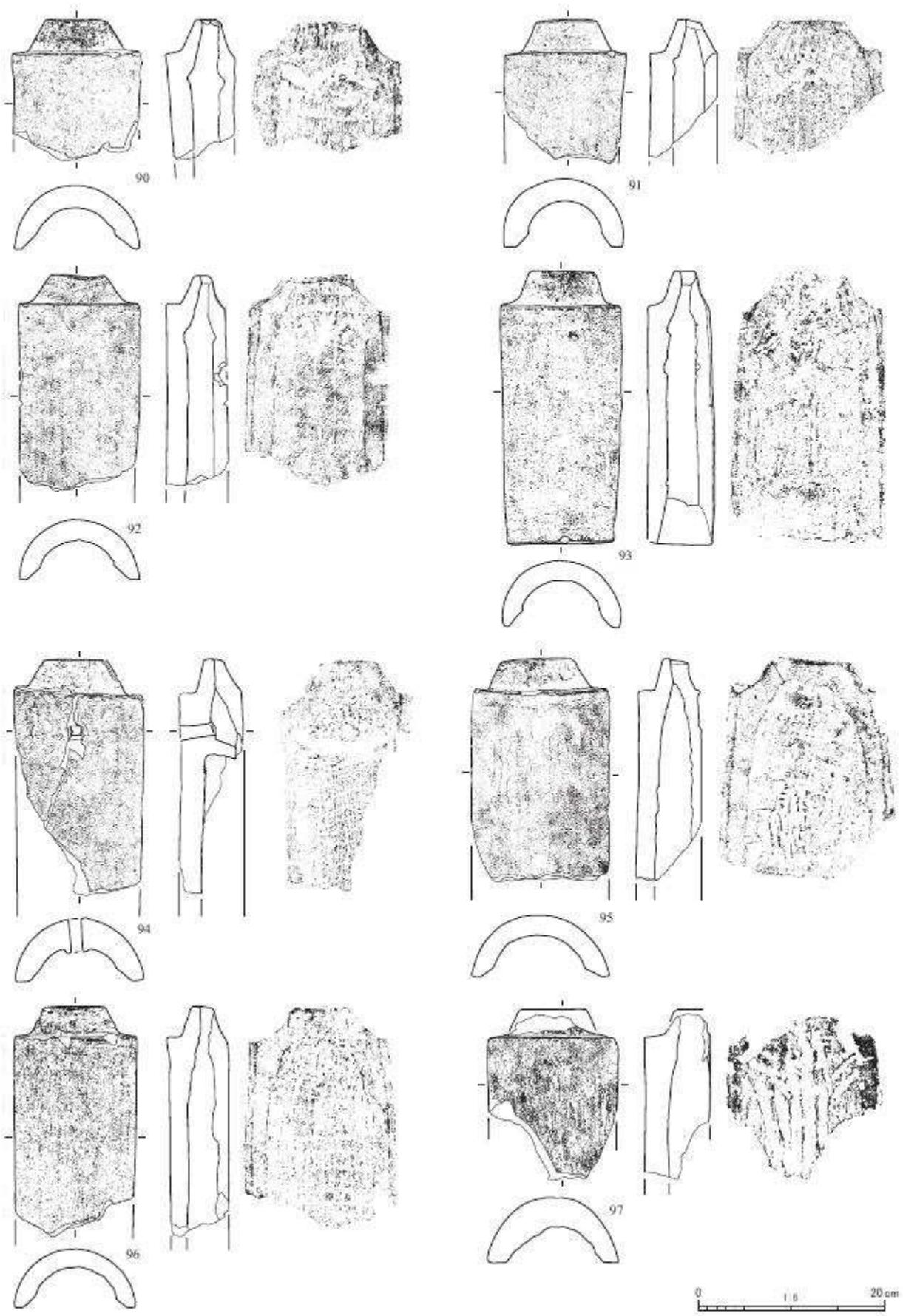


Fig.34 天守曲輪出土丸瓦 (2)

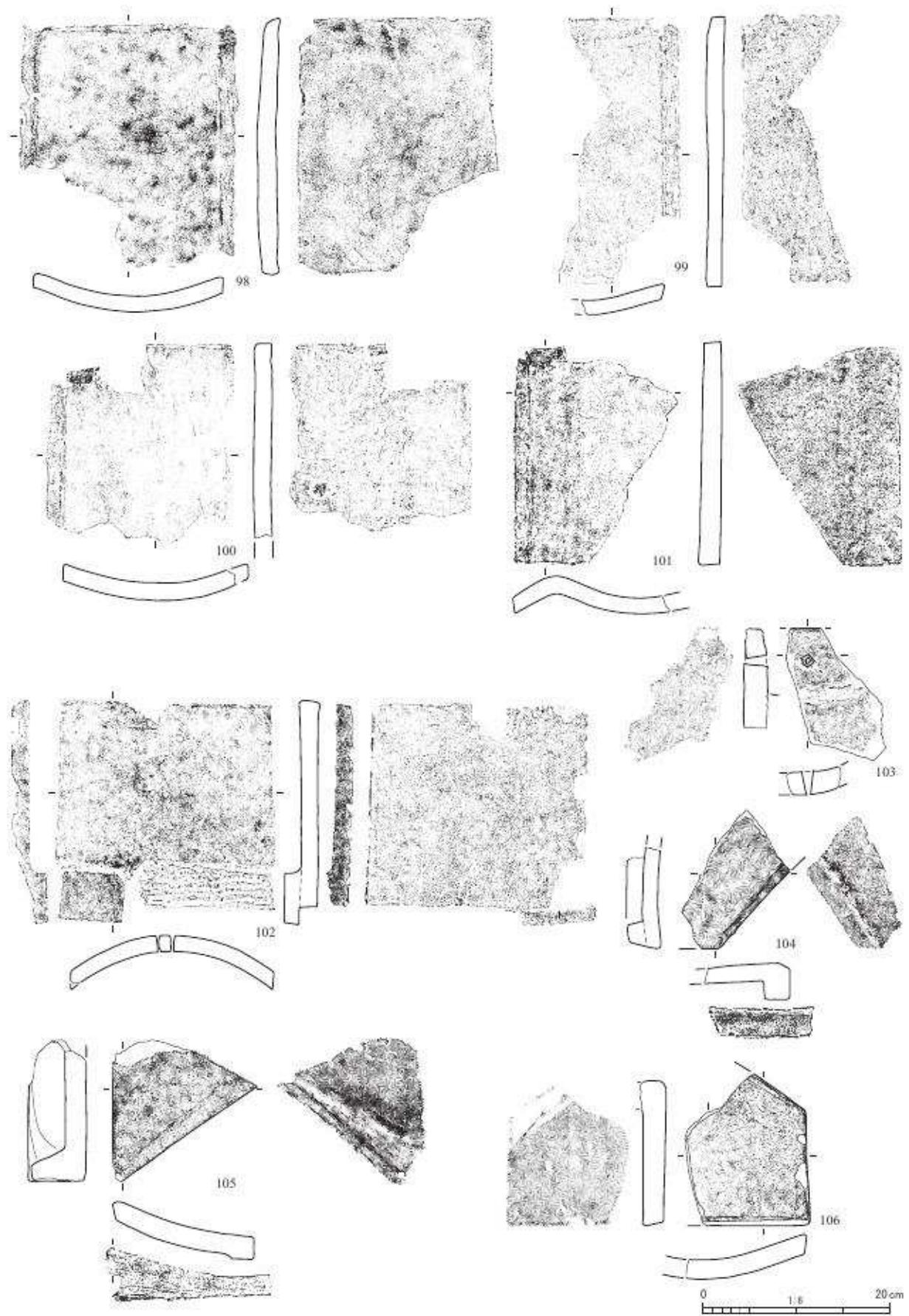


Fig.35 天守曲輪出土瓦（平瓦・棟瓦・角棟伏間瓦・その他）

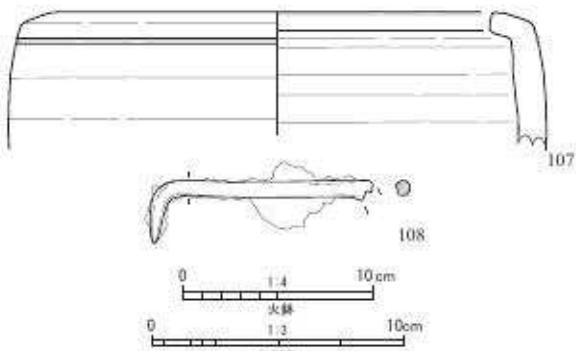


Fig.36 天守曲輪出土土器・鉄製品

95・96はともに8トレンチ7層の出土で凹面に斜め方向のコビキ痕（コビキA）、横方向の縫取りをもつ布の圧痕、縦方向の工具の刺突痕（棒状叩痕）が残る。96は凹面に縄目がみられる。

97は7トレンチ13層からの出土で凹面に強い指ナデ痕がみられる。製作技法の特徴から、18世紀後期以降の所産と推定できる。

98～100は平瓦である。98は8トレンチ7層、

99・100はそれぞれ6トレンチ1層・14層からの出土で凸面にハケ（板ナデ）調整がみられる。

101は7トレンチ13層から出土した棟瓦で、長さ23.9cmを測る。

102は7トレンチ7層から出土した角棟伏間瓦である。長さ24.3cm、幅22.0cmを測る。

103は8トレンチ2層から出土した瓦であり、全体の形状は不明である。104～106は8トレンチ7層から出土した瓦である。全体の形状は不明であるが、隅瓦の一部と推定される。

107は9トレンチ7層から出土した瓦質の火鉢である。体部は丁寧なミガキが施される。胎土や器形の特徴より、近世から近代にかけての所産と思われる。

108は6トレンチ4層から出土した鎌である。

109は7トレンチ7層から出土した美濃産の高田徳利である。輻轆水挽きによる成形で折返の三角口縁を持つ。鉄軸による「濱松」「問渕屋」「〇に十」の銘が入っており、全面に灰白色の石灰釉が施される。明治時代後期から大正時代に属すると思われる。

110～115は4トレンチのSK01(12層)から出土した陶磁器である。110は美濃を所産とする磁器染付の小壺で口縁に口錆を施している。外面に描かれた篆書体の文字は江戸時代末～明治時代前期にみられるが、本例は山呉須ではなく人工の酸化コバルトを使用していることから明治6年以降の所産と考えられる。111は一見、碗蓋のようにも見えるが、磁器染付の小壺で手描きによる簡易な連珠文を胴部内外の一方に施す。器壁が厚手で簡易な作りとなっている。大正時代～昭和時代初期に属する瀬戸・美濃の所産と考えられる。112は九谷焼の色絵蓋である。胎土は陶胎で、外面には手書きによる赤・呉須・金彩を使った上絵の細密な草花文を施す。明治時代初期の所産である。113は磁器の碗蓋である。酸化コバルトによる銅版染付が、天井摘み部以外の全面に施される。明治20年以降の瀬戸・美濃の所産である。114・115はセットの磁器染付の急須と蓋で、手描きによる松竹梅紋を外面に施す。蓋内面には「楠製」の銘が入っている。明治時代後期～末頃に属する美濃の所産である。116は4トレンチのSK01(12層)から出土したかわらけである。底部に回転糸切技法の痕跡がみられるロクロ成形のもので、直線的な口縁が取り付く。

(山口)

(9) 小 結

4～8トレンチで天守曲輪の内側を囲う石垣が検出された。そのうち2箇所(5・7トレンチ)で石垣の基底石を確認し、残存高が2mの石垣であった。天守曲輪外側の石垣と今回検出した内側の石垣を合わせて石塁とし、天守曲輪外側の石垣高から復元すると、高さ3.2m、幅7.2mの大きな石塁であることが判明した。基底石まで確認した5・7トレンチでは、標高33.0m付近で石垣構築時に行った地業層と、その上層で同じく整地層が確認された。この基底石を覆うように整地された層が、安土桃山時代の曲輪面であると想定される。上層からは、江戸時代の盛土と考えられる



Fig.37 天守曲輪出土近代陶磁器等

層が2m弱の厚さで堆積している。堆積状況から、短期間のうちに天守曲輪内が埋め立てられたと想定されるが、出土遺物が希薄なため、詳細な時期については特定できない。また、8トレンチでは、盛土層と同じ高さで大量の瓦が堆積している状況が確認された。堆積している瓦は、製作技法の特徴から、堀尾吉晴が城主を勤めた安土桃山時代の瓦でほぼ占められている。盛土層の上層で、検出された石垣の天端付近で整地されている層も確認され、天守曲輪が埋め立てられた後の曲輪面と考えられる。

出土遺物は、8トレンチの瓦溜りに瓦が集中し、他のトレンチからは瓦の出土が希薄であることが特徴として挙げられる。また、天守曲輪南西隅の4トレンチでは、廃城後にあたる近現代の陶磁器類が豊富に出土し、廃城後の浜松城の姿を知る上でも貴重な発見となった。

(坂下)

第3章 総 括

1 発掘調査の成果

富士見櫓の調査成果 富士見櫓跡周辺の調査では、富士見櫓北側の埋もれていた石垣を検出した。富士見櫓跡東側（1・2トレンチ）では、2m程が自然堆積等により埋もれており、本丸土塁（1トレンチ）で石垣残存高約5m、富士見櫓の櫓台（2トレンチ）で7.5mを確認し、石垣基底部は標高24.6m付近と両者ともほぼ同じであった。一方で、富士見櫓跡西側の3トレンチは、標高29m付近で地山が確認され、石垣残存高が2m弱であった。富士見櫓を挟んで東と西で石垣の高さが大きく変化している背景には、浜松城が天守を頂点とし、西から東へ向かって段々に低くなっていく曲輪の特徴によるものと考えられる。また、引馬宿が浜松城の東側にあり、そこからの眺望を意識した可能性も想定される。富士見櫓台直下の2トレンチからは、他のトレンチと比較して多くの家紋瓦や釘が出土している。また、鰐瓦も出土しているが、すべて線刻で表現されており、過去に出土した鰐瓦と比べ鱗や鰐等の表現方法に違いが見受けられる。これらの瓦や釘類は、櫓台に建てられていた構造物（建物や土塙）に使用されていたものが、城郭建造物の破却に伴い落下したものと推定される。また、標高25.6m付近で整地されており、桔梗紋軒丸瓦が整地層から出土していることから、17世紀中頃以降になんらかの改修がされていると考えられる。各トレンチからは、堀瓦も多く出土しており、周辺に堀瓦葺きの土塙の存在が想定される。

天守曲輪の調査成果 天守曲輪では、4～8トレンチにおいて、石垣面が天守曲輪内側を向く残存高約2.2mの野面積みの石垣が検出された。石垣天端は後世に削平されていることを考慮すると、天守曲輪内外で石垣を高く構築した復元高3.2m、幅7.2mの大きな石塁が曲輪を囲っていたことが判明した。5・7トレンチでは石塁の内側基底部を確認し、標高約33.0m付近で整地されていた。また、天守曲輪内はある時期において短期間のうちに意図的に埋められており、約1.8mの厚さで天守曲輪内が嵩上げされたことも判明した。約1.8mの埋め土の上層（標高35.0m付近）には、整地層が確認されており、何らかの意図をもって石塁を埋めているのは明らかである。石塁が埋められた時期については、盛土層から遺物がほとんど出土していないこともあり不明と言わざるを得ない。しかし、後述する8トレンチの瓦溜り中の瓦の年代から、安土桃山時代もしくは江戸時代でも早い段階に埋められた可能性が指摘できる。

8トレンチからは、大量の瓦が集中して出土した。他のトレンチではこれだけ瓦の集中する地点は確認されておらず、天守曲輪の南東隅にだけ集中している状況がみてとれる。瓦溜り中の軒瓦や丸瓦の製作技法の特徴から、すべて堀尾吉晴が在城した安土桃山時代の瓦であった。瓦溜りの面的な広がりは不明であるが、出土した瓦の量を考えると、天守曲輪南東隅に櫓があった可能性が考えられる。8トレンチは約1.3m掘削したが、さらに下層まで瓦の堆積が続いている。おそらく石垣基底部まで堆積していると思われる。他のトレンチで確認された盛土層が、8トレンチ周辺では瓦で嵩上げされていると思われ、盛土層と瓦堆積層は同時期の埋め立て層と考えられる。瓦溜りが安土桃山時代の櫓で使用されていた瓦と想定すれば、安土桃山時代もしくは江戸時代に入った早い段階で石垣が埋められた可能性が高いと言える。

9トレンチでは天守曲輪内で唯一石垣が検出されなかったが、「青山家御家中配列図」に描かれているように、石垣が東へ折れているため検出されなかつた可能性も考えられる。 (坂下)

西暦	城主	地域の支配者	関連出土品	おもなできごと
1565	飯尾貢連・乗連 ・連竜	今川氏	かわらけ(灯明皿) 瀬戸美濃天日高柄	1560(永禄三)年 横須賀の叛い 1565(永禄八)年 今川氏真、飯尾連竜を殺害
1570	徳川家康	徳川氏	かわらけ(灯明皿) 瀬戸美濃折皿	1568(永禄十一)年 徳川家康、遠江に侵攻 1570(元亀元)年 家康、浜松城築城開始 1572(元亀三)年 三方原の戦い、家康敗北 1578(天正六)年 浜松城修築(天正九年まで) 1579(天正七)年 藤山殿と信康を殺害・秀忠誕生
1580	徳川家康	徳川氏	かわらけ(灯明皿) 瀬戸美濃折皿	1586(天正十四)年 家康、秀吉の臣下となる 1590(天正十八)年 秀吉、家康に関東移封を命ず 1598(慶長三)年 秀吉没する 1600(慶長五)年 関ヶ原の戦い 1601(慶長六)年 家康、東海道に伝馬制を制定
(城代) 菅沼定政				
1590	堀尾吉晴・忠氏	豊臣氏	堀尾期肝丸瓦 堀尾期肝平瓦	
1600	松平忠頼			
1609	水野重仲			1616(元和二)年 家康没する
1619	高力忠房		肝丸瓦 肝平瓦	徳川賴宣、紀伊に移封される 忠房、諸大名に大阪城の修築を命ずる
1638	松平乗寿			
1644	太田資宗・資次		太田氏桔梗紋肝丸瓦 太田氏桔梗紋肝平瓦	1655(明暦元)年 大風雨により、浜松城内に被害
1678	青山宗俊・忠雄 忠重		青山氏御宇鉄紋肝丸瓦	1675(延宝三)年 小天竜が彦助堤により絶切り
1700	本庄(松平) 資俊・資訓	徳川氏 (将軍家)		1680(延宝八)年 大風により、浜松城内に被害
1702			本庄(松平)氏 葵九日輪紋肝丸瓦	1691(元禄四)年 城内の屋敷で火災
1729	松平信祝・信復			1700(元禄十三)年 城内の屋敷で火災
1749	松平(本庄) 資訓・資昌		本庄(松平)氏 葵九日輪紋肝丸瓦	1706(宝永三)年 城内の屋敷で火災
1758	井上正經・正定 正甫			
1800			井上氏井桁紋肝丸瓦	
1817	水野忠邦・忠精		木野氏足湯紋肝丸瓦 (器足不同) 足湯紋鬼瓦の破片	1822(文政五)年 鉄門変換を修理する
1845	井上正春・正直			1854(安政元)年 異年にかけて2度の地震で被害 1860(万延元)年 天竜川が決壊し、城下に被害 1868(慶応四・明治元)年 戊辰戦争、明治と改元
1868			井上氏井桁紋 肝丸瓦	

Fig.38 出土品の年代

2 特筆すべきことがら

富士見櫓 富士見櫓の櫓台およびその周辺において石垣の埋没状況が確認できた意義は大きい。富士見櫓の櫓台の北側は現状で大きく土砂に覆われており、深さ2m以上にわたる石垣の埋没状況が明確になった。今回の調査で判明した櫓台の基底部から石垣天端までの高さは、7.4mである。

石垣を覆う土砂中には、廃城の時期に近い江戸時代後期の瓦や釘などが豊富に含まれている。浜松城の出土品のうち江戸時代にかかる基準資料は不足しているが、今後、こうした資料的な不足を解消する上でも、当該部分の層位的な発掘調査にかかる期待が高まったといえるだろう。また、本丸を囲む石垣北側基底部の標高が24.6m付近であることは、今後の本丸部分の構造理解について考慮すべき情報である。

天守曲輪 天守曲輪では、古い時期の石垣の埋没状況を確認した。石垣の高さは、天守曲輪内側の整地面を基準にして、3.2mである(Fig.39)。厚さ2m以上にわたり天守曲輪内部が埋め立てられ、整地されている。埋土の単位は非常に大きく、一気に土盛りした状況がうかがえる。埋め立てられた時期については、8トレンチで確認できた瓦溜りの遺物の年代観が決めてとなろう。瓦溜りの出土遺物のうち、丸瓦にはコビキAしか認められない。軒平瓦や軒丸瓦も從前から、安土桃山時代の所産とされているものに限定される。これらのことから、瓦溜りが形成されたのは、堀尾氏在城期(1590年～1600年)か、江戸時代でも初期の頃とみるのが妥当であろう。

大量の瓦が確認できた8トレンチ付近の状況が問題として浮上する。他のトレンチでは瓦の出土量が極めて少ないと考えると、天守曲輪南東部分に限定して大量の瓦が埋もれていることは間違いない。この状況を解釈するための一案として、かつて天守曲輪南東隅に櫓などの建物があり、櫓の屋根に載せられた瓦が倒壊や破却に伴ってそのまま近辺に埋められたと考えることも許されよう。その妥当性については、瓦溜りの範囲や、南西部の石垣の構造、櫓の基礎の有無などを明らかにする必要がある。また、大量の土砂を天守曲輪内に入れ込んだ目的についても追及すべきことがらといえるだろう。

近代遺物の出土 今回の調査では、天守曲輪から近代の遺物がまとまって出土したことでも注目できる。天守曲輪から出土した近代の遺物としては、7トレンチから出土した高田徳利(109)と、4トレンチSK01から出土した磁器類(110～115)があげられる。高田徳利は、製作年代が明治時

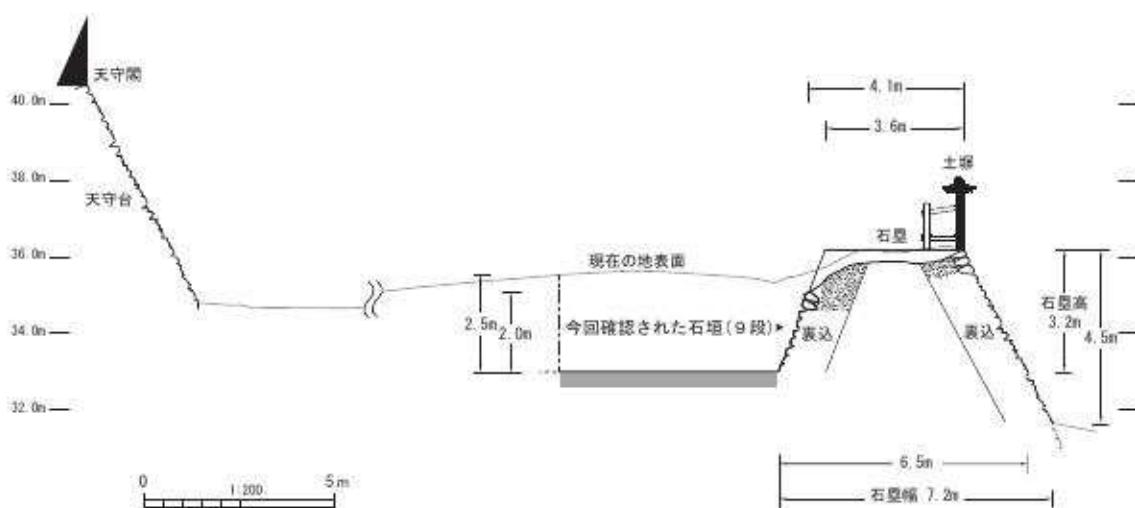


Fig.39 石垣断面模式図



Fig.40 株式会社間渕商店への取材風景



Fig.41 出土遺物（左）と伝世品（右）

代後期～大正時代頃と推定でき、「濱松」、「間渕屋」、「〇に十」の文字がみられる。この徳利にみられる間渕屋は、現在も浜松市の市街地内に現存している。浜松市中区肴町にある株式会社間渕商店であり、この商店は明治時代には造り酒屋を営んでいた。2018年8月9日に実施した間渕亨夫氏（株式会社間渕商店代表取締役社長）からの聞き取りによると（Fig. 40）、間渕屋は創業が元禄年間であり、明治時代から昭和初期にかけて浜松城跡の天守曲輪とその周辺を共同管理していたという。現在の間渕商店には、出土した遺物と全く同じ文字が書かれた徳利が伝えられており（Fig. 41）、出土した本例が間渕商店にかかわるものである可能性は極めて高いものと捉えられる。

明治5年に始まる浜松城の払い下げ（註1、小木1994）後、浜松城の本丸や天守曲輪の建物は急速に姿を消した。本丸には齢松寺が移り、天守曲輪には茶店が置かれた。浜松旧城下町出身の作家、鷹野つぎが幼少の頃の思い出をつづった隨筆集『四季と子供』（鷹野1930）には明治30年代（1897年～1907年）の浜松城跡の天守曲輪について触れられた箇所があり、「門口の一間ほどの片隅には、煙草、果物、ラムネ、菓子の類が並べてありました」と記述されている。明治30年代には、浜松城跡天守曲輪には売店が置かれ、天守台からの眺望を目的とした遊興地として市民に開放されていたことが知られる。

また、吉田初三郎による昭和5年（1930）刊行の『浜松市を中心とする名所史蹟交通鳥瞰図』には、浜松城の天守曲輪が描かれており、天守台（厳密には八幡台にあたる）に物見やぐらが表現されている（本書、図版扉参照）。昭和初期の浜松城跡に置かれた展望台の具体的な姿をうかがうことができるだろう。

今回出土した徳利は、明治時代から大正時代における浜松城跡の天守曲輪施設の経営に間渕屋がかかわったことを示す証拠として注目できる。また、SK01から出土した磁器類も明治時代から昭和初期に収まるものであり、遊興施設としての天守曲輪の履歴を考えるうえで重要な物的資料といえるだろう。

3 今後の展望

以上、浜松城跡 23 次調査の内容と特筆すべきことがらについてふれた。これらの情報をふまえて今後の展望を示し、本書を締めくくりたい。

富士見櫓については、石垣を覆う土砂の厚さが判明したことにより、今後の調査や整備の方針が明確になったものといえる。大量に出土すると予想される遺物群の取り扱いも、問題となろう。天守曲輪については、瓦溜りの範囲、南東隅における櫓の存在の確認が待たれる。瓦溜り内部の層位的把握も問題である。江戸時代に降る瓦が含まれるか否か、改めて検討を加える必要がある。また、天守台や天守門西側虎口、埋門などの基礎構造解明も将来的な課題といえる。

浜松城の歴史を考える上で、発掘調査によって近代や現代の情報につながる視点が開けたことも忘れてならない。SK01 からまとまって出土した近代磁器類や、屋号「間瀬屋」入りの高田徳利は、近代における浜松城跡の利用の具体像を知る上で貴重である。昭和 33 年（1958）の復興天守の建設以後の浜松城跡の姿は語られる機会が多いが（鈴木 2018）、それ以前の浜松城跡の実態は、従来まとまって伝えられることが少なかった。今回の調査で出土した近代遺物は、廃城以後の浜松城跡の歴史をたどる上で、貴重な情報を伝えるものと評価できるだろう。（鈴木）

註

- 1 浜松城の解体は、明治 6 年（1873）の「全国城郭存廃ノ処分並兵營地等撰定方」（いわゆる廢城令）に先立ち、明治 5 年（1872）に始まっていた。明治 5 年、浜松県令、林厚徳から布達された「浜松古城建物別紙之通御払下々候条望之者云々」（旧新居町役場文書）によると、浜松城内の多くの櫓や門がこの年に払下げを受けている（小木 1994）。

引用・参考文献

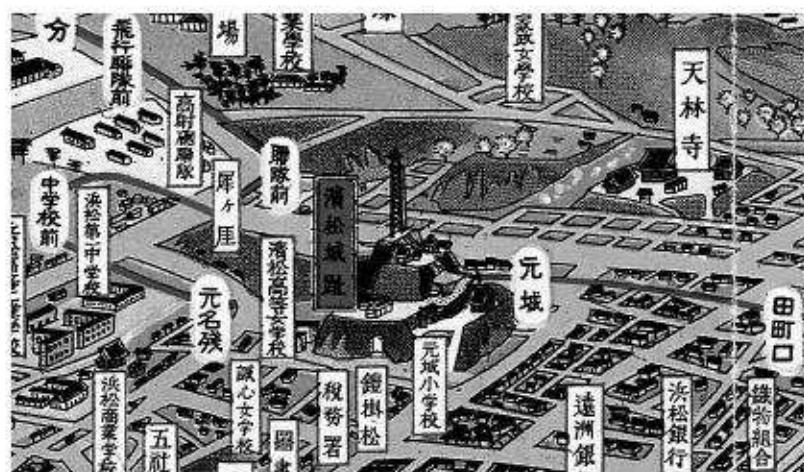
- 小木 香 1994 「浜松城」『図説遠江の城』郷土出版社
鷹野つぎ 1930 『四季と子供』古今書院（2018 年、浜松市が復刊）
鈴木一有 2018 「浜松城における整備のあゆみと観光事業」『文化遺産の世界』第 30 号 文化遺産の世界
編集部
藤澤良祐 1988 「本業焼の研究（2）－赤津村・上水野村を中心に－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VII』瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐ほか 1998 「近世瀬戸焼の生産と流通」『瀬戸市史陶磁史篇六』瀬戸市

Tab. 2 出土遺物観察表

Fig. 遺物取上 No.	トレンチ No.	遺構 No.	地区 No.	層位 No.	種別	細別	反 転 (cm)	口径 ・幅 (cm)	器高 ・長さ (cm)	底径 ・厚さ (cm)	色調	備 考
								・長さ (cm)	・厚さ (cm)			
17	1	13	2	富士見櫓	5層	瓦	軒丸瓦				灰白	連珠左巻三巴紋
17	2	3	2	富士見櫓	1・2層	瓦	軒丸瓦	15.5			灰	連珠左巻三巴紋
17	3	8	2	富士見櫓	4層	瓦	軒丸瓦				灰	連珠左巻三巴紋
17	4	30	2	富士見櫓	7層	瓦	軒丸瓦	14.9			灰	連珠左巻三巴紋
17	5	8	2	富士見櫓	4層	瓦	軒丸瓦		2.0		灰	連珠左巻三巴紋
17	6	30	2	富士見櫓	7層	瓦	軒丸瓦		1.9		灰	連珠左巻三巴紋
17	7	3	2	富士見櫓	1・2層	瓦	軒丸瓦				灰	連珠左巻三巴紋
17	8	15	1	富士見櫓	5層	瓦	軒丸瓦				黄灰	桔梗紋、はなれ砂
17	9	13	2	富士見櫓	5層	瓦	軒丸瓦				灰黄	桔梗紋
17	10	25	2	富士見櫓	1・2層	瓦	軒丸瓦		1.9		灰	繫九目結紋
17	11	8	2	富士見櫓	4層	瓦	軒丸瓦		2.3		灰	繫九目結紋
18	12	3	2	富士見櫓	1・2層	瓦	軒平瓦	27.2	1.9		五葉紋2反転均整唐草紋	
18	13	3	2	富士見櫓	1・2層	瓦	軒平瓦	26.9	2.0		五葉紋2反転均整唐草紋	
18	14	13	2	富士見櫓	5層	瓦	軒平瓦	23.0	2.1		浅黄	三葉紋2反転均整唐草紋
18	15	26	1	富士見櫓	5層	瓦	軒平瓦		1.9		三葉紋2反転均整唐草紋、はなれ砂	
18	16	25	2	富士見櫓	1・2層	瓦	軒平瓦		1.6		黒褐	三葉紋均整唐草紋
18	17	26	1	富士見櫓	5層	瓦	軒平瓦		2.3		灰	唐草紋
18	18	13	2	富士見櫓	5層	瓦	軒平瓦				灰	唐草紋
18	19	13	2	富士見櫓	5層	瓦	軒平瓦		2.6		灰	唐草紋
18	20	3	2	富士見櫓	1・2層	瓦	軒平瓦	26.5	1.9		灰オリーブ	菊紋唐草紋
18	21	30	2	富士見櫓	7層	瓦	軒平瓦		1.9		菊紋	菊紋唐草紋
18	22	30	2	富士見櫓	7層	瓦	軒平瓦		2.2		黄灰	菊紋唐草紋
18	23	30	2	富士見櫓	7層	瓦	軒平瓦		1.9		灰黄褐	菊紋唐草紋
18	24	3	2	富士見櫓	1・2層	瓦	軒平瓦		2.1		灰	唐草紋
18	25	30	2	富士見櫓	7層	瓦	軒平瓦		1.9		灰	唐草紋
18	26	3	2	富士見櫓	1・2層	瓦	軒平瓦		1.9		灰	唐草紋
19	27	15	1	富士見櫓	5層	瓦	丸瓦		2.3		灰白	コピキA、横縫い取り痕
19	28	26	1	富士見櫓	5層	瓦	丸瓦		2.0		灰	針穴1、コピキA、布目単位7本/cm ²
19	29	26	1	富士見櫓	5層	瓦	丸瓦	14.5	29.1	2.3	灰黄	吊り紐痕、布目単位9本/cm ²
19	30	13	2	富士見櫓	5層	瓦	丸瓦	13.0	2.1		にぶい黄	針穴1、コピキBか、吊り紐痕
19	31	6	4	富士見櫓	1・2層	瓦	丸瓦	15.0	2.2		黒褐	コピキBか、布目単位7本/cm ²
19	32	13	2	富士見櫓	5層	瓦	丸瓦	14.2	1.9		灰白	コピキB、布目単位13本/cm ² 、棒状叩痕
19	33	25	2	富士見櫓	1・2層	瓦	丸瓦	15.8	2.4		灰白	針穴1、布目単位14本/cm ²
19	34	30	2	富士見櫓	7層	瓦	端瓦		2.4		灰	穿孔1、布目単位7本/cm ²
19	35	30	2	富士見櫓	7層	瓦	丸瓦		1.9		黄灰	布目単位7本/cm ² 、棒状叩痕
20	36	3	2	富士見櫓	1・2層	瓦	平瓦	26.9	28.5	1.9	灰	縱・横方向ハケ(板ナデ)
20	37	6	1	富士見櫓	1・2層	瓦	平瓦		2.1		灰	横方向調整窓、多方向ハケ(板ナデ)
20	38	25	2	富士見櫓	1・2層	瓦	平瓦	26.2	27.8	1.9	灰	縱方向ハケ(板ナデ)
20	39	30	2	富士見櫓	7層	瓦	平瓦		30.3	2.1	暗灰黄	多方向ハケ(板ナデ)
20	40	10	1	富士見櫓	3・4層	瓦	平瓦	22.7	26.4	1.9	浅黄	横方向ハケ(板ナデ)
20	41	11	3	富士見櫓	3層	瓦	平瓦	20.3	24.8	1.7	黄灰	横方向板ハケ(板ナデ)
21	42	26	1	富士見櫓	5層	瓦	熨斗瓦	19.6	24.7	1.9	灰	打欠痕、縱・横方向ハケ(板ナデ)
21	43	1	3	富士見櫓	1・2層	瓦	端瓦		2.5		灰白	
21	44	1	3	富士見櫓	1・2層	瓦	端瓦		1.9		灰	
21	45	6	1	富士見櫓	1・2層	瓦	端瓦		1.7		灰	
21	46	31	1	富士見櫓	8層	瓦	鰐瓦		1.7		灰	
21	47	35	2	富士見櫓	5層	瓦	不明瓦					
21	48	13	2	富士見櫓	5層	瓦	面戸瓦または道具瓦		7.5	1.3	淡黄	穿孔3、線刻「口た」
21	49	13	2	富士見櫓	5層	瓦	面戸瓦または道具瓦	10.2		2.0	灰黄	棒状叩痕か
21	50	13	2	富士見櫓	5層	瓦	不明瓦			1.8	黄灰	ハケ(板ナデ)
22	51	12	2	富士見櫓	4層	鉄製品	和釘	(2.2)	(17.5)			径0.6cm
22	52	4	2	富士見櫓	3層	鉄製品	和釘	(1.6)	(17.8)			径0.6cm
22	53	4	2	富士見櫓	3層	鉄製品	和釘	(1.6)	(8.8)			径0.6cm
22	54	4	2	富士見櫓	3層	鉄製品	和釘	(1.5)	(8.4)			径0.6cm
22	55	4	2	富士見櫓	3層	鉄製品	和釘	(1.5)	(5.7)			径0.5cm
22	56	16	2	富士見櫓	5層	鉄製品	和釘	(2.0)	(5.6)			径0.6cm
22	57	4	2	富士見櫓	3層	鉄製品	和釘	(2.2)	(3.5)			径0.8cm
22	58	14	2	富士見櫓	5層	鉄製品	和釘	(1.3)	(4.0)			径0.6cm
22	59	4	2	富士見櫓	3層	鉄製品	和釘	(0.9)	(4.5)			径0.5cm
22	60	4	2	富士見櫓	3層	鉄製品	和釘	(0.8)	(4.9)			径0.4cm
22	61	4	2	富士見櫓	3層	鉄製品	和釘	(0.8)	(3.9)			径0.3cm

Fig. 遺物取上	トラン	遺構	地区	層位	種別	細別	反転	口徑	器高	底径	色調	備考	
								(cm)	(cm)	(cm)			
22 62 4 2		富士見櫓	3層	鉄製品	和釘		(0.7) (2.3)			径0.3cm			
22 63 4 2		富士見櫓	3層	鉄製品	和釘		(0.6) (4.3)			径0.4cm			
22 64 4 2		富士見櫓	3層	鉄製品	和釘		(0.8) (3.8)			径0.3cm			
22 65 4 2		富士見櫓	3層	鉄製品	和釘		(0.6) (2.9)			径0.3cm			
22 66 4 2		富士見櫓	3層	鉄製品	和釘		(0.6) (2.6)			径0.4cm			
22 67 14 2		富士見櫓	5層	鉄製品	和釘		(1.9) (2.3)			径0.6cm			
22 68 4 2		富士見櫓	3層	鉄製品	和釘		(0.9) (1.9)			径0.5cm			
22 69 14 2		富士見櫓	5層	鉄製品	和釘		(0.7) (3.1)			径0.5cm			
22 70 14 2		富士見櫓	5層	鉄製品	轍手状铁棒		(2.3) (2.9)			径0.6cm			
23 71 46 1		富士見櫓	10層	土師器	かわらけ	反	[13.6] (2.3)			に赤い黄模			
23 72 6 1		富士見櫓	1・2層	陶磁器	丸碗	反	[11.2] (4.8)			地淡黄 種オーブ黄			
32 73 19 8		天守曲輪	2層	瓦	軒丸瓦			2.8	灰	連珠左巻三巴紋、コピキA、布目単位14本/cm			
32 74 23 9		天守曲輪	8層	瓦	軒丸瓦				灰	連珠左巻三巴紋			
32 75 17-1 6 17	天守曲輪	2層	瓦	軒丸瓦					灰	連珠左巻三巴紋			
32 76 21 9		天守曲輪	7層	瓦	軒丸瓦				灰	連珠左巻三巴紋			
32 77 22 7		天守曲輪	1層	瓦	軒丸瓦			2.6	灰	珠紋			
32 78 17-5 7 17	天守曲輪	1層	瓦	軒丸瓦					灰	巴紋			
32 79 29 9		天守曲輪	10層	瓦	軒丸瓦				灰	繫九目結紋			
32 80 40 8		天守曲輪	7層	瓦	馬伏闕瓦			2.6	灰	連珠左巻三巴紋、コピキA、吊り紐痕 布目単位12本/cm			
32 81 40 8		天守曲輪	7層	瓦	軒平瓦			2.2	灰	三葉紋3反転均整唐草紋			
32 82 17-4 6 17	天守曲輪	2層	瓦	軒平瓦			1.4	灰黃	三葉紋3反転均整唐草紋				
32 83 21 9		天守曲輪	7層	瓦	軒平瓦				灰	斜格子紋			
32 84 39 8		天守曲輪	7層	瓦	軒平瓦				灰	斜格子紋			
32 85 36 5		天守曲輪	3層	瓦	軒平瓦			1.9	灰	五葉紋3反転均整唐草紋			
33 86 40 8		天守曲輪	7層	瓦	丸瓦		14.9	2.5	灰白	綱目印痕、コピキA、横縫い取り痕 布目単位10本/cm			
33 87 40 8		天守曲輪	7層	瓦	丸瓦		13.1	28.4	2.3	灰	綱目印痕、コピキA、吊り紐痕 横縫い取り痕、布目単位12本/cm		
33 88 39 8		天守曲輪	7層	瓦	丸瓦		13.0	2.1	灰	綱目印痕、コピキA、吊り紐痕 横縫い取り痕、布目単位18本/cm			
33 89 45 8		天守曲輪	7層	瓦	丸瓦		12.5	2.1	灰	綱目印痕、コピキA、吊り紐痕 横縫い取り痕、布目単位17本/cm			
34 90 17-8 7 17	天守曲輪	13層	瓦	丸瓦			13.9	2.2	灰白	綱目印痕、コピキA、吊り紐痕、横縫い取 り痕、布目単位15本/cm、綱目印痕			
34 91 17-1 6 17	天守曲輪	2層	瓦	丸瓦			13.1	2.4	灰	綱目印痕、コピキA、吊り紐痕 横縫い取り痕、布目単位11本/cm			
34 92 42 7		天守曲輪	6層	瓦	丸瓦		13.0	2.1	灰	コピキA、吊り紐痕、横縫い取り痕 布目単位10本/cm			
34 93 40 8		天守曲輪	7層	瓦	丸瓦		13.0	29.3	2.1	灰	コピキA、吊り紐痕、横縫い取り痕 布目単位12本/cm、板状工具痕		
34 94 40 8		天守曲輪	7層	瓦	丸瓦		14.0	2.9	灰	軒穴1、横縫い取り痕、布目単位9本/cm			
34 95 45 8		天守曲輪	7層	瓦	丸瓦		14.9	2.1	灰白	コピキA、横縫い取り痕 布目単位7本/cm、綱目印痕			
34 96 40 8		天守曲輪	7層	瓦	丸瓦		13.2	2.1	灰	綱目印痕、コピキA、横縫い取り痕 布目単位8本/cm、綱目印痕			
34 97 38 7		天守曲輪	13層	瓦	丸瓦		14.0	3.1	灰オリーブ指ナデ				
35 98 40 8		天守曲輪	7層	瓦	平瓦		20.4	27.7	2.0	灰	縱方向・横方向板ナデ(ハケ)		
35 99 17-12 6 17	天守曲輪	1層	瓦	平瓦			29.1	1.6	灰	縱方向・多方向板ナデ(ハケ)			
35 100 41 6		天守曲輪	14層	瓦	平瓦			1.8	灰	切り欠き、横方向板ナデ(ハケ)			
35 101 38 7		天守曲輪	13層	瓦	棟瓦		23.9	2.1	灰	切り欠き、横方向板ナデ(ハケ)			
35 102 43 7		天守曲輪	7層	瓦	角棟伏闕瓦		22.0	24.3	1.6	灰	穿孔2、横方向板ナデ(ハケ)		
35 103 19 8		天守曲輪	2層	瓦	不明瓦			2.5	灰	穿孔1			
35 104 45 8		天守曲輪	7層	瓦	隅瓦			1.7	灰				
35 105 45 8		天守曲輪	7層	瓦	隅瓦			2.2	灰				
35 106 40 8		天守曲輪	7層	瓦	隅瓦			2.3	灰				
36 107 21 9		天守曲輪	7層	且賓主器	火鉢	反	[24.0] (7.3)			黒褐	底部に穿孔1		
36 108 34 6		天守曲輪	4層	鉄製品	鍵		(2.5) (8.8)		-	灰	穿孔1		
37 109 43 7		天守曲輪	7層	陶器	高田聰利		3.1			地灰白 種灰白			
37 110 44 4	SK01	天守曲輪	12層	磁器	小坪		7.2	3.1	2.4	地白 種灰白			
37 111 44 4	SK01	天守曲輪	12層	磁器	小坪		9.0	3.2	3.7	地白 種明緑灰			
37 112 44 4	SK01	天守曲輪	12層	陶器	碗(蓋)		9.8	3.3		地灰白 種灰白			
37 113 44 4	SK01	天守曲輪	12層	磁器	碗(蓋)		9.8	2.9		地白 種灰白			
37 114 44 4	SK01	天守曲輪	12層	磁器	急刻(身)		6.3	5.9	5.3	地白 種明緑灰			
37 115 44 4	SK01	天守曲輪	12層	磁器	急須(蓋)		5.3	3.5		地白 種明緑灰			
37 116 44 4	SK01	天守曲輪	12層	土師器	かわらけ		6.9	2.0	3.7	橙			

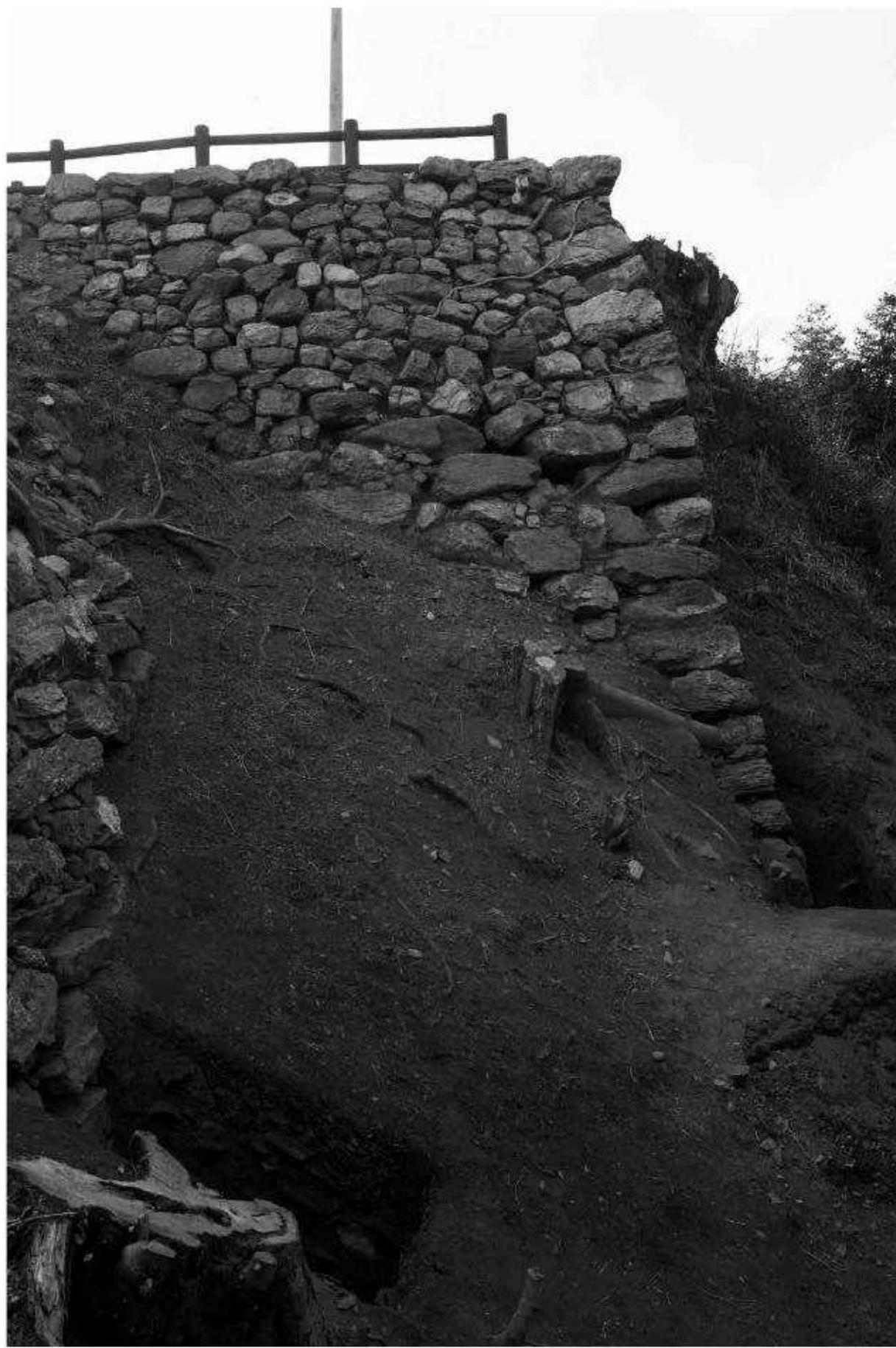
図版
PLATE



浜松市を中心とする名所史蹟交通鳥瞰図（部分、吉田初三郎作、昭和5年）



富士見櫓及び本丸土塁全景（北西から）



富士見櫓調査状況全景（東から）



1 本丸土塁北側石垣全景（北西から）



2 1 トレンチ本丸土塁北側石垣全景（北から）



3 1 トレンチ本丸土塁北側石垣土層堆積状況（北東から）



1 2 トレンチ富士見櫓東側石垣（東から）



2 2 トレンチ富士見櫓東側石垣（東から）



3 2 トレンチ富士見櫓石垣基部（東から）



4 2 トレンチ富士見櫓北側石垣（北から）



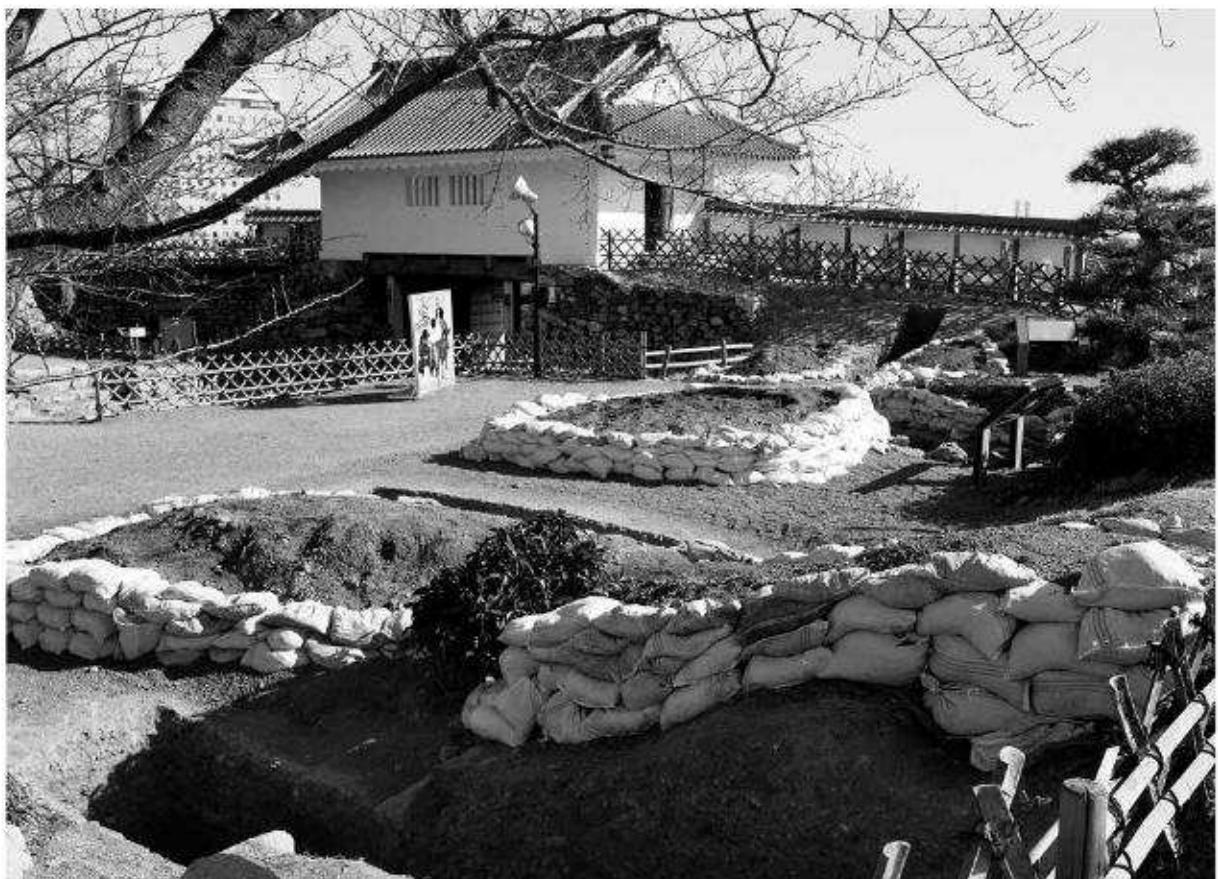
3 トレンチ富士見櫓土壘北側石垣全景（北東から）



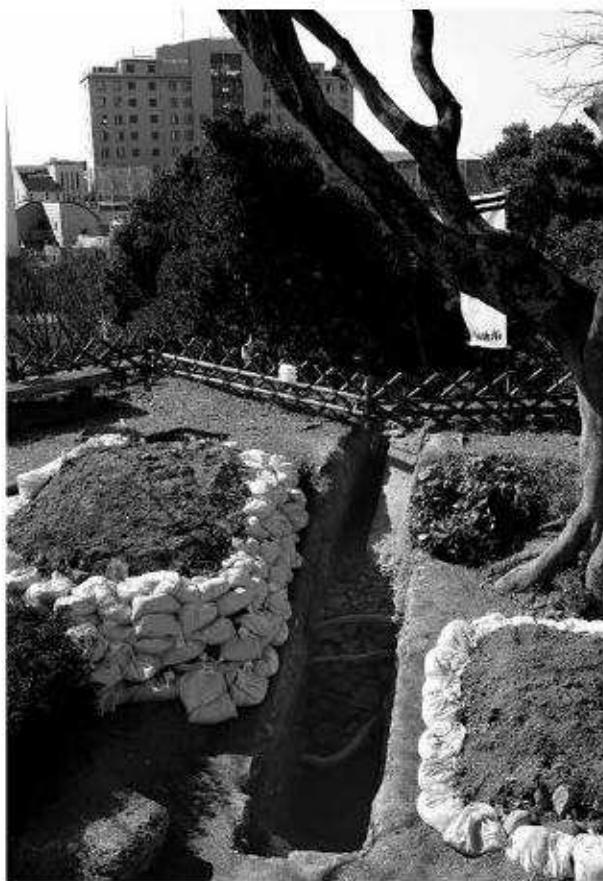
1 3 トレンチ富士見櫓土塁北側石垣全景（北東から） 2 3 トレンチ富士見櫓土塁北側石垣（北から）



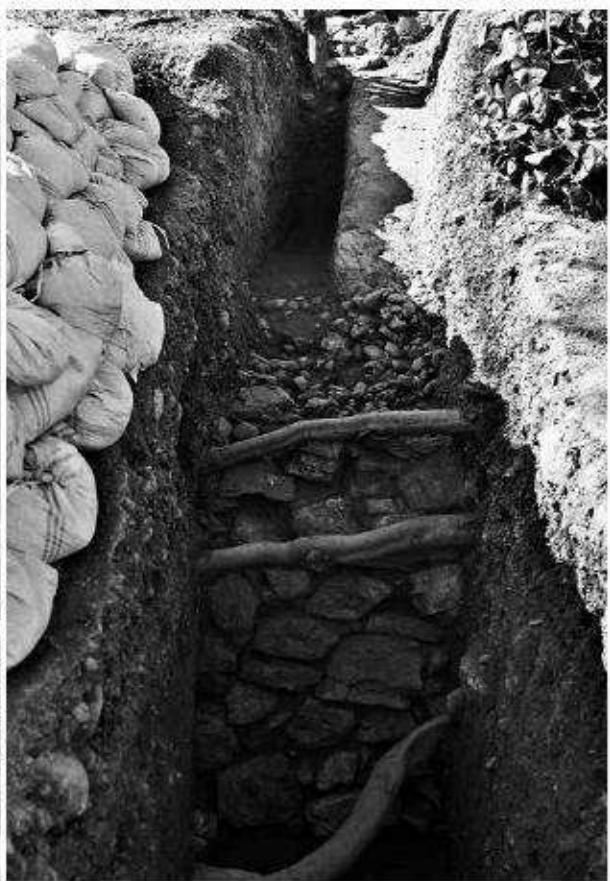
3 3 トレンチ富士見櫓土塁北側石垣（北東から）



1 天守曲輪調査状況（南西から）



2 4 トレンチ全景（北東から）



3 4 トレンチ天守曲輪石塁内部石垣（北東から）



1 5 トレンチ天守曲輪石壘内部石垣（北から）



2 5 トレンチ土層堆積状況（北西から）



3 7 トレンチ天守曲輪石壘内部石垣（北から）



4 7 トレンチ土層堆積状況（北西から）



5 7 トレンチ徳利出土状況（北西から）



1 6 トレンチ天守曲輪石垣内部石垣（北から）



2 9 トレンチ全景（西から）



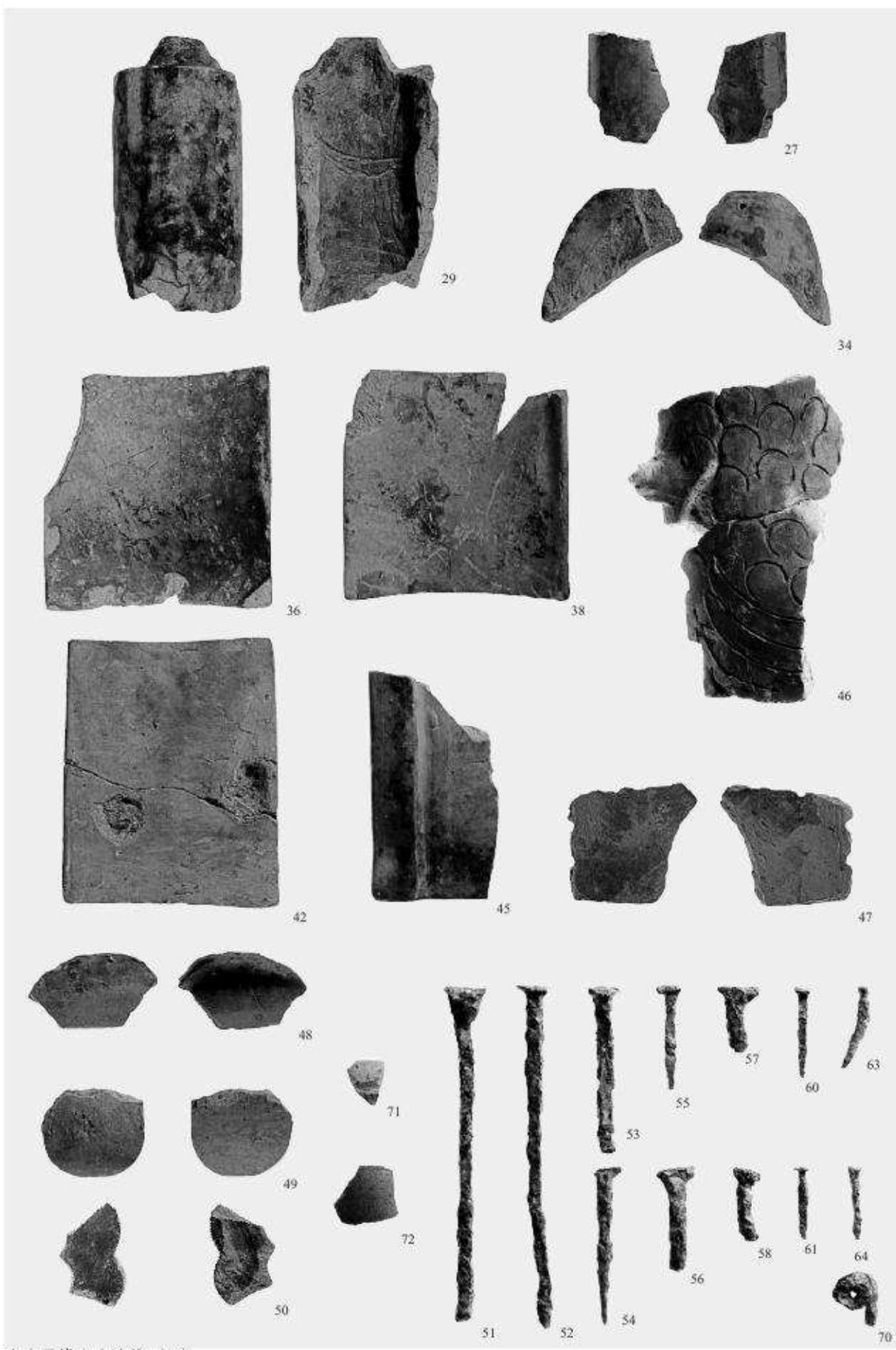
3 8 トレンチ天守曲輪石垣内部石垣（北から）



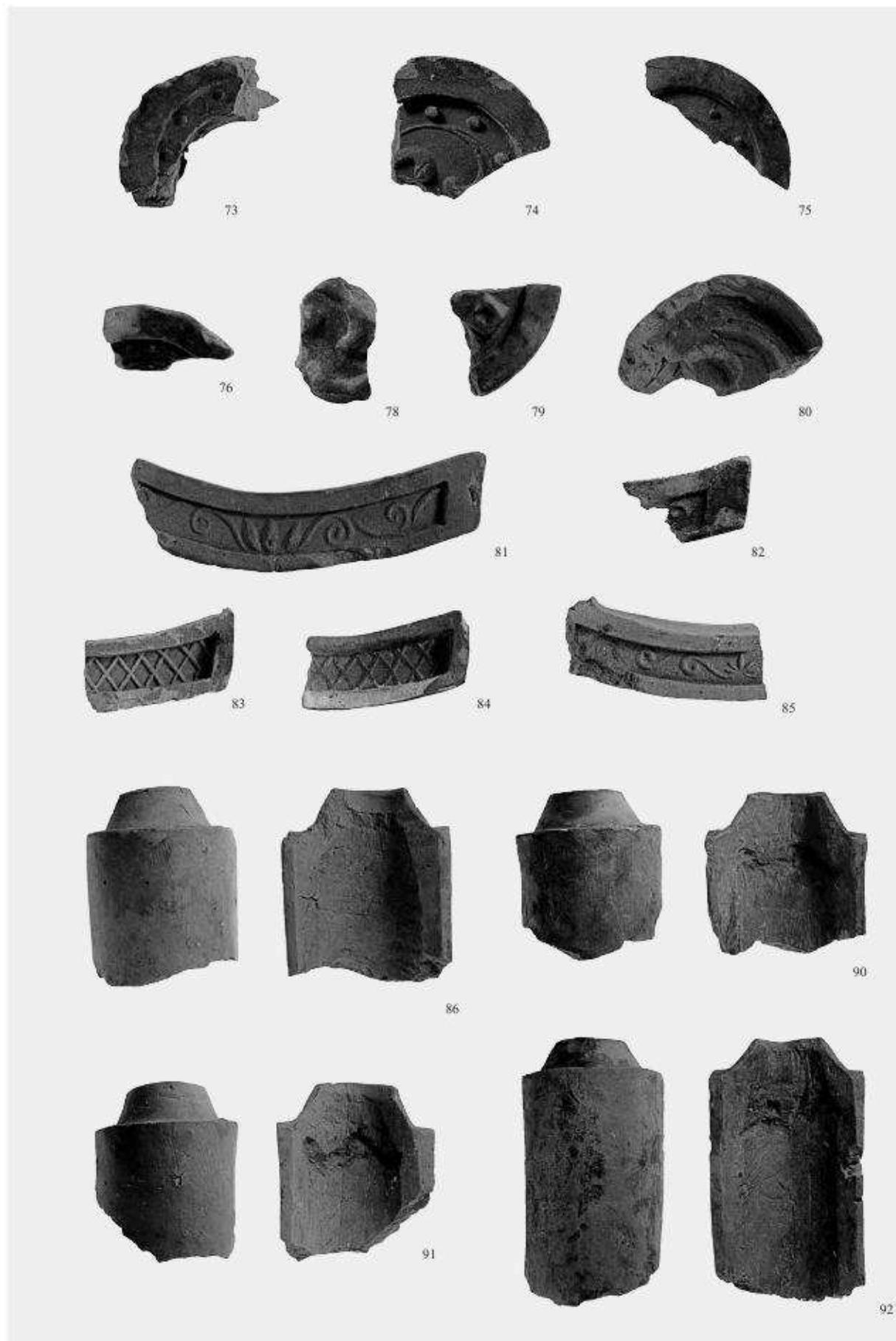
4 8 トレンチ瓦検出状況（北から）



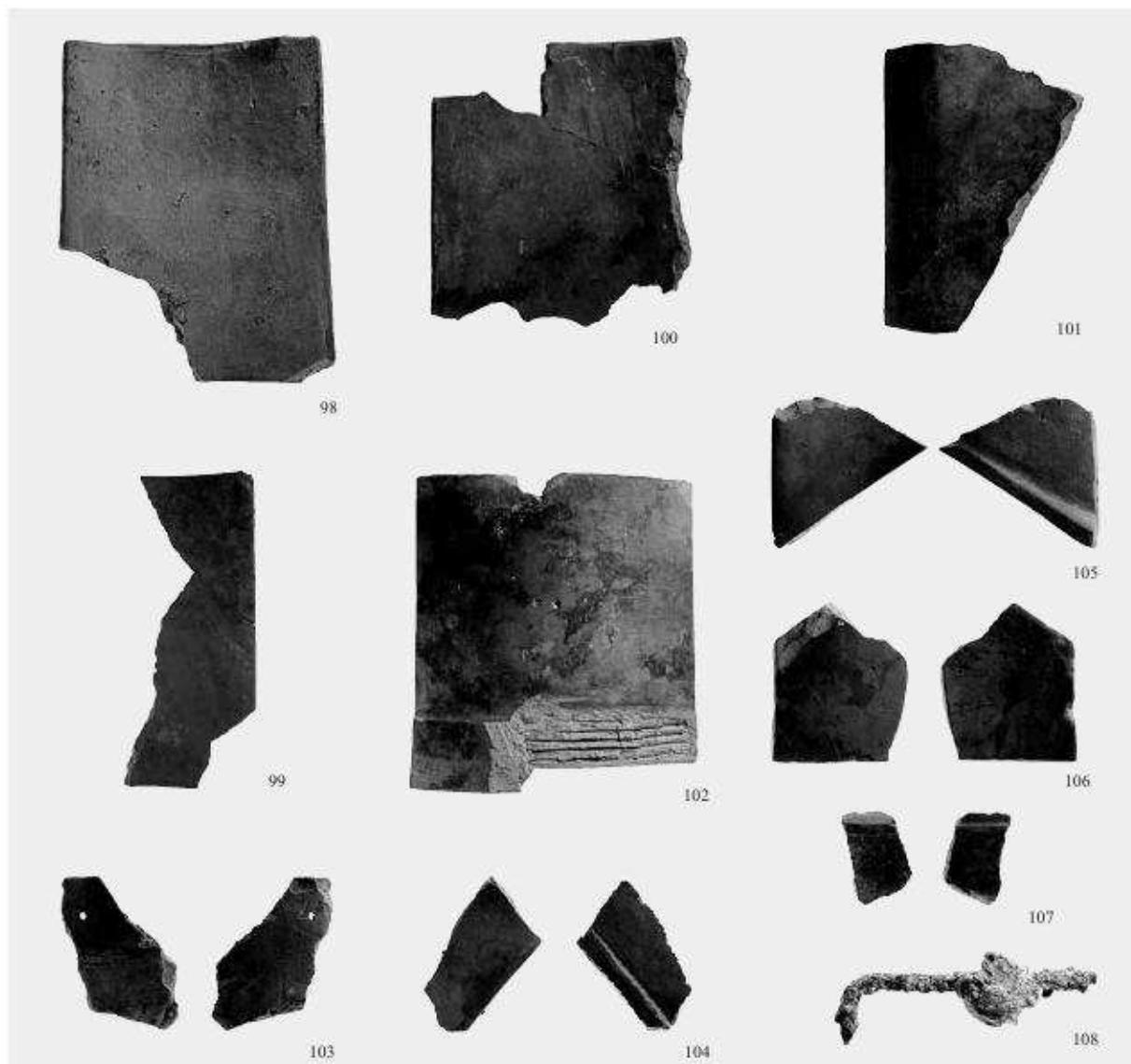
富士見櫓出土遺物（1）



富士見櫓出土遺物（2）



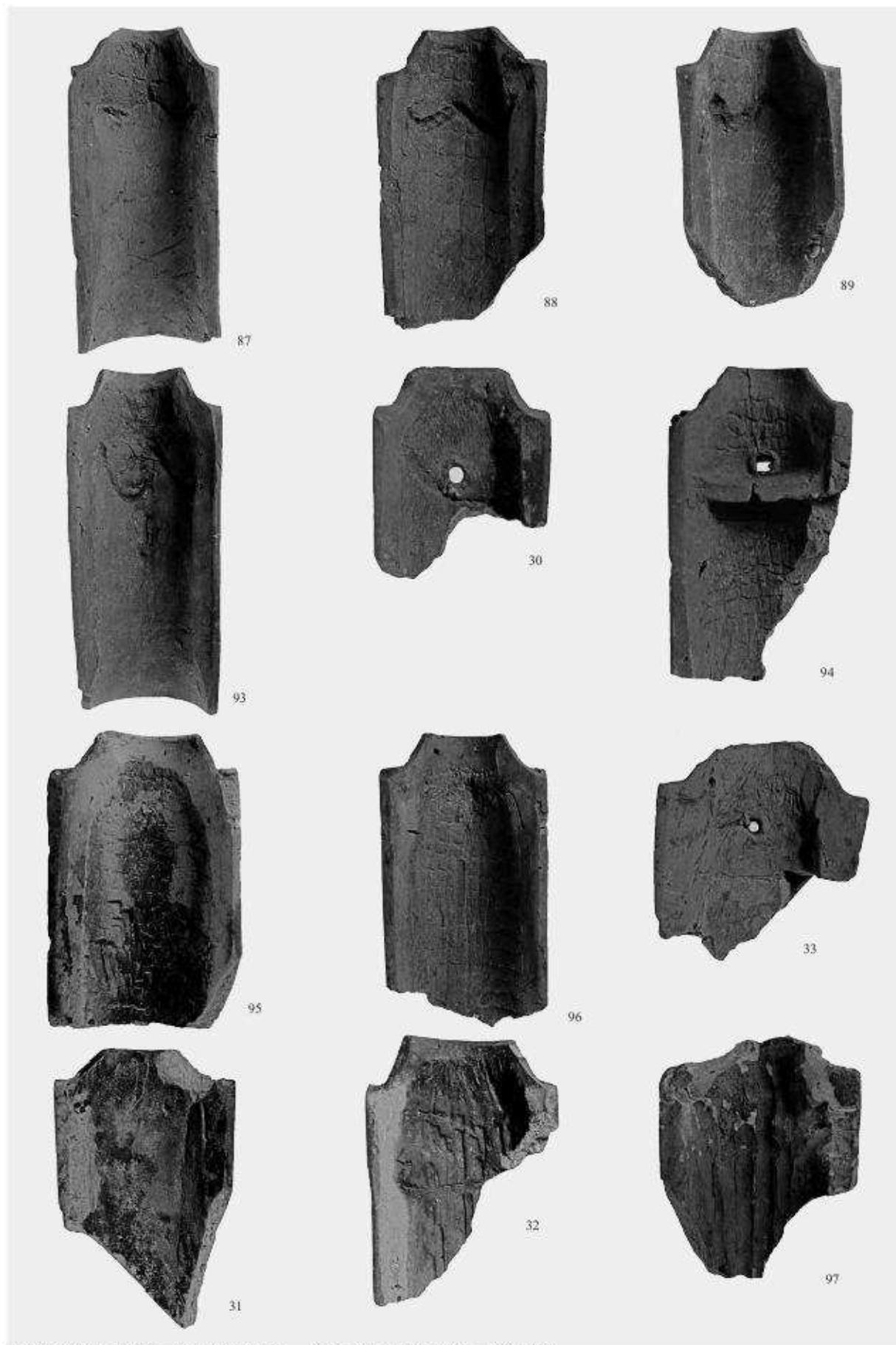
天守曲輪出土遺物（1）



1 天守曲輪出土遺物（2）



2 天守曲輪出土遺物（3）



丸瓦凹面拡大 (30～33：富士見櫓、87～89・93～97：天守曲輪)

報 告 書 抄 錄

浜松城跡 12

2018年12月28日

編集機関 浜松市教育委員会
浜松市市民部文化財課
(教育委員会の補助執行機関)
〒430-8652 浜松市中区元城町103-2

発行機関 浜松市教育委員会
印 刷 中部印刷株式会社

Hamamatsu Castle

The 23rd excavation report

A Report of Archaeological Investigation
on 16th-19th Century Castle in Western Shizuoka, Japan



December, 2018

Hamamatsu Municipal Board of Education